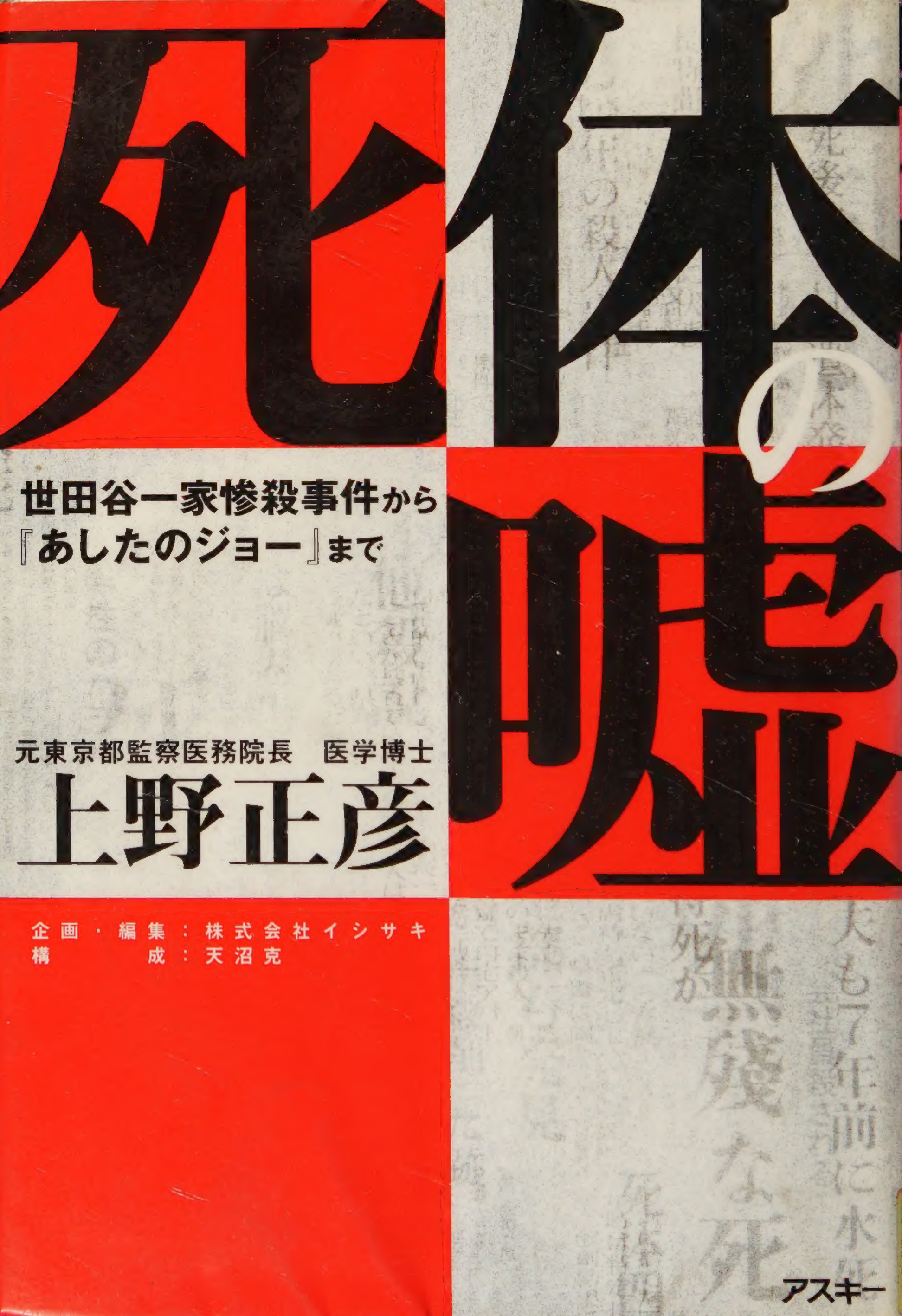


死体の嘘

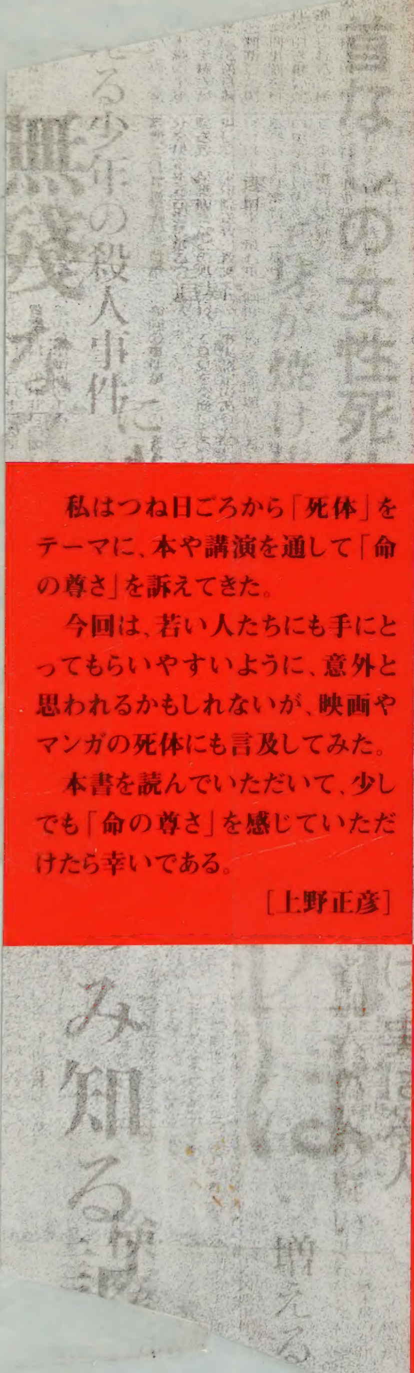
世田谷一家惨殺事件から
『あしたのジョー』まで

元東京都監察医務院長　医学博士

上野正彦

企画・編集：株式会社イシサキ
構　　　成：天沼克

アスキー



私はつね日ごろから「死体」をテーマに、本や講演を通して「命の尊さ」を訴えてきた。

今回は、若い人たちにも手にとってもらいやすいように、意外と思われるかもしれないが、映画やマンガの死体にも言及してみた。

本書を読んでいただいて、少しでも「命の尊さ」を感じていただけたら幸いである。

［上野正彦］

Digitized by the Internet Archive
in 2024

https://archive.org/details/unset0000unse_b3q2

はじめに

「凶悪事件」が増えている。

私が現職のときと、犯罪を取り囲む環境が違ってきていると思うのは、気のせいだろうか。

当時は、検死をするたびに、死体を通じて犯人の感情や、やむにやまれず犯罪に手を染めてしまった哀しみのようなものが伝わってきたものだ。言わば「死体を通じて犯人とも対話していた」ように思う。

ところが、次々と起こる昨今の事件からは、死体から犯人の表情や、感情が見えなくなっている。これは私が年をとったからというだけではなく、人の心の中に起きた大きな変化のせいではないか。

一番大きな変化は、「命の尊さ」が軽んじられてきているという事実だ。ゲームや実験のように人を殺す犯人たち。増加し続ける自殺者たち……。

はじめに

「凶悪事件」が増えている。

私が現職のときと、犯罪を取り囲む環境が違ってきていると思うのは、気のせいだろうか。

当時は、検死をするたびに、死体を通じて犯人の感情や、やむにやまれず犯罪に手を染めてしまった哀しみのようなものが伝わってきたものだ。言わば「死体を通じて犯人とも対話していた」ように思う。

ところが、次々と起こる昨今の事件からは、死体から犯人の表情や、感情が見えなくなっている。これは私が年をとったからというだけではなく、人の心の中に起きた大きな変化のせいではないか。

一番大きな変化は、「命の尊さ」が軽んじられてきているという事実だ。ゲームや実験のように人を殺す犯人たち。増加し続ける自殺者たち……。

私はつね日ごろから「死体」をテーマに、本や講演を通して「命の尊さ」を訴えてきた。死体や解剖学について少しでも知ってもらうことが「命の尊さ」を感じる近道だと思うからである。

今回は、10代や20代の人たちにも手に取ってもらいやすいように、この本の制作にかかわってくれた若い編集者たちのサポートを得て、若い人たちにおなじみの映画やマンガの死体にも言及してみた。

そのため、この本にはふたつの側面がある。ひとつは、法医学者としての立場から凶悪な事件を取り上げるという側面。そして、もうひとつは、テレビや映画、マンガに見られる、まちがった死体や死のイメージを訂正するという側面。

後者に関しては、私もいろいろと悩んだ。「怒髪天をつく」や「白髪三千丈」といった表現は、たとえ医学的にまちがっていたとしても、作品の中で使用するぶんには何の問題もなく、むしろ好ましいと考えている。そうした作品世界の魅力に水をさすような真似は嫌いだし、したくないと思う。文字による表現と、映画やマンガによる表現は違

うし、現実離れした誇張がときにはその作品の芸術性を高め、あるいは視聴者に強烈な印象を与えるわけだから。

しかし、最近の事件を見るたび願ってきた「命の尊さ」を若い人にも語るうえで、この要素は外せないと思い、こうした構成をとった。

こうした意図を踏まえて著したものなので、ときには意地悪なことを言うかもしれないが、取り上げた作品の作者の方々は、どうか気を悪くされないようにお読みいただきたい。

本書を読んでいただいて、少しでも「命の尊さ」を感じていただけたら幸いである。

上野正彦

上野正彦

大阪池田小児童殺傷事件を語る

理解できない犯人の動機

最近、陰惨な事件が頻発していますが、この事件はひどいものでした。犯人は、10分間という短い時間で、無抵抗の子どもを8人も無差別に殺しています。

自分が検死していた頃と比べて、動機も含めて事件自体が変わってきているというか、こういう事件を起こす精神状態がまず理解できません。宅間容疑者は「死刑になるために子どもを殺した」と供述していますが、あれもおかしい。死にたいのなら、自殺すれば

【事件概要】
2001年6月8日の午前10時15分頃、大阪府池田市緑丘1丁目の大阪教育大学付属池田小学校に元兵庫県伊丹市職員・宅間守容疑者が乱入し、持っていた出刃包丁で逃げる児童らを追いかけ、教諭3人を含む23人が首や背中などを刺した。これにより、児童8人が死亡、15人が重軽傷を負った。宅間は「なにもかも嫌になった。死刑にしてほしい」と供述した。

・が→に

いいではないかと思います。

この事件を見て思ったのは、昔よりも、犯人の表情が見えにくくなっているということです。私が現職だった頃は、検死すると、その死体を通じて犯人の苦悩の表情をうかがい知ることができました。やはり、「殺す」には、大変な苦悩を伴いながら決断を下したんだと思います。ふつうなるべくだったら、殺さずに済ませたいものです。

この事件も含めて、ここ最近の事件の特徴ですけれども、「なぜ、そういうことをするのか」というところに論理の飛躍があります。

「死刑になりたいから人を殺す」なんていう理屈は、よくわかりません。

この宅間容疑者は、言っていることも、やっていることも子どもじみている印象を受けます。大人は狙えないから、子どもを狙うという心理は、理解しがたいものを感じずにはいられません。

ただ、人間の心自体が変わってきて屈折してきている、ということは言えると思います。

子どもの身体の壊れやすさ

この事件の一番の特徴は、子どもを狙ったということです。

他にも、「抵抗されにくい」「刺しやすい」——そういう理由で子どもがターゲットにされることはよくあります。ただ、これだけ大量の被害者が出るのは稀でしょう。

子どもは凶器に対する抵抗力が少ないから、大人と比べると死にやすい。

小さい子どもの遺体の特徴として、防御創（凶器などから身を守る際に手のひらや指にできる傷のこと）が少ないことが挙げられます。

小さい子は何が起こっているか把握できないまま傷を受けてしまうのでしょう。

もちろん、手などで攻撃をかわそうとはしますから手に傷が残ることはあります。でも、大人のようにやり返したり、積極的に抵抗する

ことはないので、一方的にやられてしまう。つまり、刃物で大人を殺すことはそう簡単にいくことではないのです。ところが子どもは簡単に殺せてしまう。

子どもは身体が小さいから、同じ傷の刺し方でも大人に比べると、簡単に急所に届いてしまう。宅間容疑者の持っていた刃物は刃渡り15センチといいますから、かなり大きなものです。大人でもこれで太い血管を切られればあっという間に死んでしまいます。子どもならなおさらです。

大人なら急所には届かない傷でも、子どもは届いてしまう。15センチの傷だから、15センチの刃物だとはかぎらない。子どもだと、20センチぐらい入ってしまう場合もあるんです。

たとえば、被害者の戸塚健大ちゃんに残された傷は、右胸から右のろっ骨2本を切られて、左胸まで達していたといいます。身体の中心部分に刃が入っていますから、この場合は心臓か大動脈部分を切られた失血死ということができるでしょう。

これが大人の場合だったら、右胸なら右胸で止まってしまいます。子どもは小さいから刺し通してしまった。ろっ骨も大人みたいに硬くない。押されたら、そのままへこんで傷が深く入るんです。大人はそうはいかないでしょう。

加えて、骨が柔らかいことが挙げられます。

子どもの骨は柔軟性があって、たとえば車に轢（ひ）かれると、大人はろっ骨が枯れ木のように、つぶれてぺしゃんこになるんですが、子どもは膨らんでもとに戻ってしまう。新しい竹みたいに。

折れた状態で戻っているから、丹念に検死しないとよくわからない。これを「若木骨折」と言います。だから、子どもを検死するときは、いつも以上に気をつけないといけません。

犯人の明確な殺意

こうした事件が増加している中、子どものいる親たちはいままで以

上に気をつける必要があります。「危なくなったら、逃げる」ということを子どもに徹底させるしか、テはないでしょう。

子どもが刺されて死ぬ事件は、心中事件が多いのですが、この事件のように、心中ではない殺人事件もやはりあります。昔、赤羽の共同便所でメッタ打ちにされて子どもが殺されていた事件を検死したことがありましたが、身体中に擦過打撲傷が無数にあって、最終的に首を絞められていた。これは一目見て、少年犯罪だ、と思いました。大人なら、殺意があるならすぐに首を絞めて無抵抗状態で殺せるはずですから。結局、この事件は迷宮入りになりましたね。

そうした意味で、この大阪池田小児童殺傷事件は大人が明確な意図を持って、子どもを刺したからこそ、10分もの間に8人も死亡させることができたと言えると思います。

死体の嘘

目次

はじめに　001

上野正彦
大阪池田小児童殺傷事件を語る　004

第1部　あの事件の謎に迫る

◆第1章　「刺殺」事件を解読する　021

世田谷一家惨殺事件　刺された傷から何がわかるか　026
「切創」と「刺創」どちらが死にやすい？　026
遺体に残った傷跡から凶器がわかる!?　029
残されたものから考えると、犯人は外国人!?　032

井の頭公園バラバラ殺人事件――バラバラ殺人事件の真相　034
バラバラ殺人の本当の目的　034

ノコギリ不要の人体切断術 036
バラバラにする意味をなくした現代捜査 038
酒鬼薔薇聖斗事件 切断された遺体が語るもの 039
バラバラ殺人にはない不気味さ…… 039
多くのことを語る現象「死斑」 040
死体からも血は流れるという迷信 042
常識そのものを裏切られた犯人像 044
◆第2章 「腐敗」事件を解読する 045
ライフスペース事件——ミイラ化した死体はなぜできるのか 050
ミイラを作るのは大変である 050
さまざまな状態を見せる腐敗死体 052
ルーシー・ブラックマン事件——完全犯罪を突き崩すＤＮＡ鑑定 055
ルーシーさんの遺体の行く末 055
白骨化した遺体が、なぜルーシーさんなのか？ 057

◆第3章 「毒殺」事件を解読する 059

和歌山ヒ素入りカレー事件——きわめて稀な毒＝ヒ素 064
最初の診断は「集団食中毒」 064
青酸とまちがえた本当の理由 067
続出した毒殺模倣犯たち 069

地下鉄サリン事件——ナチスが生んだ猛毒「サリン」 072
未知の有毒ガスが発生!! 072
誰も知らなかった殺人神経ガス「サリン」 074

長崎・佐賀保険金殺人事件——なかなか死なない睡眠剤 076
「睡眠」以外に使用されていた睡眠剤 076
もうひとつの睡眠剤事件 078

◆第4章 「射殺」事件を解読する 081

警視庁国松長官狙撃事件——撃たれた傷からわかること 086
「射殺死体」のほとんどは警察官!? 086

国松長官を撃った犯人像 087
撃たれた身体からわかる犯人の手がかり 089
八王子スーパー強盗事件―1発で仕留めるプロの銃弾 091
脳を撃っても人はカンタンに死なない 091
3人を襲った犯人の手口 093
「殺しのテクニック」を持つプロ 095
◆第5章 「溺死」「轢死」事件を解読する 97
えひめ丸・米原潜衝突事件―人が水の中で死ぬとは？ 102
人が溺れて死に至るメカニズム 102
行方不明者はどこへ行った？ 104
腐らない死ろう化した死体 105
死ろう化して発見された坂本弁護士の息子さん 106
JR新大久保駅事件―駅のホームは絶壁である 109
轢断で死に至る3つのケース 109
電車のホームは「絶壁」である 111
失われてしまった自己犠牲の精神 112

下山事件——他殺？ 自殺？ 不自然な国鉄総裁の轢死体 113
疑いを残した轢断死体 113
自殺・他殺の境界線 117

◆第6章 「撲殺」「焼死」事件を解読する 119

岡山金属バット殺人事件——時間差で死に至る「撲殺」 124
残虐ではない撲殺犯人の心理 124
撲殺犯とバラバラ殺人犯の共通点 125
時間差で効いてくる危険な脳打撲 127
尻を蹴られても人は死ぬ 130

足立区首なし死体事件——死体は簡単には燃えない？ 132
火災時の死体は事故死か他殺か解剖でわかる 132
人の焼死体は動物の丸焼きと同じ 133
死体を焼こうとした小野悦男の本当の狙い 134

第2部　名作「死体」の嘘に迫る

◆第1章　『あしたのジョー』《撲殺》　139
時代の象徴だった「力石徹」　140
実際に起こり得る力石の死因　141
力石の脳内出血に疑いあり！　143
力石が死んだ本当の理由　145
脳が端から崩れるパンチドランク　147
「一夜にして真っ白」のウソ　149
ジョーが生きているその根拠　151
早く治療しないとアブないジョーの状態　152
ジョーを待つバラ色の未来　153
◆第2章　『羊たちの沈黙』《腐敗》　157
いつか役に立つ監察医の見分け方　158
レクターの執刀技術を疑う　159
レクターのマスクはゴムつきだ！　160
縫い合わせられる皮膚を作る苦労　162
日焼けでむける「表皮」　164

あまり腐っていない死体は臭くない　166
水中の死体にはいろんなおみやげが　167

◆第3章　『セブン』《腐敗》　169
増え続けるニセ死体、ホンモノ死体　170
ほとんどホンモノの「肥満男の死体」　171
決め手は死斑と樹枝状血管網　172
血色のいいミイラ人間　174
アーティスト、フィンチャーのジレンマ　175

◆第4章　『失楽園』《毒殺》　177
監察医の書く「死体検案調書」　178
究極の愛のかたち「結合死」　179

◆第5章　『タイタニック』《凍死》　183
タイタニック現象はいまだに沈まない　184
何があっても諦めないローズ　185
凍死する人々が見たもの　186
ローズが生き残った理由　188
意識混濁のローズは甘美な夢を見る　189

ジャックを殺したローズ 190
ジャックは本当は生きていた？ 191

◆第6章 **『あずみ』**《刺殺》 193
時代劇画ならではの表現を疑う 194
ついつい首を斬ってしまうのは猟奇殺人者か!? 195
そうそう斬り落とせない首 197
ムダばかりが目立つ首斬り剣豪 198

◆第7章 **『病院坂の首縊りの家』**《刺殺》 201
血の雨が降る『病院坂の首縊りの家』 202
じつは自ら望んだ生首風鈴の正体 203
ほぼ死に至る動脈切断 204
シャワーノズルで血をまき散らす 205
2時間20分後でも死体はよみがえる 206
人間とは思えない敏男の正体 209

◆第8章 **『パルプ・フィクション』**《射殺》 211
ストーリーの核を成す1発の銃弾 212
誤って射殺された男 213

動脈をかすめた銃弾の不思議　214
返り血を浴びない撃った側　215
絶妙なストーリーを支えていた「射殺死体」　217
◆第9章　『スタンド・バイ・ミー』《轢死》　219
たったひとつの死体の死因　220
轢かれて死ぬ「轢死」という死に方　221
死体の飛距離をかせいだ物体　223
◆第10章　『バックドラフト』《焼死》　227
消防士を襲う「バックドラフト」の恐怖　228
人命救助の美談はなぜ減った？　229
兄スティーブンは英雄になれたか　232
おわりに　234

◆第1部

あの事件の謎に迫る

死体はあるのに犯人が捕まっていない、そんな事件が世の中には無数にある。そんなとき、事件の真相は死体だけが知っているのである。他には何の証拠も残っていない事件でも、死体はわれわれに事件の真相を雄弁に語りかけ、犯人を教えてくれる。第１部では、長年監察医を務め、数多くの死体と事件に立ち会ってきた上野正彦氏が、法医学というメスで、あの話題の事件の真相に斬り込む／

第1章

「刺殺」事件を解読する

」の真実

「刺殺死体」の真実

最近、毎日のように刃物による殺傷事件のニュースが新聞の社会欄をにぎわせている。浅草で起きた「レッサーパンダ殺人事件」、包丁を使用した「世田谷一家惨殺事件」、巨大な文化包丁を使用した「西鉄バスジャック事件」、少し毛色は違うが、死体をノコギリで切断した「酒鬼薔薇聖斗事件」など実にさまざまなものがある。

ニュースでは、それらの事件の残虐さや、犯人の異常さばかりがクローズアップされるため、肝心なことをわれわれは見落としている。それは、「被害者はどのようにして死に至ったか」「刺殺死体とはどんなものなのか」という点だ。誰にでも公平に訪れる「死」のメカニズムについて、われわれは無知に等しい。

確かに、ナイフや包丁などは身のまわりにいくらでもあるし、実際

」の真実

「刺殺死

にこれらのもので誤って自分の身体を傷つけてしまい、当然だが血が流れることもある。が、しかし、その「切り傷」の延長線上に、本当に「死」があるのだろうか？　いったい「切られて死ぬ」とはどういったことなのだろうか。

「刃物」による傷は、２つに大別される。「切創（せっそう）」と「刺創（しそう）」だ。要は「切った傷」と、「刺した傷」のことである。そしてその傷が死に至るかどうかの分かれ目は、「どこを傷つけられたか」による。

では、これから上野氏に「世田谷一家惨殺事件」「酒鬼薔薇聖斗事件」「井の頭公園バラバラ殺人事件」といった事件を例に「刺殺という死」「刺殺死体から何がわかるか」、そして「死体を切るということ」といったことについて、説明してもらうことにしよう。

これを読めば、あなたがいままで考えていた「刺殺」のイメージが覆されるだろう。

「刺殺死

世田谷一家惨殺事件

2000年12月31日、東京都世田谷区で宮澤みきおさん一家４人が殺害されて見つかった。首を絞めて殺された息子の礼くん以外の3人の身体には、首や顔、胸などに10数カ所にわたり刺し傷、切り傷が残されていた。犯人はもみ合った際に右手を負傷し、現場には犯人のものと見られるＡ型の血液が残された。犯人はいまだに逮捕されていない。［2001年８月末日現在］

井の頭公園バラバラ殺人事件

1994年4月23日、東京都三鷹市の井の頭恩賜公園のゴミ箱から、人体の両手首、両足のスネ、右肩とあばら骨の肉片、足首などが、バラバラに包まれて24個発見された。頭部や胴体、性器は発見されていない。鑑識の結果、身元は公園近くに住む1級建築士のものと判明したが、犯人はいまだに捕まっていない。[2001年8月末日現在]

酒鬼薔薇聖斗事件

1997年5月27日、兵庫県神戸市立友が丘中学校の校門で、近所に住む土師淳君の頭部が発見された。同日、現場から500メートル離れた通称タンク山から胴体部分の遺体を発見。6月28日、現場近くに住む14歳の中学3年生が、殺人・死体遺棄などの疑いで逮捕された。精神鑑定の結果「重度の行為傷害」、「サディズム傾向」か判明する。

上野正彦が語る

世田谷一家惨殺事件

——刺された傷から何がわかるか

「切創」と「刺創」どちらが死にやすい？

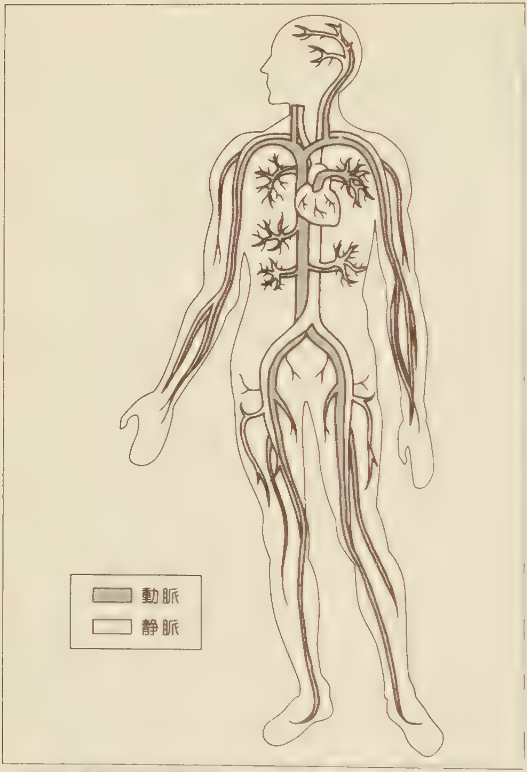
この事件の被害者である宮澤みきおさん一家は、小さなお子さん（礼くん）以外の3人は首や顔、胸など上半身を中心に十数カ所も刃物で刺されたり、切られたりして死んでいました。

まず、人は死ぬとどうなるか説明しましょう。

人は死ぬと、瞳孔括約筋をはじめ肛門や尿道などの開け締めをつかさどる括約筋がゆるみます。そうすると膀胱や直腸付近に中身がある場合、すべて漏れるということになります。つまり、ウンコやオシッコが漏れ出してしまうのです。これは意識を失った状態でも同じです。これだけでなく、精液を漏らす死体もありますから、そうしたことを知っている自殺者の多くは

トイレに行ってから決行するようです。

それでは、刃物で死ぬということはどういうことなのでしょうか？　おそらく、出血多量で死ぬということまでは、なんとなく予想ができるでしょう。しかし場合によっては、それ以外でも刃物で傷つけられて死ぬ場合もあります。



▲比較的、身体の表面にある太い動脈は腕、腹、内もも、首などにある

まず刃物による傷には、「切創」と「刺創」とがあります。「切創」は、切ってできる傷のこと。「刺創」は字の通り、刺してできる傷のことです。

「切創」で死に至る場合は、動脈部を切られて出血多量で死ぬ場合が多い。動脈を切った場合だと、血液は凝固する前に大量

に体外へ流れ出てしまうため、死に至ることが多いと言えます。一方、静脈は、出血多量になる前に凝固して止血してしまいますから、皮膚の表面に流れる毛細血管をいくら切りつけたとしても、致命傷になることはまずありません。静脈が切れて死ぬケースとしては、太い静脈が切れ、その部分の血管から外の空気が入り込み、体内を流れて、脳などの細い血管を詰まらせるもの（空気栓塞）があります。

　では体外にどれぐらいの血液が流れ出すと死亡するのでしょうか？　成人の総血液量約5ℓのうち、動脈血（動脈を流れる血）なら4分の1、静脈血（静脈を流れる血）ならその半分を失うと絶命すると言われています。とは言っても、すでに話したように実際には、静脈を流れる血が半分も体外に流れ出ることはありません。血が身体の外に出ればそのぶん血圧が下がりますから、ふだんは細い静脈をふつうに流れている血流は止まります。その止まった状態で固まり、止血されるからです。

「刺創」のほうが、致命傷になる確率は高いと言えます。即死にはならないにせよ、臓器の損傷（出血）によって絶命する可能性もあるし、腸を刺されると、腸の中にある雑菌（排泄物など）が体内に漏れ出し、腹膜炎などを引き起こします。プロレスラーの力道山もこれで死亡しています。彼は果物ナイフで腹を刺された。傷自体は小さかったので、大して気にせず病院に

行かなかった。しかし、腸に穴があいていたため、時間が経って腸の傷口が開いたときに苦しみ始めたけれども、手遅れになっていたそうです。また、消化器（胃や腸など）の消化液が、身体を溶かし、雑菌の繁殖を促進する、ということも考えられます。

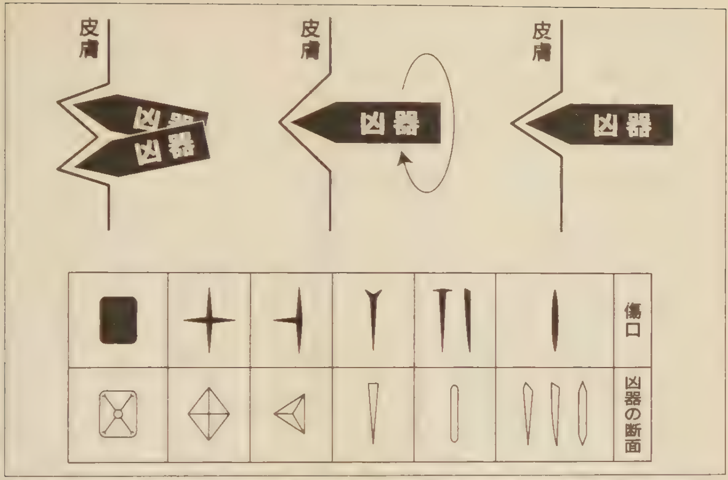
いずれにせよ、刃物で死に至るには、「切創」にしても「刺創」にしても、凶器が何かというよりは、傷つけられ方と、傷つけられた部分が重要となってくるのです。

遺体に残った傷跡から凶器がわかる⁉

この事件で被害者となった4人家族のうち、夫妻と長男は身体に多くの傷を負っていたといいます。このことから考えて、犯人はけっして人を殺すことに慣れた人間ではない、と言えるでしょう。もしも殺人に慣れた人間なら、無用な傷を負わせることはない。

この事件では、凶器と思われる血のついた包丁が現場に残されていました。

まあ、十中八九この包丁が凶器なのだろうとは思いますが、かといって、断定することはできない。どんな場合にも、凶器を特定するのは、被害者の身体に残された傷からでなくてはならないのです。



▲傷跡からある程度、凶器は推定できるが、対象が動くと同じ凶器でも異なった傷を作ることがある

しかし、刺し傷から凶器を特定するのは、簡単なようで意外に難しいのです。

たとえば、果物ナイフを粘土に刺し、そのまま入ったときと同じ角度で引き抜いたとします。この場合、刃物の跡は粘土にそのままのかたちで残るでしょう。人間の身体でも、同じことが言えますが、これはあくまで、被害者や犯人が動いていない場合のことです。

しかし、ほとんどの殺人事件の場合、犯人と被害者との間で格闘するなどの動きがあります。すると、凶器は必ずしも、入ったときと出るときとで同じ経路をたどるとはかぎらない。むしろ、被害者の抵抗や、それに抗しての犯人の動きによって、傷の形状は変わるのがふつうであると言えます。

凶器を刺したときの傷がV字型にできていて、それを引き抜くときにできた外傷がその隣に、V字型についているといったW字型の外傷も多い。刺しながら周辺を切っている場合も多いですし、大きな刃物の先だけが身体に刺さっている場合や、逆に突き刺さった刃物が動いて大きな傷を作ることもあります。ですから、外傷がそのまま凶器の形状を表すことはむしろ稀（まれ）なことであると言っていいでしょう。

同じ年に起きた、14歳の少年による**西鉄バスジャック事件**。ああいう場合には、当然凶器は目に触れますから、断定するのも可能ですね。あるいは、埼玉県桶川市の路上で犯行が行なわれた**桶川ストーカー殺人事件**のように、犯人が刃物の扱いに慣れた人物の場合には、ムダな動きもなく刃物が振るわれることになりますから（遺体の傷は心臓と右肩にあった）、凶器は比較的類推しやすい、と言えるかもしれません。

いずれにせよ、刃物を用いた殺人事件は、凶器の特定が難しいものなのです。

西鉄バスジャック事件

平成12年5月3日13時35分、療養所から一時帰宅した17歳の少年は、西鉄佐賀発福岡・天神行きのバスを、乗客21人を人質にして乗っ取った。少年は、逃げようとしていると勘違いして塚本達子さんを刃渡り40～50センチの牛刀で首などを刺して殺害。他に2人の乗客が少年に切りつけられて重軽傷を負った。翌日午前5時3分、小谷サービスエリアで停車していたバスに、広島県警警官隊が強行突入して少年を逮捕、15時間半ぶりに事件は解決した。

桶川ストーカー殺人事件

平成11年10月26日午後0時50分頃、埼玉県桶川市のJR桶川駅前路上で、女子大生の猪野詩織さんが、突然現われた男にナイフで胸などを刺されて40分後に死亡した。詩織さんの元交際相手、小松和人容疑者の兄・小松武史被告ら4人が殺人などの容疑で逮捕された。小松和人容疑者は、以前より詩織さん宅の近所で中傷のビラを貼るなどのストーカー行為を繰り返していた。小松和人容疑者は逃亡の末、翌年1月に北海道で遺体となって発見された。

残されたものから考えると、犯人は外国人⁉

現場には犯人の血液や指紋がついた凶器だけでなく、犯人が脱ぎ捨てたトレーナーも残されていた。

これだけ犯人の遺留品が残されていれば、通常ならば犯人が捕まっていてもおかしくはありません。犯人に前科があるなら当然、指紋から特定できるでしょうし、犯人が被害者と近い関係にある人物ならば、捜査によって犯人を洗い出すことも容易なはずです。

にもかかわらず、いまだに犯人が捕まらないというのは、犯人が外国人だからではないか？と私は考えています。なぜかと言うと、人を殺してでもお金を手に入れたいという価値観とリスクとを考えてみると、同じ金銭感覚や死生観を持つ日本人とは思えないからです。犯人はおそらく、すでに海外に逃亡しているのではないでしょうか？

現場に犯人が残していったトレーナーは盗品ではないか、と私は見ています。犯人は、ある程度の計画を立て、初めから返り血を浴びる

事件のその後

報道によると、足跡から判明した犯人の靴が韓国でライセンス生産されているものだったことから、警視庁は、捜査の範囲を韓国まで広げた。極秘で指紋の照会や、靴の流通経路などをあたったが、指紋に関しては照合者がおらず、靴の流通経路も複雑をきわめるため、どちらも結局有効な手がかりとはなっていない。また、その後の調査で、3人の痛いに残された傷は、数は少なく、いずれも内臓にまで達する深い刺し傷で、ハンカチで手にする包丁を固定したうえで刺していることが明らかになった。このことからも、明白な犯人の殺意が読みとれる。捜査本部は、宮澤みきおさんの仕事関係を調査中だが、有力な手がかりはいまだ得られていないようだ。

遺

ことを考えて、脱ぎ捨てるつもりで盗品のトレーナーを着ていったのではないでしょうか。

　トレーナーを脱いで、アンダーシャツだけになって現場から逃げたりすれば、即座に怪しまれてしまいます。だから着替えもあらかじめ用意して、宮澤さん宅に押し入ったのではないか。着替えてしまえば、家に入ったときと出るときとで、姿が違うわけですから、別人と見られる可能性も高いでしょう？

　いずれにせよ、犯人は犯行後しばらくこの家にとどまっていて、冷蔵庫を開けてアイスクリームを食べたりもしている。相当に卑しいやつだ、ということは言えるでしょうね。

上野正彦が語る

井の頭公園バラバラ殺人事件

バラバラ殺人事件の真相

バラバラ殺人の本当の目的

バラバラ殺人は、一見、怨恨（えんこん）のからんだ残忍な変質者の犯行である、と考えられがちです。ところが、実際のところはそうではない場合が多い。バラバラ殺人は、加害者と被害者が顔見知りで、それを隠すために行なわれる場合が非常に多いのです。

死体が発見されたときに、身元が割れれば、疑いは当然、被害者と関係のあった人物にかかります。犯人の心理として、それはできるかぎり回避したい。だから、死体を切り刻むんです。場合によっては、性器や乳房を切り取って、性別さえわからなくしてしまう。そうすることで、自分にかかる疑いをできるだけ少なくしようとするんです。

死体を切断するのは血も出るし、脂肪もあるので容易なことではありません。しかし、バラバラにしてしまえば、運びやすいし、捨てやすいというメリットも生まれてくる。死体を隠す際にも、切断した死体を数カ所に分けて埋めるというようなことが可能になります。また、当然、事件を捜査する側も大がかりな手間が必要になってきますから、鑑定という方法が最終的にはあるものの、一時的に被害者は特定されにくくなるわけです。

バラバラ殺人というのは、多くの場合、このように捜査を攪乱させようという心理のもとに、行なわれることが多いんです。

この井の頭公園の事件も、まさにそれであると言えるでしょう。公園内のゴミ箱から発見されたのは、両手首、両足のスネ、右肩やあばら骨の肉片、足首など、それぞれバラバラに包まれた24個の人体の一片でした。性器や頭部が見つかっていない点から考えても、明らかに死体の年齢も性別もわかりづらくすることによって、捜査を難航させようという犯人の意図が見えています。

この事件にかぎらず、バラバラ殺人の現場はとても凄惨です。まして、性器が切り取られているならば、犯人像として、残忍な変質者を思い浮かべてしまうものでしょう。しかし、稀にそういう例があるにせよ、実際にはバラバラ殺人は、犯人の保身の心理の表われであることがきわめて多いのです。

ノコギリ不要の人体切断術

犯人が被害者の肉体をバラバラにする際、使われる道具としては、後で述べる「酒鬼薔薇聖斗事件」（P39参照）もそうですが、ノコギリが圧倒的に多いと言えます。

むろん、犯人も初めからノコギリを持ち出してくるわけではありません。最初に切るのは皮膚であり、筋肉ですから、家庭用の包丁で難なく切れてしまう。肉を切れる刃物であれば、果物ナイフであってもいいわけです。

犯人はおそらく、そこまでは順調に切り進んでいくことでしょう。死んだ人間からはほとんど血液は出ませんから、犯人は比較的容易に、皮膚と筋肉を切り刻んでいくことができるはずです。

ところが、筋肉をなかば切り進んだときに、犯人は難題に遭遇することになる。刃物が骨にぶち当たるわけです。骨は包丁では絶対に切れない。そこで、犯人は考えた末、ノコギリを持ち出してくることになるわけです。

犯人はおそらく、必死の思いでノコギリを動かし、骨を切断していくことでしょう。この事件のように、人体を24個に分解するとなれば、かかった時間もかなり長いと思われます。

しかし、これは医者の目から見ると、シロウトの浅はかさなんです。人体をバラバラにした

ければ、関節を切ればいいんです。骨と骨は、靭帯（じんたい）と呼ばれる貝柱のようなもので結合されていますが、これを切るのはけっして手間のかかる作業ではない。カッターナイフであっても容易に切断できるものなんです。ですので、ノコギリである必要はまったくありません。

さて、ノコギリで手足を分断した犯人は、おそらく、胴体を切りにかかることでしょう。ここで犯人は、さらなる難関に遭遇することになります。

腹を切るということは、内臓を切るということを意味します。腸を切れば、当然内容物が漏れ出してくる。ちなみに、切腹などで生きている人間が腹に刃物を入れた場合は、1センチほど入れただけで、腹膜ショックを起こし、失神してしまうことになります。

さて、死体切断の話に戻りますが、ただでさえ血まみれで刃物には脂がまとわりついているから当然切れ味も鈍っている。それに加えて、腸の内容物、もっと言えばウンコが漏れ出してくるわけですから、現場は臭いし汚いし大変なことになっているはずです。たぶん、必死の思いで腸をかき出し、それをビニール袋か何かに詰めていくという作業をするんでしょう。

で、最後にぶち当たるのが、もっとも太い骨である背骨です。これをノコギリで切って、初めて人体はバラバラにすることができる。全体の工程をひとりで行なおうとしたら、たぶん、半日ぐらいはかかってしまうのではないでしょうか。

バラバラにする意味をなくした現代捜査

この事件では、頭部と性器がまだ見つかっておりません。つまり、見ただけでは誰の死体かわからない状態になっているということです。

科学捜査というものが確立していない時代の捜査においては、この状態で被害者が誰かを特定することは難しかったでしょう。あるいは、骨盤など、明らかにわかる部位が残されていなければ、性別を判断することさえ困難だったに違いありません。

しかし、現代においては、バラバラ死体の身元を確認することは、非常に容易にできるようになっています。DNA鑑定（P55「ルーシー・ブラックマン事件」参照）を行なえばいい。

被害者のDNAを調べたら、あとは行方不明者のDNAのなかに適合するものがあるかどうかを調べるだけです。DNAは、髪の毛の細胞1個からでも採取することができますから、たとえ行方不明になっていても、DNAを採取することはできるのです。

つまり現代においては、犯人が死体をバラバラにして保身を図っても、無意味なのです。

上野正彦が語る

酒鬼薔薇聖斗事件

切断された遺体が語るもの

バラバラ殺人にはない不気味さ……

まず、この事件の異様さというのは、従来のバラバラ殺人事件とは趣を異にしている、という点にありました。

前項でも触れましたけれども、死体をバラバラにするというのは、犯人が保身のために（捜査が自分に及ばないようにするために）行なうことが多いのですが、このタンク山の事件は違っていた。首は中学校の校門の前に、胴体はそこからほどなくして行けるタンク山に、それぞれ放置されていたのです。つまり、被害者の身元は簡単に割れてしまうわけです。通常のバラバラ殺人には見られない異常なものがある、と感じずにはいられませんでした。そのうえ、犯

人のあの挑戦状でしょう？　やはり、犯人像としては、社会に不満を持った異常な凶悪犯、年齢は30歳以上の男、といったところを想像していました。

多くのことを語る現象「死斑」

司法解剖後の警察発表によれば、死因は、手で首を絞めて殺した（扼頸による窒息）、ということでした。さらに、胃内に昼食のカレーライスが残っていたので、犯行時刻も食後間もない時間であるということが明らかになりました。少し時間をおいて、被害者の身体にはアリが噛んだ傷が散在していたこと、死斑が背中に固定されていたことなど、細かい所見も伝わってきました。

警察は、タンク山ケーブル基地周辺の**ルミノール反応検査（血痕検出）**を行ない、ケーブル基地周辺に強い反応がなかったことから、殺害現場は別の場所ではないか、という推論を立てていました。つまり、犯行は別の場所で行なわれ、死体はそこで切断され、車でタンク山と中学校に運ばれた、というのです。血が流れていないのがその証拠だというわけです。

ルミノール反応検査

ルミノール試薬を噴霧して、血痕の有無を調べる検査方法。血痕に反応して、強い光を発する。血痕がわかりにくい黒い生地、広い場所、車両などでよく使用される。

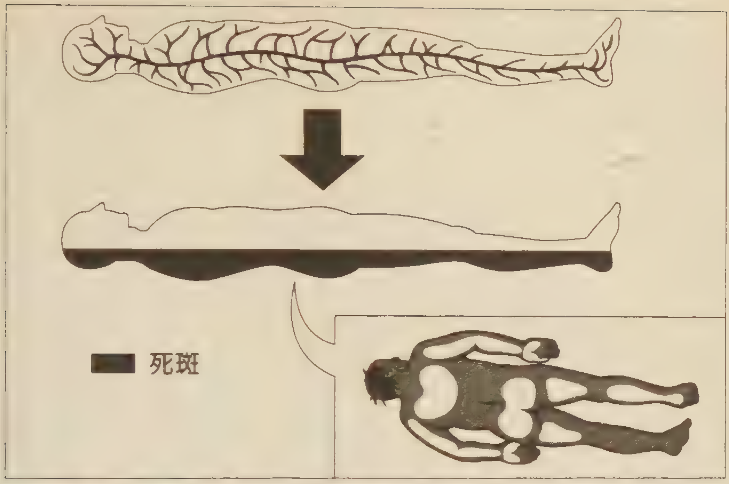
ただ、私はこれは絶対に違うと思っていた。殺害場所はタンク山。それ以外にはあり得ない。

その理由としては、まず、死斑が背面に固定されているという点が挙げられます。人が死ねば、当然心臓は停止する。それに合わせて、血液の流れも止まる。すると血管の中の血液は、重力の方向に落ちてきます。つまり、あおむけの状態で死亡していれば、背中の血管に血液が集まってくるわけです。その血液の色が皮膚を透して見えるのが死斑なのです。

しかし、人間の身体の内部というのは、非常に複雑な構造になっているから、すべての血液がきれいに背中に落ちていくわけではない。むしろ、人体のさまざまな器官があることによって、背中の方まで落ちていかない血液もあります。

また、背中を下にして死亡している場合、肩の部分（肩甲部）や尻の部分（臀部）の血管は、体重がかかって圧迫されているため、血液が流れ込みません。圧迫された部分は、そのため蒼白な皮膚の色となり、圧力がかかっていない部分には赤褐色の死斑が形成されるというわけです。

死斑が固定しているということは、その姿勢のまま死体が放置されていたこと、つまり、死体は動かされていないということを意味するのです。死斑が固定するのには、だいたい死後15時間～20時間かかります。もし仮に、車で死体を運んだとしたなら、途中で体勢を変えるわけ



▲流れを失った死体の血液は、重力によって下側にたまるが、地面と接している部分には流れ込まない

ですから、そうそう死斑が背面に固定されるはずはない。このことから、犯行はタンク山で行なわれ、そこから遺体が移動されていないのだ、ということがわかるのです。

死体からも血は流れるという迷信

さらに、「タンク山で犯行が行なわれたとすれば、死体の切断も同じ場所で行なわれた」と私は考えていました。そうすると、タンク山周辺から血痕反応が出ないのはなぜなのか、という話にもなるでしょう。だが、これは誤解している人も多いようだけれども、すでに死んで時間の経った死体は、切断したところでほとんど血は流れないんです。

生きている人間の首　たとえば頸（けい）動脈を切断すれば、当然のことすさまじい勢いで血が流れ出します。心臓がポンプの役目をして、血液を送り出しているのですから。

しかし、死んだ人間の心臓は止まっているから、血圧がない。血圧がないから血流も止まっている。だから、死んだ人間の首を切ったところで、切断面にたまっていた血が少々出ることはあっても、おびただしい量の血が流れ出るということはあり得ないんです。まして、死斑がすでに固定されているような状況なら、現場にほとんど血痕が残らないのは当然のことでしょう。

「血痕反応が出ない」ことと、「死斑の固定」、というふたつの理由から、私はタンク山が殺害現場だと判断していました。

法医学は、死体所見を丹念に観察する学問です。そうすれば、もの言わぬ死体が真実を語り出す。現場の捜査状況はあくまで参考にすぎず、両者に食い違いがあればどこかに読みまちがいがあるものです。

ここでは、死斑の固定、そして切られた死体からは血は流れないという事実。このふたつを正しく理解していないと、誤った見解を導き出してしまうというわけです。

常識そのものを裏切られた犯人像

事件発生から1カ月が過ぎて、犯人について知らされたときは、驚きました。犯人は14歳の男の子。しかも、死体の首が放置された中学校に通う中学3年生たという。

調べが進むにつれ、近隣で起きていた鳩や猫を殺す事件も、同じ少年によるものだとわかりました。動物を殺せる人間はそうザラにいるとは思えないから、関連性は高いとは思っていたが、まさか少年だとは想像もしなかった。

調べが進むにつれ、場当たり的な犯行であったことがわかってくる。スキだらけで犯罪の常識を越えているから、逆に大胆不敵な行動に見えていたのです。すぐに足がつくような犯行（頭部を校門に置いたこと）が、皮肉にも、逆に犯人像をわかりにくくしていたのです。そうした意味で、法医学的な常識の裏をかかれた、という感じでしたね。

やっていることが滅茶苦茶だから、少年犯罪であったと言われれば納得がいきました。そういう意味でも、私自身、大変勉強になった事件でした。

第2章

「腐敗」事件を解読する

」の真実

「腐敗死体」の真実

「火葬」ないしは「埋葬」という習慣があるために、われわれ日本人は、なかなか「人が腐っていく」という事実を受け止めがたい。死体は葬式のためにいったん人目に触れるものの、すぐに火葬場にまわされるか、そうでなければ、埋められる。

腐った死体をじっくり観察したことがあるだろうか？　特殊な職業にでも就いていないかぎり、おそらくないだろう。もし、どこかで腐敗した死体を見たとしても、すぐに警察が「誰の目にも触れない」ように処理するに違いない。いや、そういう経験さえないのがふつうである。

つまり、見たことがないから、想像することが難しいのだ。そのため、海外の死体写真や、「ライフスペース事件」で報道された真っ黒な死体の写真を見ると、われわれは新種の生物でも見るかのように好奇

」の真実

腐敗死

の目を向ける。

言うまでもないことだが、人間の身体は有機物でできている。したがって、生命活動を停止した時点で、人間の身体もまた、カビや微生物生育の温床となり、腐敗が始まるのだ。腐敗が進行すれば、当然腐った肉の臭いをまき散らすし、ウジだってたかる。そのまま放っておけば、もはや人間の原型をとどめないところまで、腐敗は進行するだろう。後に残るのは骨ばかりだ。

「人間はとどのつまりあわれなしゃれこうべだ」と言ったのはハムレットだが、「火葬」し「埋葬」することにより、どんなに人が「死」を隠蔽しようとも、有機物としての本質はけっして変わることがないのである。

ここでは、「ライフスペース事件」「ルーシー・ブラックマン事件」を例に、「人が腐敗するとはどういうことか」「腐敗死体から何がわかるか」を上野氏に解説してもらおう。

「腐敗死

ライフスペース事件

1999年11月12日、千葉県成田市のホテルでミイラ化した小林晨一さんの遺体が発見された。小林さんは、セミナー団体「ライフスペース」の参加者だった。主宰者の高橋弘二氏らは、小林さんの遺体について、「死んでいるわけではない」と主張した。翌年2月22日、高橋被告と小林さんの長男らは、保護責任者遺棄致死容疑で逮捕された。

ルーシー・ブラックマン事件

2000年7月1日、元ブリティッシュ・エアウェイズ客室乗務員のルーシー・ブラックマンさんが失踪。10月12日、準強姦容疑で織原城二が逮捕された。その後、織原被告のマンションの近くにある神奈川県三浦市の海岸で、一部が白骨化したルーシーさんの遺体を発見した。遺体は8つに切断され、頭とみられる部分はセメントで固められていた。

上野正彦が語る

ライフスペース事件

——ミイラ化した死体はなぜできるのか

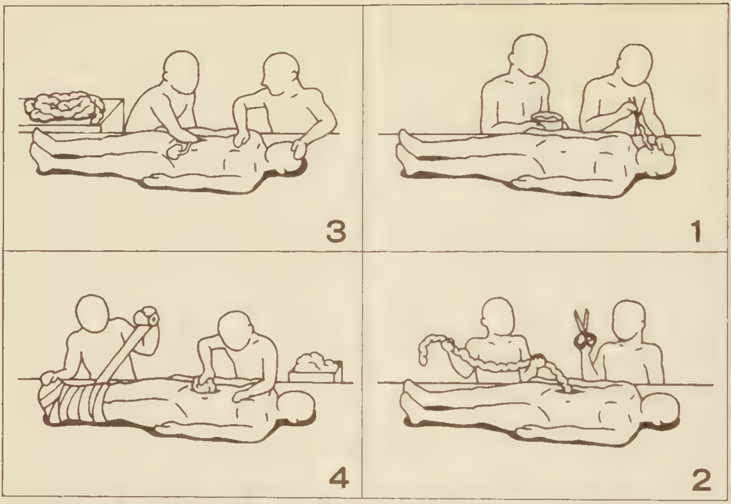
ミイラを作るのは大変である

日本のような湿潤な気候を持つ土地では、人間の死体が自然にミイラになる、ということはほとんどありません。放置された死体は多くの場合、腐敗してしまう。

そう考えると、ライフスペース事件の真っ黒なミイラも偶然できたものではありません。ミイラのできる条件を意図的に作らないと、ミイラにはなり得ないわけですから、明らかに遺体をミイラにしようという意図が見えると思います。

ミイラというと、エジプトのファラオのミイラや日本では東北地方の出羽三山や藤原三代のものが有名です。エジプトなど乾燥した気候のもとでは、ミイラはできやすいと言えるでしょ

■エジプトでのミイラの作り方■



▲1)鼻から脳を抜く、2)身体から内臓を抜く、3)身体の中を洗浄、4)詰め物をして包帯て巻く

う。では、東北のミイラはどうしてできたかと言えば、人為的な処置をしていたからです。

それでは、具体的にミイラはどうやってできるのでしょうか？　人間が死んだ場合、腐敗はつねに内臓から始まります。胃や腸などから分泌される消化液は、われわれが口から食べた食物を分解する働きを持っています。これが、生命活動が失われたとたん、内臓自身を溶かし始めるのです。ここから腐敗が始まります。

東北などに散在するミイラは、腐敗が始まる前に肛門から内臓を掻き出して作られます。ちょうど魚の干物を作るのと同じやり方で作った人間の干物、それが東北のミイラです。

また、こういうケースもあります。以前、電車に轢かれた遺体の一部がどうしても見つからない

ことがありました。そして、ある日車両を整備士が点検していると、電車に遺体の一部が付着して干からびていた。まさにミイラ状態だったわけです。切り離された身体の一部が一定の速度で走る電車に乗せられていたため、水分を奪われ、腐る間もなく干からびてしまったものです。これは人為的ではありませんが、状況によってミイラ化したケースです。

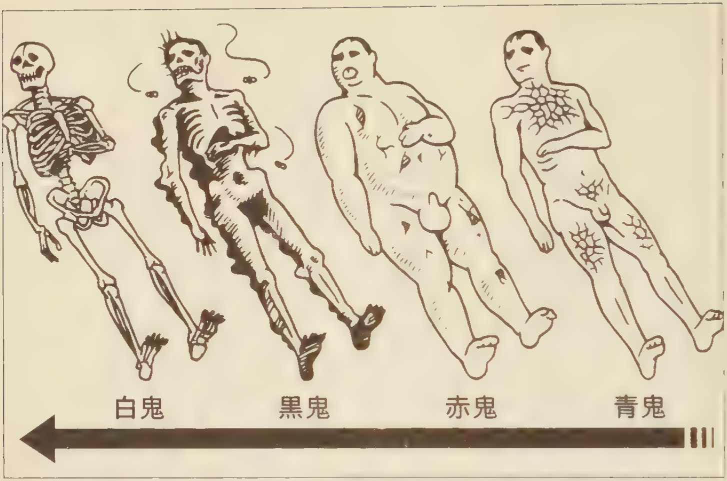
では、成田市で発見されたライフスペースの男性のミイラ化遺体は、なぜ腐敗しなかったのか？　これは非常に簡単で、遺体が安置されたホテルの室内につねに冷房や換気（ドライ）をきかせて、乾燥した状態を作り出していたのでしょう。

そういった状況から考えると、その宗教の死生観がどうであれ、明確な意図――つまり、死体を腐敗させず、ミイラ化させようという意図が見えます。

さまざまな状態を見せる腐敗死体

ミイラ化しない死体はどうなるかといえば、当然腐敗が進行します。俗称で私たちはこれを「鬼」という言葉で表現しています。

人間の肉体が生命活動をやめてしばらくすると、内臓の腐敗が始まるのは、すでに述べた通



▲青鬼までは48時間、赤鬼までは５日間、黒鬼までは１週間〜１ヵ月、白鬼までは３ヵ月ほどかかる

りです。そうするうち、細菌類が繁殖して、腐敗が加速し始めます。腐敗ガスが発生し、ガス中に含まれる硫化水素が赤血球中のヘモグロビンと結合し、硫化ヘモグロビンと呼ばれるものになる。このとき、血液は青く変色するのです。したがって、肉体も青みを帯びることになる。この状態を、私たちは「青鬼」と呼んでいます。

さらに腐敗が進行すると、体内で発生した腐敗ガスが遺体を膨らませ始めます。遺体の内部で発生したガスが、出口がないので遺体をパンパンに膨らませてしまうわけです。通常の2倍ぐらいの大きさにはなりますね。衣服を着ていれば、衣服がちぎれそうになっている。この頃には、皮膚も徐々に腐敗が始まりますから、腐敗独特の赤色に変わります。これが「赤鬼」と呼ばれ、髪の毛も引

っ張れば抜ける状態です。

水死体が「土左衛門」と呼ばれるのは、この状態のときのことを指します。水中に沈んでいた遺体が、体内で発生した腐敗ガスによって浮き上がってくるわけです。この時点でかなり死体特有の臭いが出始めます。あえてたとえるなら、なめし革工場の臭いでしょう。殺人現場に立ち会う刑事の中には現場の凄惨（せいさん）さと強烈な臭いでもどす人もいるほどです。

この赤鬼の状態から、さらに腐敗が進行すると今度は黒く変色します。皮膚は液体になってずるずる溶け出し、骨が露出します。これを「黒鬼」と呼びます。

この後、じゅうぶんに腐敗が進行すれば白骨になります。これは「白鬼」。つまり、腐敗は、青、赤、黒を経て、最後は白色になって終わるのです。

腐敗の進行は、当然、季節によっても違いますし、その遺体がどこにあったかという条件によっても異なります。したがって遺体の腐敗の程度により、死亡時期を推定するのは難しい。

カスパーという学者は、空気中に置かれた死体の腐敗の進行度を1とすれば、水中では2倍遅くなり、土中に埋めた場合は8倍遅いと報告しています。水温は気温より低いため、腐敗の進行は遅くなりますし、土中では酸素に触れませんから分解が遅れるわけです。もっとも、これはあくまで目安なので、必ずしもこれに当てはまる死体ばかりではないというのが現状です。

上野正彦が語る

ルーシー・ブラックマン事件

——完全犯罪を突き崩すDNA鑑定

ルーシーさんの遺体の行く末

行方不明になっていたルーシー・ブラックマンさんの遺体の一部は、神奈川県三浦市の海岸で一部腐敗、一部白骨化した状態で発見されたと言います。通常、白骨化するのは空気中で3カ月、土中では2～3年ほどが目安とされています。失跡したのがおよそ7カ月前ですから、土中・空気中が相なかばする状態だったのでしょう。

私は、このニュースが報道されるまで、ルーシーさんの遺体は発見できないのではないかと思っていました。織原容疑者がモーターボートを持っていて、なおかつマンションの部屋からセメントが発見された点から見て、セメントで固められて海に遺棄されたのではないかと考え

ていたのです。だから、この発見には正直、意外の感さえ抱きました。

警察の遺体発見が発表されたのは、今年（２００１年）の2月初めのことでした。もっとも、見つけてすぐにそれがルーシーさんのものだと断定できたわけではない。遺体が彼女のものだと確定されたと報じられるまでには、かなり長い時間がかかっています。

だが、不思議なことに、遺体の発見が報じられると同時に、警察はすぐさま英国大使館に連絡を入れているのです。もしこれがルーシーさんの遺体ではなく別人のものだとしたら、これはとんでもないことです。まちがえて大恥かいたうえに「日本の警察は何をやっているんだ！」と言われて国際問題になってしまう。それにしては、警察は明らかにルーシーさんのものとして動いている。だからおそらく、警察は遺体発見のニュースが報道される前に遺体を見つけていて、遺体がルーシーさんのものである、と断定できるだけの調査をしていたのだと思います。

逮捕された織原容疑者は、１９９２年から日本人女性3人、外国人女性3人に対して、睡眠導入剤を飲ませ、何度か暴行をはたらいているようです。おそらく、ルーシーさんに対しても同じことをしたのではないでしょうか。彼の部屋からルーシーさんの髪の毛が発見されたり、ルーシーさんの頭部を固めたと思われるセメントが発見され、状況証拠はじゅうぶんですから、ほぼまちがいないでしょう。だが、犯行の決定的な証拠がない。それで逮捕の理由も、殺人容

疑ではなく、準強姦容疑になっています。

白骨化した遺体が、なぜルーシーさんなのか？

ルーシーさんの遺体が発見されたときには、すでになかば白骨化していたといいます。白骨化するほどに原型をとどめていない遺体から、なぜ警察はそれがルーシーさんのものであると断定することができるのか。

　これは、DNA鑑定によるものです。DNAの鑑定をするためには、かなりまとまった数の細胞が必要になるのですが、現在はPCR法といって、細胞が1個あれば、それを倍々に増やしていって、鑑定ができるようになった。要するに、髪の毛1本でもあれば、PCR法によってDNA鑑定ができるということです。この方法が捜査に使用され始めたのは平成4年のことで、私が現職だったころにはまだ開発されていませんでした。

　人間の細胞内のDNAは、指紋と同じようなものです。同じものは何億分の1の確率でしか発見できないそうで、まず同じものはないと見ていい。

　ルーシーさんの場合は、髪の毛が残されていました。彼女の髪の毛から採取したDNAと、

遺体の骨から採取したＤＮＡがぴたりと一致したからこそ、三浦海岸の遺体はルーシーさんのものだと断定できたわけです。むろん、それだけでは（何億分の1の確率ではありますが）、別人のものである可能性もないわけではない。そこで役立ったのがイギリスから取り寄せた歯医者のカルテだったわけです。歯の治療痕が断定の決め手となりました。

では、もし仮に、ルーシーさんの髪の毛が残っていなかったとしたらどうするか。彼女の細胞が残っていなければ、見つかった遺体をルーシーさんのものと判断できないではないか、ということになりますが、その場合にはルーシーさんのご両親のＤＮＡを採取すればいいのです。そこからルーシーさんのＤＮＡを知ることができる。しかしこの事件の場合、ルーシーさんの骨が発見されていて、骨のＤＮＡ鑑定ができるので心配ありません。

細胞1個から、場合によっては遺族の細胞から、遺体の身元は知れるわけです。警察の科学捜査は、もはや、遺体が発見されたら即座に身元がわかるという段階に至っていると言っていいでしょう。

第3章

「毒殺」事件を解読する

」の真実

「毒殺死体」の真実

かつて、科学がじゅうぶんに発達していなかった時代には、毒殺は、権力者たちの間で非常にポピュラーな暗殺手段だった。誰が、どのような毒物を使ったか。それさえもわからないまま、事件は闇から闇へ葬り去られた。

大昔から「毒」が、暗殺の道具としてたびたび利用されてきた背景には、「毒」は、誰にも悟られずに人を殺すことが可能だったことがあったのである。

しかし、法医学の発達した現代においては、被害者の状況や解剖所見から、それがいかなる毒物かを判断することができるし、その毒物の特定は、入手元の特定、犯人逮捕の貴重な足がかりとなってくる。

「不自然な死に方をした」だけでは済まされないのが現代なのだ。

」の真実

毒殺死

一口に「毒殺」と言っても、その毒の種類によって、人体に与える影響は大きく違う。つまり、死に至るプロセスが毒によってまったく異なってくるのだ。たとえば、青酸化合物などの血液毒は、血液のガス交換作用を阻害し、摂取した者を内窒息死させるし、ヒ素やリンなどの実質毒は、諸臓器の細胞に直接、障害を与える。また、睡眠薬に代表される神経毒は中枢神経に作用する、といったところだ。

そんなすぐに毒が特定されてしまうような科学万能の時代でも、法の目をかいくぐるように、毒を使った犯罪は起きる。それが「和歌山ヒ素入りカレー事件」であり、オウムの「地下鉄サリン事件」であり、「長崎・佐賀保険金殺人事件」だった。

人のエゴが引き起こしたこれらの事件をもとに、「毒を飲まされるとどうなるか」を上野氏に語ってもらおう。

「毒殺死

地下鉄サリン事件

1995年3月20日、オウム真理教教祖の麻原彰晃が、実行部隊を指揮して、東京の主要官庁か集まる、霞ヶ関駅を通る３路線、日比谷線、丸の内線、千代田線の地下鉄各線でサリンをばらまいた。被害者は、死者12人、重軽傷者5000人以上にも及び、その後、麻原彰晃らが逮捕されたが、実行犯のうち数名は、いまだ逃亡を続けている。

和歌山ヒ素入りカレー事件

1998年7月26日、お祭りでカレーライスを食べた住民4人が死亡、約60人が治療を受けた。当初、食中毒と見られていたが、死亡した4人からヒ素が検出され、殺人事件として捜査が行なわれる。12月9日、和歌山県警は、現場の近所に住む林真須美容疑者を、近隣住民の殺害目的でカレーに毒物を混入した殺人、殺人未遂容疑で逮捕した。

長崎・佐賀保険金殺人事件

１９９２年９月11日、元保険会社営業職員・山口礼子は、交際のあった古美術商・外尾計夫と共謀し、夫の克彦さんを睡眠導入剤で眠らせ、海に投げ込み殺害した。これは水死事故と判断され、約９千万円の保険金が支払われた。また、１９９８年10月26日にも山口容疑者は、保険金を騙し取ろうと、二男・吉則君に睡眠導入剤を混ぜたカプセルを飲ませて海に落とし、水死させた。

上野正彦が語る

和歌山ヒ素入りカレー事件

きわめて稀な毒＝「ヒ素」

最初の診断は「集団食中毒」

私は現地からこの事件を解説しています。あるテレビ局から依頼があったからです。

ただ、そのときこの事件に使われた毒物はヒ素ではなく、青酸だと発表されていた。私も当然、青酸混入事件としてのコメントをしたのです。

もともと、この事件は発生当初、集団食中毒と見られていました。保健所の医師が、インタビューに応じてそう答えたからです。病院での対応もそうで、病院に収容された人のほとんどが、当初食中毒の治療を受けていました。

しかし、食べてすぐの食中毒というのもおかしい。

毒物の名称	それぞれの死因
青酸化合物	血中に吸収され、呼吸酵素の働きを妨げるため、赤血球は酸素を取り込めず、窒息する。
ヒ素	タンパク質と強く結びつき、タンパク質である酵素の働きを阻害し、発癌性物質になる。遅効性。
睡眠薬	常用の5～10倍を摂取すると急性中毒を起こし呼吸抑制等の症状があり、呼吸麻痺を招く。
サリン（有機リン系農薬）	呼吸などの生命活動を司る自律神経である副交感神経を強く刺激するため、心臓の拍動が停止して死に至る。
アジ化ナトリウム	青酸ソーダ中毒に似た症状を示す。意識低下、血圧低下、不整脈を引き起こし、死に至る。

▲青酸やヒ素、サリンなど毒の種類によって、死に至るまでのプロセスもさまざまなものとなる

やがて、子どもを含めた4人の死者を出すに至り、和歌山県警も毒物検査と、亡くなった4名の遺体の**司法解剖**を行ないました。その結果、青酸反応が見られ、この事件が青酸混入事件として大きく取り上げられることになったのです。

司法解剖

刑事訴訟法に基づき、犯罪にかかわっている、またはその疑いのある死体を解剖すること。必ず全身を解剖して、死因を究明する。

私がテレビにコメントしたのは、ちょうどこの事件が青酸混入事件として大きくクローズアップされてすぐのことでした。だいたい、以下のようなコメントをしたのを覚えています。

「青酸化合物をカレーに混入させたとしても、相当かき混ぜないと均一にはならない。おそらくは、青酸濃度の濃いところを食べた人が死亡したのだろう。青酸は気化しやすく、鼻を突くような刺激臭があるため、

カレーをかき混ぜた際には異臭に気づくはずである。しかし、異臭に気づかなかったのは、屋外で風が強かったためではないだろうか」

祭りといえば子どもが集まってくるし、カレーの好きな子どもは多い。子どもが食べるカレーに青酸を混入した犯人はけっして許すことができない、と、カメラに向かって憤りを爆発させコメントを終えました。

ところがその後、入院中の人々から発疹が出たり、手足のしびれ、赤血球・白血球・血小板（けっしょうばん）の減少が出現しました。青酸中毒は速効性ですから、こうした症状はふつう、見られるものではありません。

やがて、警察庁の科学警察研究所から、改めて毒物の検査結果が発表されました。そこで初めて、この毒物の正体はヒ素だということが明らかになったのです。

ヒ素と聞いて、驚かずにはいられませんでした。

ヒ素は無味無臭、無色の薬物で、確かにカレーに混ぜても異臭はしない。ただ、過去の日本の殺人事件で、ヒ素が使われた例はないのです。ヒ素は少量ずつ長期間にわたって投与し続けると、体内に蓄積し、病気のように衰弱して死亡しますから、ナポレオン時代の19世紀のヨーロッパで毒物の王様として恐れられたと言われていました。それが現代に使われるとは考えも

しなかった。私の中では、ヒ素は現代では使われない、忘れられた過去の毒物になっていたのです。

青酸とまちがえた本当の理由

メディアは警察に説明を求めました。

なぜ、青酸とヒ素をまちがえたのか。司法解剖の結果が青酸だったのはなぜか。だが、警察からの回答はありませんでした。

私もコメントを求められたけれども、部外者の私にわかるはずもありません。ただ、一般論として、だいたい次のようなことは言えると思います。

即効性の毒物としてもっともポピュラーなのは、青酸か農薬です。

食中毒でないとすれば、現場で簡単にテストできる青酸予備試験をするのは当然の成り行きと言えるでしょう。この予備試験は、青酸イオンの発するオゾンが、グヤアク試験紙に反応して青色に変化することを利用したもので、シェーンバイン・パーゲンステッヘル法と呼ばれています。

ただし、この予備試験は、鋭敏度がきわめて高いのです。青酸以外のものに反応を示すこともままある。私の経験でも、塩素に反応したことがあります。だから、あくまでこれは予備試験で、本試験で青酸であることを確認しなければならないのです。

ところがこの事件の場合、食中毒と騒がれたが、どうも様相がおかしいので現場で青酸予備試験をした、という事情がある。緊急治療の必要もあったので、本試験を待たずに青酸に切り替えて対応したのではないでしょうか。

司法解剖の結果も青酸中毒とされましたが、これはあくまでも解剖が終わった後の肉眼での診断です。

言いかえれば、執刀医の感想を述べたものにすぎない。最終診断が下されるのはすべての検査が終わった数カ月後で、解剖直後のそれは、けっして正確なものとは言えません。おそらくはこれが、青酸とヒ素を取り違えた原因だったのではないか。

あるいは、犯人は青酸とヒ素、両方の薬物を使ったのかもしれない、とも思いましたが、ふたつの猛毒を混合させて使用すれば毒作用はいっそう強力になる、というのは素人の考えです。実際は毒はたがいに打ち消し合い、薄まって作用することが多い。薬物についてある程度の知識のある人間ならば、ふたつの薬物を混入させることはないでしょう。

続出した毒殺模倣犯たち

和歌山のヒ素カレー事件が大々的に報道されてから、新潟・長野・東京で、類似の事件が相次いで起こっています。アイドルの自殺に伴う後追い自殺のようなもので、ショッキングな事件であるほど、こうした事件の連鎖反応は起こりやすい。

まずは新潟で、職場のポットにアジ化ナトリウムが混入され、出勤してきた人たちが知らずにお茶を入れて飲み、病院に運ばれるという**ポット毒物混入事件**が起きました。

アジ化ナトリウムは、自動車のエアバッグ製造などに起爆剤として使われる薬物ですが、体内に摂取すると、目まい・動悸・下痢・頭痛・卒倒・血圧低下などを引き起こします。幸い、この事件の被害者の命に別状はなかったようです。

続いて東京で、ダイエット薬と称して中学生19名に消毒薬のクレゾールが送りつけられ、飲んでしまった1名が重症となる事件が発生しました。

ポット毒物混入事件

平成10年8月10日午前8時ごろ、新潟県「ザイエンス」新潟支店で、電気ポットのお湯で作ったお茶を飲んだ社員10人が吐き気を訴えて病院に運ばれた。社員には手足のしびれや吐き気、めまい、胸やけなど薬物中毒の症状が見られ、うち3人は重傷。命に別状はなく、4～7日間の入院で全員が退院した。捜査の結果、ポットのお湯の中から、毒性の強いアジ化ナトリウムが検出された。翌年2月11日、元社員の小山内明彦被告を傷害などの容疑で逮捕。横領の発覚を怖れての犯行だった。この事件以降、同様の手口の事件が続発する。

そして、長野の**青酸カリウム入りウーロン茶事件**。

スーパーの店長が、缶がへこんでしまって売り物にならないとして除去した缶入りのウーロン茶を飲んだ。ところが、異様な味がしたので吐き出し、治療を受けて大事には至らなかった。警察が検査したところ、青酸カリウムが混入していたことがわかったのです。

だが、不幸なことに、この缶入りウーロン茶は1缶だけではなかった。すでに市場に出ていたのです。58歳の男性が、このウーロン茶を飲んだ直後に倒れ、病院で死亡していました。

もっとも、この男性はふだんから血圧が高く治療を受けていたことから、「急性心臓死」と診断されていて、解剖はされていなかったのです。たまたまテレビのニュースを見ていた男性の妻が、この青酸カリウム入りのウーロン茶の事件を知り、「もしや」と思って調べたところ、夫が同じスーパーで買ったウーロン茶を飲んでいたことを知った。そのときにはすでに、火葬も済んでいたといいます。

この男性を診断した医師は、警察に変死届を出していました。した

青酸カリ入りウーロン茶事件

平成10年9月1日、長野県のスーパー店長が、缶入りウーロン茶を飲んだところ、苦くて辛い味を感じたため、すぐに吐き出して警察に届け出た。県警科学捜査研究所で鑑定した結果、ウーロン茶から、猛毒のシアン化合物が検出された。缶の底に直径数ミリの穴が開けられ、接着剤のようなもので塞がれた形跡があった。後に8月31日の時点で、同店で購入したウーロン茶を飲んでいた中沢一十郎さんが死亡していたことが明らかになった。ウーロン茶を販売したスーパーには、安売りに抗議する電話が数本あったが、事件との関係は不明。

監察医制度

伝染病、中毒などのほか、死因が明らかでない死体は、警察の要請によって監察医が検死する制度。東京都23区、横浜市、名古屋市、大阪市、神戸市で実施される。

がって、もし長野県に**監察医制度**があったなら、この男性は必ず警察官立ち会いのもとに行政解剖されていたに違いありません。

解剖すれば胃粘膜のびらんと異臭に気づき、青酸化合物による中毒死はすぐに発見できたでしょう。朝食中にウーロン茶を飲んだということがわかれば、念のため飲食物を押収保存するよう指示されたでしょうから、事件への対応も迅速に済んだに違いありません。

もし、主婦がニュースを見ていなかったら、あるいはスーパーの店長の事件がなかったなら、この男性は永遠に心臓死と診断されたままだったのです。

監察医制度は各県に必要だ、ということを痛感させられる事件でした。

上野正彦が語る

地下鉄サリン事件

ナチスが生んだ猛毒「サリン」

未知の有毒ガスが発生!!

平成6年に松本サリン事件が起こったとき、新聞記者からの電話で起こされました。松本市の住宅街で正体不明のガスが発生し、大勢の人が中毒症状を起こしている。いったい何が原因なのか、という質問の電話でした。「視野が暗くなって、涙が出てくる」という症状なのだが、該当する毒物は何か、というわけです。

私はもともと監察医で、法医学が専門ですから、生きている人の状態を聞くよりも、亡くなった人の状態を聞いたほうが事態を想像しやすく、手っ取り早いのです。なにしろ、「死体は語る」ですから。だから、こう問い返しました。

「死んだ人はいるんですか」

すると、「いる」と言います。その人の状態を聞いてみますと、死んでいるにもかかわらず、瞳孔が縮小していると言うのです。

ふつう、人は死亡すると、神経系の緊張がゆるみます。したがって瞳孔括約筋（どうこうかつやくきん）も弛緩し、散大します。つまり、大きくなるのです。だから、死亡の確認には、瞳孔が広がっているかどうかというのが大きな目安になります。

ところが唯一、死んでいるのにもかかわらず瞳孔が縮小するケースがあるのです。それが有機リン系の農薬に中毒した場合です。

人間が大量の有機リン系農薬を摂取した場合、**副交感神経**を刺激され、心臓が停止します。同様の理由で、瞳孔も収縮したまま死亡するのです。

新聞記者には「それは有機リン系農薬だ」と確信を持って答えました。その後もテレビや報道関係者からひっきりなしに電話がかかってきましたが、すべて同じ答えをしたのです。翌日の新聞には、「謎の有毒ガス。7人死亡。有機リン系農薬か」というような見出しが出たのを覚えています。

副交感神経

交感神経とともに自律神経を構成する神経。交感神経が心臓を動かそうとするのに対して、副交感神経は逆に心臓を止めようとするように、交感神経に対抗するようにはたらく。

有機リン系の農薬による事件は、私も現職の頃に、ずいぶん数多く経験してきました。

有機リン系農薬は、かつてパラチオン、スミチオン、マラソン、テップなどの名称で、害虫駆除用に市販されていました。昔はこれを、農家でふつうに使っていたのです。防毒マスクをして噴霧する風景は、けっして珍しいものではありませんでした。いきおい、これを自殺や殺人に用いる事件も多発していましたし、何よりこの農薬は自然の生態系も大きく破壊してしまうことがわかったのです。昭和45年に規制ができて、以降、現在に至るまで製造も使用も厳しく制限されています。

規制が強化されたため、ここしばらくは有機リン系農薬による事件も少なかったものですから、あるいは不用になった農薬を側溝などに捨て、処分したために起きたものかもしれない、と思っていました。

ところが、それから1週間ほど経った新聞には、「サリン」という毒物であると発表されたのです。

サリンという言葉はいまではすっかり有名ですが、当時は耳慣れない言葉でした。私も初め

て聞いたのです。で、調べてみたら、第2次世界大戦中にナチスドイツが開発した有毒ガスだという。しかも、そのガスは吸っても、接触した皮膚からでも生体内に吸収され、死に至る猛毒だといいます。

ナチスドイツは、結局、これを実戦に使うことなく、敗戦を迎えてしまいました。それで、敗戦後のドイツには大量のサリンが残っていたそうです。さて、このサリンの平和的利用法はないものかと考えて、開発されたのが有機リン系農薬だったらしい。

地下鉄サリン事件は、この松本の事件がまったく解明されていない時期に起こりました。白昼の地下鉄、不特定多数の命を狙うテロ。この時期、誰もがいつどこで噴霧されるかもわからない毒物に、戦慄を感じていたのではないでしょうか。

それがオウム真理教による犯行だと聞いたときには、驚きました。いや、驚いたのは私だけじゃない。たぶん、日本中の人が驚いたはずです。宗教団体が毒物を生産した、というのは、世界でも類を見ない事件だったと言えるでしょう。

上野正彦が語る

長崎・佐賀保険金殺人事件

――なかなか死ねない睡眠剤

「睡眠」以外に使用されていた睡眠剤

睡眠剤服用による自殺は、昭和40年代まで、ものすごく多かったのです。というのも、当時は町の薬屋で誰でも簡単に睡眠剤を買うことができたからです。妙な言い方になりますが、入手がきわめて容易で、なおかつ意識不明のまま眠るように死ねるという、その安易さが受けていた。

やがて、睡眠剤も医師の処方箋なしでは入手できないように制限されたので、睡眠剤中毒による自殺は激減しましたけれども、かといって自殺者の数そのものが減ったわけではありません。自殺の手段は昔ながらの首吊りや飛び降り、あるいは電車への飛び込みに代わっただけで

した。

また、睡眠剤をそのまま単独で他殺に用いるケースはきわめて少なく、多くの場合、アルコールに混ぜるなどして（アルコールとともに服用すると即効性が出てくるため）眠らせて無抵抗にしてから絞殺、ないしはこの事件のように溺死させるといった別の手段との併用が多いです。

それもそのはず、睡眠剤は当然のこと経口服用するものですが、致死量は10グラムと言われ、かなり大量に服用しなければならない。だいたい錠剤は1錠0・1グラムですから、100錠は飲ませなければならない。飲ませる相手に怪しまれずに100錠というのは、まず不可能と見ていいでしょう。

自殺するにしても、4、5錠ずつ水と一緒に飲むわけですから、飲み終わったときには胃袋が水と薬でガバガバになっています。だから、眠り込んでいるうちに嘔吐してしまい、死なないというケースも多かった。

また、睡眠剤は死に至るまでに相当の時間を要しますから、死んでしまう前に発見されて、救急車で病院にかつぎこまれるという場合も多いのです。

そういう場合、胃洗浄を施して薬物を吐き出させることができれば、一命はとりとめること

ができます。

胃洗浄というのは、食道にパイプを突っ込んで、胃まで達したらじょうろで体温ぐらいの湯を流し込み、吐き出させるというものです。荒療治だと思われるかもしれませんが、そのぐらいでは目が覚めないのが睡眠剤なのです。

もうひとつの睡眠剤事件

１９９９年に起きた長崎・佐賀保険金殺人事件では、親しくしていた男性と共謀した容疑者が、夫と実の息子に保険金をかけて殺害しました。

この保険金殺人については、まったく同情の余地がないと言っていい。夫を殺し、息子を殺す。たとえどんな事情があろうとも、それが許されていいはずはない。せめて、殺す前にとるべき選択はいくつもあったと思います。

最近はこうした事件が増えましたが、同じ睡眠剤を用いた事件でも、私の知っているもので、とても悲しいものがありました。

寝たきりの重症身体障害者の息子を持った父親が、息子を殺害した事件です。父親の職業は

医師でした。

息子は、結婚してすぐ生まれました。それから35年間、母親は息子の世話に明け暮れていた。下の世話から食事の世話まで、母親のつきっきりの介護がなければ、息子は生きられなかったといいます。

70歳近くなり、老い先短くなった父親は、考えあぐねた末、苦渋の決断をしました。

息子を殺害し、自らは睡眠剤を服用して無理心中する。

そうすることで、長年息子の世話で自分の時間を持つことなく生きてきた妻に、自由な時間を与えてやろうとしたのです。

医師として、あるいは父親として、少しでも苦痛を与えないようにと考えたのでしょう。父親は息子にエーテルをかがせ、意識不明にしたうえで絞殺しています。息子もまた父親の考えを理解したのか、まったく無抵抗だったそうです。

父親は息子が息をひきとったのを見届けると、自分も睡眠剤を服用してそのかたわらに横になり、死を待ちました。

やがて、出かけていた妻が帰宅し、父親は一命をとりとめます。その後、父親は警察に自首しました。裁判の結果は、**心神喪失**と判断さ

心神喪失

刑法39条により、精神状態が刑事責任を問えない状態にあること。中等度以上の精神分裂病、躁鬱病はおおむね心神喪失と認定される。

れ無罪でした。

親が子を殺したことには違いないですが、この事件には、親子の煩悶（はんもん）と愛情が感じられます。

こうした例を思うと、佐賀で金銭のために息子を殺した母親は、やはり許せないと思います。

第4章

「射殺」事件を解読する

「射殺死体」の真実

日本において、「銃弾に倒れた死体」が発見されることは稀である。アメリカでは「拳銃を買うのはタバコを買うのと同じぐらい簡単だ」と言われているが、日本では持っているだけで犯罪である（銃刀所持法違反のため）。おそらくこのことが、自殺・他殺にかかわらず、銃にまつわる事件を著しく減少させているのであろう。われわれがよく目にする銃を使った事件は、せいぜい新聞で読む暴力団の抗争事件ぐらいだ。

日本が長きにわたり「治安のいい国だ」と言われてきた背景には、こうした「銃を所持することの困難さ」があることは、まちがいない。

上野正彦氏によれば、「銃によって死ぬ」人間には警察官が一番多いという。銃撃戦で倒れた警察官か、といえばそんなことはない。自殺

射殺死

である。銃が警察官の自殺に使われるケースがきわめて多い、と言うのだ。そうした中で、オウム真理教の関与が噂された「警視庁国松長官狙撃事件」と、プロの犯行とされた「八王子スーパー強盗事件」は、銃が使われた事件として、そして、いまだ犯人が検挙されていないことでも（2001年8月末現在）、記憶に新しいことだろう。

この章を読んでもらえばわかる通り、銃で人を殺すのもまた、非常に難しい。「銃撃が致命傷になる」のには、確実に急所を狙う必要があるのだ。逆に言うと、これを熟知して犯行を行なう人物は、まちがいなくプロと言える。では、いったいそれはどういったところからわかるのだろうか？

「人間が銃によって死ぬこと」や「銃で撃たれた身体から何がわかるか」ということは、実際どういったものなのか？　ここでは、「警視庁国松長官狙撃事件」や「八王子スーパー強盗事件」を例にそれを見ていこう。

「自殺死

八王子スーパー強盗事件

1995年７月30日夜、東京都八王子市のスーパー「ナンペイ」の２階事務室でアルバイトの矢吹恵さんと前田實美さん、パート従業員の稲垣則子さんの計３人が短銃で射殺された。稲垣さんには左前の額などに２発、矢吹さんと前田さんも頭部を１発ずつ撃たれており、３人とも頭蓋内損傷で即死状態だった。犯人はいまだ捕まっていない。[2001年８月末現在]

警視庁国松長官狙撃事件

1995年3月30日、当時の国松孝次警察庁長官が、自宅マンションを出たところを何者かによって拳銃で狙撃され重傷を負った。3発の銃弾を身体に受けたが、急所を外れており、命に別状はなかった。おりしもオウム真理教の強制捜査が始まったばかりで、オウム真理教の関与か取り沙汰されたが、いまだに真相は不明のままになっている。[2001年8月末現在]

上野正彦が語る

警視庁国松長官狙撃事件

――撃たれた傷からわかること

「射殺死体」のほとんどは警察官!?

日本ではアメリカなどの国に比べて、銃による殺人事件は圧倒的に少ないんです。手に入れにくいということが、銃犯罪を少なくしているのでしょう。私が現職のときには、銃による殺人事件の遺体を検死することはきわめて稀でした。年間5、6件あれば、多いほうでした。

もっとも多かったのは、警察官の自殺です。

警察というのは閉鎖社会で上下関係が厳しいから、少しの失敗が人を追いつめてしまうところがある。自殺した人は、そういう組織の重みのようなものから、逃げる場所がなかったんでしょう。かわいそうだなあ、と思いましたよ。

そういうわけで、銃による殺人がめったに起きないから、日本にはアメリカのように射殺死体を専門に鑑定する人がいないんです。だから、いまでもときどき私のところに銃で死んだ人の鑑定の依頼が舞い込んでくることがあります。

国松長官を撃った犯人像

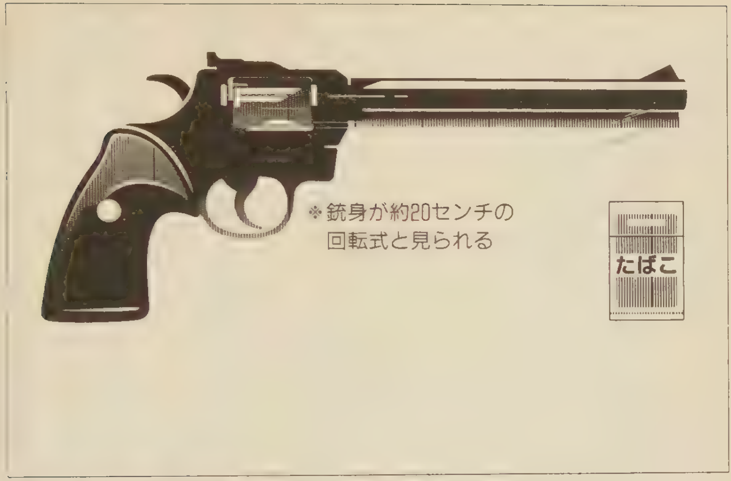
国松長官の事件は、一時**オウム真理教のしわざ**ではないかという噂が流れましたが、結局、犯人を捕まえるまでには至っていない。

この事件の犯人は、まちがいなくプロだと言えるでしょう。しかも、被害者の自宅マンション前で4発発砲していながら逃げおおせているのは、あらかじめ逃げる経路を作っていたからです。

言うまでもないことですが、銃を撃つと大きな音がします。当然、目撃情報を残しやすい。犯人が不慣れな場合は、こうした目撃情報をもとに探っていくこともできるでしょう。ところがそうはなっていないのは、あらかじめ計画を練り、逃走経路まで作っておくことのでき

オウム真理教のしわざ

当初オウム真理教の犯行だと噂された。その後、自分が狙撃犯だと小杉敏行警視庁巡査長が自供。しかし、決定的な証拠もなく、彼が実行犯だという可能性は否定される。また、現場に落ちていたバッジから、オウム真理教と交流があった北朝鮮のヒットマン説が浮上。だが、その失敗ぶりからこれも否定される。もうひとつが、いまだ逃亡中の元オウム信者・平田信犯人説だ。しかし、残された衣服などから割り出される身体的特徴からは、長身の平田の姿は見えてこない。その後も調査が続いているが、事件解決には至っていない。


※銃身が約20センチの
回転式と見られる
たばこ

▲事件に使われた銃は、元長官の体内に残っていた銃弾や目撃者情報から割り出された

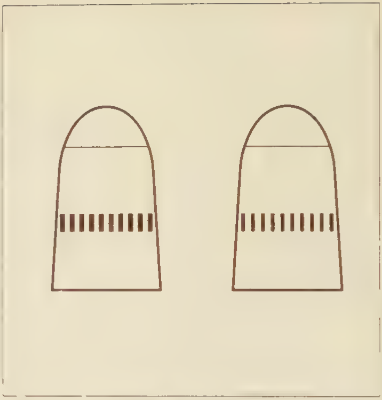
るプロのしわざであったからと言えます。

２００１年現在、警視庁は、インターネットのホームページに長官の狙撃に使用された銃を公開し、一般に情報を求めることによって犯人逮捕に役立つ情報を得ようとしています。

犯人が捕まってもいないのに、なぜ狙撃に使用された銃がわかるかといえば、むろん銃弾が残っているからです。

銃弾は銃口から発射されると、回転しながら飛んでいきます。この回転は銃によって違い、銃弾に線条痕（せんじょうこん）と呼ばれる独特の痕を残すのです。これは、銃の種類によって違う。線条痕は銃の指紋と呼ばれています。これを調べることで、銃の種類を特定することができるのです。

国松長官は、一時重体で命が危ないのではない



▲銃によって異なる線条痕。銃を特定する際に有効だ

かとさえ言われていましたが、いまは全快してスイス大使として活躍していらっしゃいます。

撃たれた身体からわかる犯人の手がかり

次項の「八王子スーパー強盗事件」（P91参照）で述べるように、人は銃弾によって脳幹を貫かれれば即死することになりますが、それ以外にも大きな血管、つまり動脈や心臓を撃たれればまず生きてはいられないでしょう。

国松長官は、全部で3発の銃弾を受けたわけですが、そのどれもが致命傷にはなっていなかった。まさに、不幸中の幸いと言うべきですね。

また、犯人が使用した銃弾が、標的に当たるとはじける形式（ダムダム弾など）のものでないこともよかった。これは、発射された銃弾が当たると、当たった箇所だけでなく、その周辺のあらゆる場所に飛び散って傷つけるもので、殺傷能力が高く、かなり危険なのです。この形式の銃弾によって撃たれた人の身体というのは、とにかく穴だらけ。銃弾の破片が、身体のあ

っちこっちにめり込んでいるという凄惨な状態になります。

他に、特徴的な銃としては、銃の筒がふたつある、2連式の猟銃でしょうか。この型の銃で自殺した方の遺体を以前、検死したことがあります。

彼はイスに座った状態で、猟銃の銃口を胸に当て、足の親指で引き金を引いて銃を発射していた。胸には大きな穴がふたつ。2連式ですから2発同時に発射され、胸を貫いたのです。足の親指に出血があったから、ああ、これは足で引き金を引いたんだ、と知ることができた。

場合によっては、こういった見ただけでわかる特徴がない場合もありますが、そういう場合にも、**硝煙**（しょうえん）**反応**を調べることによって、どういった状態で銃が発射されたかを推測することができます。だから、いかにも銃によって自殺したように見せかけた死体も、この硝煙反応がない場合、他殺のセンが出てくる。銃による死体の場合は、必ず硝煙反応を調べ、死因を究明しなければならないのです。

硝煙反応
銃を撃つことによって飛び散り、撃った人間に付着する硝煙が、ジフェニールアミンという試薬で検出されること。発砲場所を特定するために利用される。

それともうひとつ、銃弾は熱を持っていますから、至近距離で発射すれば、必ず衣服が焼け焦げている。焦げていないのは、かなり遠くから撃った場合です。したがって、衣服に残った銃弾の痕というのも、殺害の現場を考える重大な手がかりとなってきます。

上野正彦が語る

八王子スーパー強盗事件

─1発で仕留めるプロの銃弾

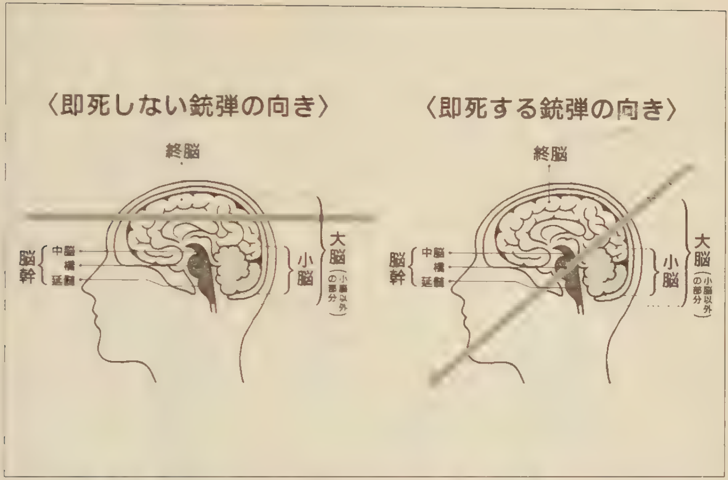
脳を撃っても人はカンタンに死なない

「ピストルで脳を撃ったら、人は即死する」

医学に疎（うと）い人は、そういうふうに考えがちです。しかし、実際はそうではありません。

人間の大脳は、脳幹と終脳に分けることができます。このうち、損傷することが直接、生命の維持にかかわってくるのは脳幹だけです。

脳を１本の樹木にたとえるならば、終脳は繁った枝葉であり、脳幹は文字通り幹にあたります。もっとも、脳幹の大きさはけっして大きくなく、成人男子の脳の総重量＝平均１４００グラムに対して、重量は２２０グラムしかなく、かたちも大きさもソーセージに似ています。


〈即死しない銃弾の向き〉
〈即死する銃弾の向き〉
終脳
大脳（小脳以外の部分）
小脳
脳幹
中脳
橋
延髄
終脳
大脳（小脳以外の部分）
小脳
脳幹
中脳
橋
延髄

▲急所である「脳幹」を銃で撃つには、頭の下半分あたりに狙いをつけて発砲しなければならない

脳幹はその下部に呼吸を行なうための呼吸中枢と、血液循環を司る循環中枢を有しています。したがって、ここが破壊されると、人は呼吸ができなくなると同時に心臓も停止してしまう。だから脳幹の損傷は即死になるわけですが、終脳はそうではありません。一時的な意識不明や、その後の脳機能障害を引き起こす危険はあるにせよ、即死にまでは至ることはないのです。

実際、脳に向かって発射された銃弾が頭蓋内で速度を落とし、貫通することができずに頭蓋骨に沿って脳の内部をグルグルとまわり、大脳のほとんどが損傷してしまった事例などもありますが、この場合でもその人は即死に至っていません。

よく映画などで、こめかみに銃口を当て自殺するシーンなどが出てきますが、銃弾が右のこめか

みから左のこめかみまで突き抜けたとしても、人は即死には至りません。この場合、銃弾は終脳を貫通するばかりで、脳幹は無事だからです。

したがって、こめかみに銃口を当てるならば、銃口はこころもち下に向け、脳幹に向かって発射されなければならない。確実に自殺をしたいならば、脳幹を狙うことです。

3人を襲った犯人の手口

八王子のスーパー強盗殺人事件では、3人の被害者が出ています。ひとりは女子店員。残りのふたりは、夏休みでしたから、アルバイトの女子高生でした。残念ながら、まだ犯人は捕まっていません。

事件は、午後9時にスーパーが閉店してから起こりました。殺害された女子店員は、9時15分に迎えを頼む電話をかけています。銃声が聞こえたのが9時20分頃といいますから、わずか5分間で犯行が行なわれたのです。

発射された銃弾は全部で5発。ふたりの女子高生の頭部にそれぞれ1発ずつ、女子店員に2発。さらに、金庫に向かって1発、発射されていました。被害者のうち、女子高生ふたりはガ

ムテープで身体を縛られていたが、女子店員のみは縛られていなかった。

金庫は鍵以外にダイヤルを合わせて開ける構造になっており、女子店員はダイヤルの数字を知らされていなかったといいます。

これらの状況から、私は次のような推理をしました。

スーパーの閉店後、犯人はスーパーに入り、背後から拳銃を突きつけた。手を挙げろ、と言って、女子高生ふたりにはそこにあったガムテープで、自分で自分たちの身体を縛るよう要求する。女子店員には金庫を開けてカネを出すよう命令した。

ところが、女子店員は金庫の開け方を知らない。犯人は当然、いらつくわけです。そのスキを見計らって、おそらく女子高生が逃げるか、逃げるそぶりか、とにかく犯人の目につく行動をとってしまったのでしょう。

犯人は即座にふたりの頭部に銃弾を撃ち込みます。その音に驚いた女子店員は、金庫の前から出口に向かって逃げ出そうとした。犯人はすかさず、女子店員に向かって発砲した。

女子店員に向かって発射された1発目の銃弾は頭部を貫通しています。しかし、それでは即死にならないことを、犯人は知っていた。とどめの1発を、今度は脳幹に向かって発射しているのです。

付近には人通りも多いですから、銃を撃ってしまった以上その場にとどまるわけにはいきません。犯人は腹立ちまぎれに金庫に向かって銃を発射し、カネを取らずに立ち去ったのです。

「殺しのテクニック」を持つプロ

これらの事実から浮かび上がってくる犯人像ですが、犯人は明らかに、銃の扱いに熟達した人物です。動く標的を1発で仕留める射撃技術の正確さはもちろん、どこを狙えば1発で人を絶命させることができるかを知っていることから見ても、相当「殺しのテクニック」を持った人物だと見ていいでしょう。ふたりの女子高生から命を奪った銃弾は、正確に脳幹を射抜いていますし、女子店員のほうは、1発目が脳を貫通しているにもかかわらず、念入りにとどめの1発を撃たれているのですから。

当日、金庫には500万円の現金が入っていたといいます。スーパーの1日の売り上げというのは、たいがいそんなものでしょう。

たかだか500万円のために、3人の人間を殺すことができるだろうか？　しかも、このケースは1円も現金を手にすることができなかったのです。500万円の価値は、むろん人によ

って違いますが、捕まったときの刑の重さを考えると、５００万円というカネは、けっして多いとは言えないと思う。

「殺しのテクニック」に熟達していて、なおかつ５００万円のために、躊躇なく殺人を行なうことができる人物。それはいったい、どんな人間だろうか？　そう考えていくと、私にはどうも、犯人は日本人ではないのではないかという気がしてならない。むろん、これは推測にすぎませんが、そうじゃないかと思うんです。

金銭価値がまったく違う外国では、５００万円は、10倍以上の価値を持つことさえあります。さらに、事件から5年、犯人がいまだに捕まっていないのも、おそらくはすでに海外に逃亡してしまっているからではないかという気がするのです。

第5章

「溺死」「轢死」事件を解読する

の実

「溺死体」「轢死体」の真実

夏休みともなれば、必ずニュースで目にする「水死」。要するに溺れて死ぬ「溺死（できし）」のことだが、泳ぎの不得手でない人でないかぎりは、水を飲んで「溺れる」感覚を理解するのは難しいかもしれない。

人間の肉体の比重は、水1に対して、0・9だと言われている。したがって、比重だけ考えれば、生きた人間の身体の10分の1は水面から出ているはずだ。溺れるケースとしては、混乱をきたし、助けを求めるために両手を空気中に上げてしまうことである。こうなると他の部分は沈むしかない。

そこでまた疑問が生じる。なぜ、口や鼻に水が入ると死ぬのか。溺死とは、当たり前だが窒息死である。では、なぜ水を飲むと窒息してしまうのか。

の真

「溺死体

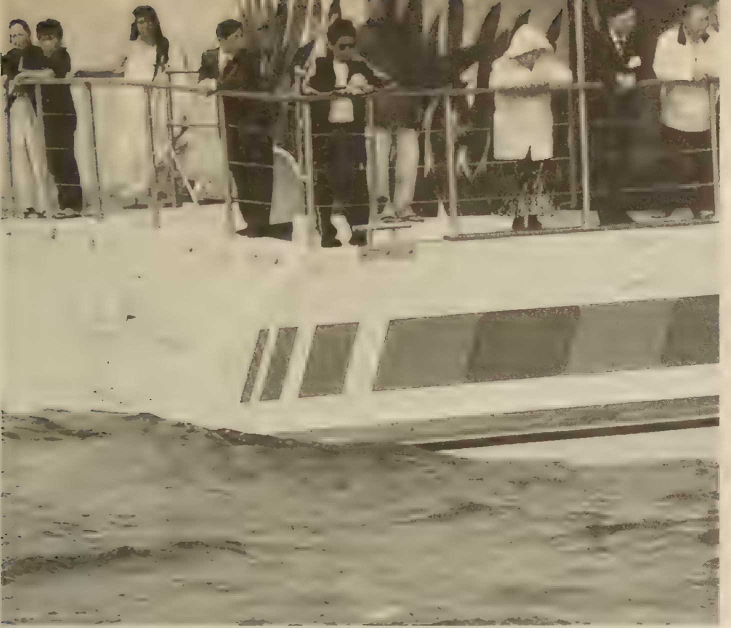
そして、「轢死（れきし）」である。線路や道路に横たわる死体。苛烈な重量と速度によってつぶされた死体。それが轢死体だ。

轢死体は、もちろん明治以前にはなかった。電車も自動車もなかったからである。文明の発達が新たな死体をひとつ増やしたわけだ。が、中にはあらかじめ殺害した死体を轢断させ、殺人の痕跡を隠滅するといった事件も起こる。

文明の発達につれて多様化したのは、殺人の手口だけではない。「死者の声を聞き、なぜ死に至ったか」に耳を傾ける学問——法医学もまた日々進歩しているのである。

「溺死」に関しては、ハワイ沖で起きた「えひめ丸・米原潜衝突事件」を例に、「溺れて死ぬとはどういうことか」を説明してもらう。また、「轢死」に関しては、さまざまな憶測を呼んだ「下山事件」と、美談として報道された「JR新大久保駅事件」を例に、法医学事情も含めつつ語ってもらうことにしよう。

「轢死体



えひめ丸・米原潜衝突事件

2001年2月10日（日本時間）、ハワイ・オアフ島沖で航行中の愛媛県立宇和島水産高校の実習船「えひめ丸」に、急浮上してきた米海軍の原子力潜水艦「グリーンビル」が衝突、えひめ丸は間もなく沈没した。えひめ丸に乗船していた高校生4人を含む9人が行方不明。救助された26人のうち12人が負傷してホノルル市内の病院に運ばれた。

下山事件

1949年7月6日、常磐線綾瀬駅付近の線路上で、前日から行方不明になっていた国鉄総裁・下山定則氏の轢死体が発見される。当初は殺人事件だと見られ捜査されたが、その後、付近で下山総裁を見たという目撃証言が出たことから、自殺説に大きく傾いていく。下山総裁は、国鉄の大量解雇問題で悩んでいたという。いまだ真相はわかっていない。

JR新大久保駅事件

2001年1月26日、JR新大久保駅で、ホームから転落した坂本成晃さんを助けようとして韓国人留学生・李秀賢さんと横浜市緑区のカメラマン・関根史郎さんの計3人が、山手線内まわり電車に跳ねられて死亡した。助けようとした男性2人は電車とホームの間に挟まれていた。JR新大久保駅の線路には、待避スペースなどの安全対策かされていなかった。

上野正彦が語る

えひめ丸・米原潜衝突事件

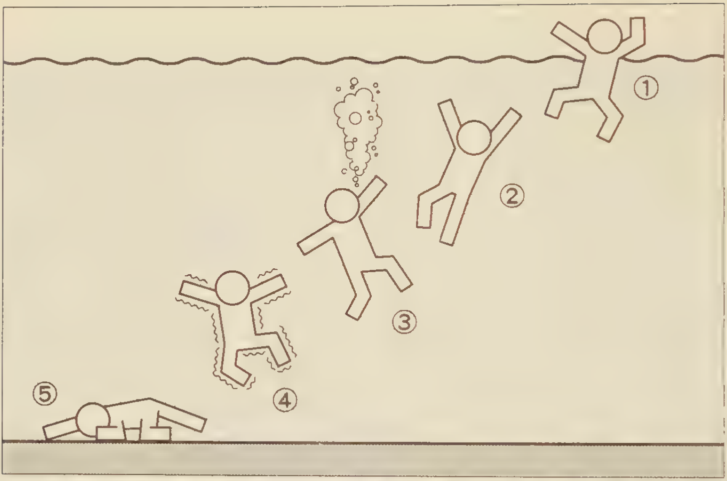
人が水の中で死ぬとは？

人が溺れて死に至るメカニズム

「溺れる」と一口に言いますけれども、そのメカニズムまできちんと理解している人は少ないと思います。

では、溺れるとはどういうことか。

まず、人間の身体というのは実にうまくできていて、必ず水に浮くんです。ですが、よく泳げない人はとにかく水に対する恐怖が先立って、パニック状態になってしまいます。静かにしていれば浮くのに、焦って手を水面より上に出し、助けを求めたりする。そうすると、重力が加わって水中に沈み、水を飲んでしまいます。



▲①「前駆期」、②「呼吸停止期」、③「呼吸困難期」、④「痙攣期」、⑤「終末呼吸期」を経て死亡する

それも、胃などの消化器に嚥下（飲み込むこと）する一方、肺などの呼吸器にも吸引してしまうわけです。

するとどうなるか。

肺の中にある空気はだんだん水に追い出されて、浮き袋の役を果たせなくなります。そうすると身体が沈んでいく。同時に、酸素を体内に取り込むのは肺の役目ですから、肺胞での酸素交換ができなくなり、窒息して死に至ってしまう。これが溺死です。

「溺死」のメカニズムはこれで、わかってもらえたと思います。

そして、ここでけっして忘れてはいけないのは、死因が溺死のケースに特徴的な死体の所見なのです。

①早期死体	②晩期死体	③永久死体
・死後間もないもの	・腐乱死体	・ミイラ ・死ろう化

▲「死体の状態分類」。ほとんどの死体が「早期」や「晩期」だが稀に「永久」死体も発見される

行方不明者はどこへ行った？

アメリカの原子力潜水艦グリーンビルと日本の実習船えひめ丸が衝突した事件ですが、えひめ丸の乗組員35人のうち、9人が行方不明となっています。結局、行方不明者の捜索は打ち切られてしまい、遺体の発見はできなかったようです。

9人の遺体はどうなったのか？　深い海で人が亡くなった場合、どういう状態になるのかをお話しいたしましょう。

死体にはいくつか分類があります。まず、死後間もない死体。これを早期死体と呼び、やがて腐敗して白骨となっていきます。これを晩期死体と呼びます。日本のように四季がはっきりしていて湿潤な気候のもとでは、死体は多くの場合、早期または晩期のいずれかです。しかし、たまにこれに当てはまらない死体が発見されることがある。

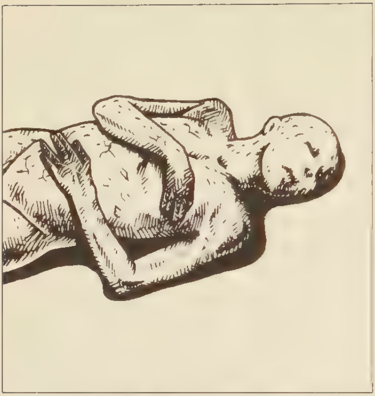
そのひとつがミイラ（P50参照）。日本では自然の状態でで

きることはめったにありませんが、乾燥した気候の土地ではできやすい。

私は現職のときに、一度だけミイラとなった死体を検死したことがあります。永代橋の欄干の中から、ミイラが発見されたのです。これは、狭いところに入りたがる性癖を持つ精神障害の人が、欄干の中にもぐり込んでそのまま餓死してしまい、海風にさらされてミイラとなったもので、きわめて稀なケースでした。

このミイラとともに、めったに日本でお目にかかることがないのが、死ろう化した死体です。

私は、えひめ丸の行方不明者は、みな死ろう化した状態で海底に沈んでいるのではないかと思っています。



▲死ろう化した死体。真っ白で、本当に石鹸のようになる

腐らない死ろう化した死体

ミイラと死ろう化、このふたつの特殊な死体を、永久死体と呼びます。これは、時間の経過によって死体の状態が変化しないことから、こう呼ばれるのです。

ミイラというのは、言ってしまえば人間の干物です。

スルメやニボシは、虫がついて食われることはあっても、乾燥しているため腐敗することはない。こういう状態になったのがミイラだと思っていただければいい。

一方、死ろう化というのは、水温5度以下の冷たい水中に、死体が放置された場合に見られます。ミイラが人間の干物とすれば、これは人間の石鹼、とでも言うべきものでしょう。

冷たい水中に放置された死体は、水中のカルシウムやマグネシウムと化学反応を起こし、石鹼のようになってしまう。石鹼はこすれば泡立つけれども、放置すれば何年経っても、腐ることがありません。人間の肉体がこういう状態になった場合、「死ろう化した」と呼ぶのです。

日本の気候は温暖ですから、ほとんどこの状態で死体が発見されることはありません。ただ、ときとして雪山などで遭難した人の遺体が、この状態で発見されることがある。

冬、雪山で雪崩などに遭い、遭難した人の遺体が、春になって雪解けしたときに死ろう化の状態で見つかることがあるわけです。

死ろう化して発見された坂本弁護士の息子さん

死ろう化ということに関しては、思い出すことがあります。オウム真理教の犯行であること

が明らかになった**坂本弁護士一家殺害事件**です。

オウムは、3人の遺体を別々の場所に埋めることにより、捜査を撹（かく）乱（らん）させようとしていました。3人の遺体がどこに埋められているかは、逮捕された実行犯の供述でわかったのです。これを発見すべく、警察は大々的な捜査を行ないました。

私は坂本弁護士の長男・龍彦ちゃんの遺体が埋められているとされたアルプスのふもとの湿地帯に行くことになりました。テレビ局の取材にコメントするためです。

湿地帯ですから、当然ぬかるんでいます。長靴を履いていくのですが、1歩踏み出すと、長靴が地面にめり込んでしまう。そこから足を抜いて次の1歩を踏み出せば、その足跡に水が入り込む。そんな場所です。

当然のことながら、これほどの湿地帯ですから死体が放置された場合、腐敗の進行はかなり早いと言えます。「ああ、これは見つかっても腐ってるだろうな」と思いました。ところが、龍彦ちゃんのおばあちゃんをはじめ、遺族の方がおられるので、コメントしろと言われても、気の毒で「腐っている」とはとても言えない。

坂本弁護士一家殺害事件

平成元年11月4日午前3時頃、坂本堤弁護士の家にオウム真理教の出家信者・早川紀代秀被告ら6人が押し入り、坂本弁護士と妻の都子さんを絞殺、泣き出した長男の龍彦ちゃんをタオルで口を塞いで窒息死させた。遺体はドラム缶に詰め、それぞれ新潟県名立町、富山県魚津市、長野県大町市の山中に3ヵ所に分けて地中に埋められた。平成7年9月6日より捜索が開始され、オウム心理教の幹部らの自供通りに相次いで3人の遺体が発見された。

そこで慎重に言葉を選んで、こうコメントしました。「龍彦ちゃんは、もう土に帰られたかもしれません」。翌日の新聞にも、同じ言葉が使われていたようです。

そして、遺体が見つかっていない以上、コメントは複数の可能性に言及しておく必要があります。こうつけ加えました。「遺体が埋められたのは11月だから、深く埋められていれば死ろう化の状態で発見される可能性もある」と。

アルプスのふもとですから、冬場は雪に埋もれ、あるいは凍っているのです。深く埋められていれば、遺体が死ろう化していることはじゅうぶんあり得ることでした。

警察の捜索は難航し、結局、遺体が発見されたのはそれから1週間経ってからのことでした。遺体は、なかば死ろう化、なかば腐敗した状態で発見されました。冬の間に死ろう化が進行し、いまだ死ろう化しきっていない部分が、腐敗していたわけです。

この例にも明らかなことですが、日本では、完全な状態で死ろう化することは本当に稀なのです。四季がはっきりしているので、夏が来れば死体の温度は上昇する。そうすると、死ろう化しきれない部分が、腐敗する。なかば死ろう化、なかば腐敗。そういう場合が多いのです。

上野正彦が語る

JR新大久保駅事件

駅のホームは絶壁である

轢断で死に至る3つのケース

現職のときには、轢断現場や駅、あるいは警察署の遺体安置所でかなりの轢断死体を見ました。

轢かれて死ぬには、大きく分けて3つの死因があります。

まずひとつめは、電車に直接跳ね飛ばされて死ぬケースがあります。これはだいたい頭を打って死ぬもので、後で紹介する撲殺死体と死因はほとんど同じと言えます。

次に、車輪に轢かれてバラバラになった際の失血死。これも誤ってレールに転落して轢かれる場合と、自殺で寝そべって轢かれる場合とふたつあります。これは検死すればどちらである

かすぐわかる。

前者は、死のうとは思っていないので、遺体に残る傷は線路の向きに対してまちまちです。しかし、後者の自殺の場合は、線路の進路の方向に対して直角なかたちで、首なり、身体が切断されていることが多い。遺体に残るそうした傷は、アルコールや睡眠剤で眠らされているケースを除けば、明確に死のうという覚悟で線路の向きを意識した結果であると言えます。

それから、一番多いのが、誤って落ちてしまい、そこからホームに上がろうとしたところに電車が入線して、車両とホームに挟まれて死ぬ、というケース。電車とホームに挟まれた身体はどうなるかと言うと、内臓がぐちゃぐちゃになります。身体は轢断されていないし、どこも切れたりしていないのですが、擦過傷が挟まれた場所に帯状についている。その場合は、内臓破裂か脊髄損傷ということで、即死します。

この事件の場合は、新聞などの報道を見ると第3のケースだったようです。つまり、酔っぱらって線路に落ちた人を助けようと飛び降りて、引き上げようとしているうちに電車が入ってきて、ホームとの間に挟まれてしまった。線路のわきに少しでも逃げ場があれば助かったのに、本当に残念です。

電車のホームは「絶壁」である

講演会などで、子どもたちにも言っているのですが、プラットホームとは「絶壁の上」だと思う必要があります。プラットホームというと、電車を日常的に利用する人にとっては、すっかり生活習慣の中に溶け込んでいるでしょう。

しかし、あれほど危険と隣り合わせの場所はない。歩く人は、落ちると死ぬかもしれないという意味で、日々「絶壁の上」を歩いているようなものです。だから、電車を利用する場合はかなり注意してほしいと思います。

プラットホームも、この事件の後、ずいぶん改善されたと言います。やはり、ああいった危険な場所には、柵を作って出入り口をつけておく必要があります。プラットホームの高さも、ひとりで登るには、高過ぎる。

運悪く線路に落ちた場合でも、とっさにレールに伏せて助かった例もありますから、やせた人なら伏せれば大丈夫でしょう。

ただし、着衣の一部でも引っかかれば、身体が持っていかれてしまうから危険は危険だと思います。

やはり、「絶壁の上」を歩いていると自覚して、落ちないようにするのが一番いいでしょう。

失われてしまった自己犠牲の精神

このＪＲ新大久保駅事件では、酔っぱらった人を助けようとして、ふたりの方が飛び込んで亡くなっています。

助けに行った人は、昔の考え方を持った人だと思います。自分の命を投げ出してまで、人の命を救おうとするわけでしょう？　自分が１００％助かるわけではないのに、それでも救助に行くというのは、「命の尊さ」を知っている昔の人だと思います。いまの人はそんなことはしないと思います。

いまの教育から考えると、自分の命は人より大事だっていう考え方でしょう？

自分の命を危険にさらしてまで他人を助ける必要はない。そこまで極端に教えてはないかもしれないけれども、自分勝手な生き方でよいとする風潮があるでしょう。

犠牲者には、韓国の青年もいました。韓国は徴兵制があるから、人の命をみんなでかばい合うという考えがあったのかもしれません。

上野正彦が語る

下山事件

他殺？自殺？不自然な国鉄総裁の轢死体

疑いを残した轢断死体

　戦後まもなくの頃ですが、国鉄の下山総裁が、常磐線綾瀬駅近くで深夜どしゃぶりの中、轢断死体として発見されたことがありました。死体はすぐさまT大学の法医学教室で、司法解剖が行なわれました。

　解剖の結果、轢断部に**生活反応**がないという理由で、総裁は死後の轢断、つまり他殺と結論づけられました。

　すでに述べたことですが（P39「酒鬼薔薇聖斗事件」参照）、死んで時間が経った死体からはほとんど血液が流れ出ません。下山総裁の遺

生活反応
火傷による水ぶくれなど、生きている状態でしか表れない反応のこと。これにより、傷が生前のものか、死後のものかを判断することができる。

体からも、血液が流れ出た痕（あと）が見られなかったのです。

解剖を行なった医師は、それゆえ下山総裁は死後に轢断されたと判断し、殺人事件であると結論づけたのでした。

当時国鉄では、大量の鉄道員が解雇されたこともあって、他殺の可能性はじゅうぶんありました。

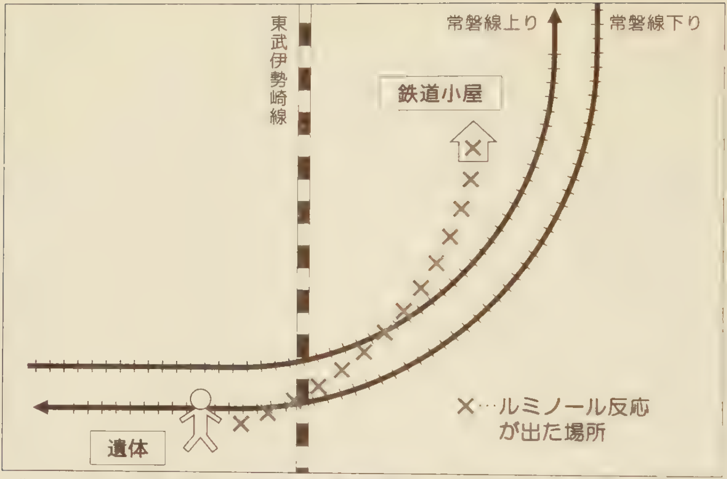
しかし、Ｋ大学の学者たちはこれに異論を唱えました。飛び込み自殺の場合、即死に近いかたちで死亡するので、轢断部に生活反応が表われない可能性はじゅうぶんにある。死後の轢断と判断するのは早計であると言うのです。

そう考えていくと、大量解雇という背景も、総裁の自殺を裏づけるものになってきます。つまり、総裁は大量解雇に悩むあまり、自ら命を絶ったというわけです。

「生活反応」という聞き慣れない用語が、マスメディアに登場しました。自殺か他殺かという論争の行方を、日本中が固唾（かたず）を呑んで見守っていたのです。

これとは別に、法医学上の争点として、現場に残った血痕の問題がありました。

血液型の分類法は、ポピュラーなＡＢＯ式以外に40数種類あります。ＭＮ式はウサギ、Ｐ式は馬、Ｑ式は豚などを使って人間の血液を分類したものです。


東武伊勢崎線
常磐線上り
常磐線下り
鉄道小屋
×…ルミノール反応が出た場所
遺体

▲ルミノール反応は、線路わきの鉄道小屋から、線路を越えて、点々と遺体まで続いていた

事件があって数日後、警察は現場の広い範囲にわたってルミノール反応検査（P40参照）を実施しました。これは、現場に残った血液反応を調査するものです。

すると、線路わきにあった鉄道小屋から始まり、下り方向のカーブした軌道内、そして総裁の遺体があった場所まで、点々と20～30メートルにわたり、ルミノール反応は陽性と出ました。

これらの血痕を集め、3種類の血液型が検査されました。すると、鉄道小屋から検出された血痕も、下り方向のカーブした軌道内から検出された血痕も、そして総裁自身の血液型もA・M・Q型と判断されたのです。

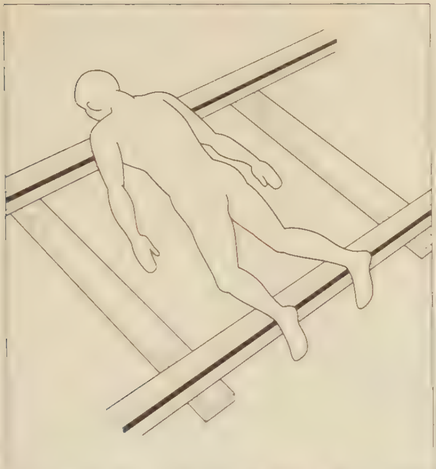
このことから、T大学の医師たちは次のように結論づけました。

鉄道小屋で殺された総裁は、20〜30メートルにわたって軌道内を搬送され、レールの上に放置された。その後、列車が通ったために、刺した傷や切った傷をつぶしてしまい、わからないようにしてしまったのだ、と。

つまり、飛び込み自殺に見せかけた巧妙な殺人事件です。

しかし、K大学の医師たちはこれに対して異論を唱えました。

鉄道小屋の血痕は現場作業員のものであり、軌道内の血痕は、列車の乗客が水洗便所から流した（当時、列車のトイレはたれ流しでした）血液である可能性も、否定しきれないではないかと、主張しました。他殺とするには安直に過ぎると言うのです。



▲T大教授は、遺体がこのように置かれたと主張

論争は平行線をたどったまま続きましたが、DNA鑑定も確立されていなかった時代ですから、双方ともに決定打がないまま、連合軍総司令部の要請により、自殺として事件は打ち切られました。

当時、日本は占領下にありましたから、やむを得

ないことだったのです。

自殺・他殺の境界線

現在なら、この下山事件も、おそらくＤＮＡ鑑定（Ｐ55「ルーシー・ブラックマン事件」参照）によって、簡単にカタがついたことでしょう。血痕が同一人物のものかどうかは、すぐに判断することができるのです。

もっとも、国鉄総裁のような要人であれば、どんな場合でも解剖されることになるでしょうが、現在でも監察医制度のない都道府県は多く、自殺であることが明白である場合、解剖されることなく処理されることもきわめて多いのです。

その際、警察はいかにして自殺か他殺かを判断するのでしょうか。

下山総裁の例にあるように、轢断死体には生活反応は表われにくいものです。しかも、胸を刺すことによって人を殺した犯人なら、当然、遺体の胸部を線路に置き、列車の通過によって胸部をつぶしてしまうことによって、自殺を演出することを考えるでしょう。いまここに胸部が轢断された死体が発見されたからといって、それが自殺か他殺かを判断することは、解剖し

てみないかぎり、検死の情報だけでは難しいと言えます。

そういう場合、現場の状況が決め手になってきます。

人の死体というのは大きく、重いものですから、運搬しようとすればどうしても人目につくことになる。犯人は、当然人目を避けて人気のない線路に死体を置こうとするでしょう。ところが、これがかえって不自然さを作り上げることになるのです。

たとえば、いまここに自殺しようとする人がいるとして、はたしてその人はわざわざ人気のないところを選ぶでしょうか？　自宅から遠く離れた地まで行こうとするでしょうか？

人気がない線路の上に横たわる轢断死体。それだけで、他殺の匂いが濃厚になってくるのです。警察は一般に、こうした点からも、自殺か他殺かを判断することになります。

第6章

「撲殺」「焼死」事件を解読する

」の真実

「撲殺死体」「焼死体」の真実

「殴る」という行為はきわめて原始的な衝動に基づいている。むろん凶器を用いて「殴る」こともあるだろう。凶器は、バットや鉄パイプなど多岐にわたるが、どちらにせよこれらの凶器は、刃物や拳銃などに比べて、「手の延長」という意味ではるかに直感的で、本能的な道具だと言える。

殴打によって、相手を即死させることは大変難しい。そのため、殴打による殺人には計画的なものはめったに見受けられないという。逆に言うと、即死しないものの、「殴打」による死はじわじわと訪れる。殴打直後に死亡するのは稀で、ある程度時間をおいて死に至るケースが圧倒的に多いのだ。一番多いのは、殴打のショックによって脳を傷つけて死に至らせるものだが、危険なのは頭にかぎらない。後に紹介

の真実

撲殺死

するけれども、臀部を蹴られて死んだケースもあるのだ。

そして、「焼死」。木造住宅の多い日本では、つねに火事の危険がつきまとう。

では、なぜ人は「焼死」するのだろうか。思いつくのは、炎に包まれての一酸化炭素中毒死。これは誰でも知っている。しかし、他にも皮膚が焼けたことによるショック死や、炎を気道に吸い込むことで気道がただれて呼吸できなくなり、窒息死するといった死因もある。もちろん死体が焼けているからといって、「焼死」とはかぎらないのは「撲死」の章で述べた通りだ。同じように、死体を焼くことで、証拠の隠滅を図る場合もある。

「撲殺」では、肉親をバットで殴りつけた「岡山金属バット殺人事件」を例に、「殴り殺されるとはどういうことか」を見ていく。また「焼死」では、女性を殺した後に遺体を焼いた「足立区首なし死体事件」を例に、「人が焼けるとはどういうことなのか」語ってもらおう。

「焼死体

岡山金属バット殺人事件

2000年６月21日、岡山県邑久郡の高校に通う野球部員の少年が、自分をからかった下級生部員４人をいきなり金属バットで殴り、２年生部員１人に、頭の骨が折れる重傷を負わせた。その後少年は自宅に帰り、母親を「息子が犯罪者では迷惑がかかる」という理由で金属バットで殴打して殺害。逃走の末、７月６日、秋田県内で殺人などの容疑で逮捕された。

足立区首なし死体事件

1996年1月6日、小野悦男被告は、東京都足立区の自宅アパートで同居していた宮内良枝さんをバットで殴って殺害。遺体の一部を切り取って冷蔵庫に保管して、翌日空き地で遺体を焼却したうえ、頭部をノコギリで切断して自宅に持ち帰り、自宅裏の畑に埋めた。小野被告は「ケンカしてカッとなってやってしまった」と動機を説明した。

上野正彦が語る

岡山金属バット殺人事件

時間差で死に至る「撲殺」

残虐ではない撲殺犯人の心理

人間の肉体には、いくつかの急所があります。

たとえば、手首や首にある動脈を切られれば、人はほどなくして死に至る。心臓を刃物で貫かれればやはり長くは生きられないし、拳銃などで脳幹を破壊されれば、呼吸や心臓の拍動など、人体が生命活動を行なうために必要な脳からの命令が送られなくなって即死してしまうでしょう。

バットなどで人を「殴り殺す」という場合、こうした「急所」を狙うことはまず不可能です。すなわち、人を即死の状態にするために「殴る」という方法はまったく適さないと言っていい。

したがって、犯行は計画的ではない突発的な場合が多く、殺意を持っていないことも多いのです。

撲殺犯とバラバラ殺人犯の共通点

たとえば、こういう例があります。

いじめられっ子が、バットでいじめっ子に復讐することを考えた。ふだん、いじめられている相手ですから、恐ろしいわけです。当然、正面きっては殴りかかることができない。必ず、背後から忍び寄って殴りつけることになる。

殴られたほうは当然、殴打によるショックで気を失って倒れたりする。

しかし、いじめられっ子は相手が倒れたからといって、殴る手を休めることができないのです。なぜなら「もし、立ち上がってきたらやりかえされるかもしれない」と考える。そうなったらどうしようという恐怖が精神を支配してしまっていて、冷静な判断をすることができなくなってしまうのです。

だから、とにかく死にもの狂いで殴り続けることになります。すでに相手がこと切れている

場合にさえ、殴り続けることになる。相手が生きているか、死んでいるか確認することさえなしに、一心不乱に殴り続けることになるのです。

こうした事件で殺された死体が発見されますと、当然死んでからも殴られていますから、なかには生活反応のない外傷も多い。それは無惨なものです。

この現場を精神科の医師などが見た場合、バラバラ殺人事件と同様「きわめて残虐な性格を持つ異常殺人者」というような犯人像をおっしゃる方も多いのですが、それは違う。とにかく恐ろしくて冷静さを欠いているからムチャクチャに殴るので、犯人は小心で気の小さい人間のケースが多い。

刃物による「メッタ刺し」の殺人も、同じタイプの犯人像が想像できます。起き上がってきたらどうしようという恐怖が、必要以上に刃物を突き立てさせるのであって、残忍さではないのです。

真に残忍な犯人は、殺人の現場にいても冷静でいることができますから、すでにこと切れた相手を突き刺したり、殴ったりはしないものなのです。

もっとも、岡山金属バット殺人事件の場合、犯人の少年は初め野球部の後輩数名に殴りかかって重軽傷を負わせた後、家で母親を殴り殺しています。

調べに対しては「犯罪者の親になる母親を見る自分が、つらくて仕方なかった」と供述しているそうですが、逃亡中につけていた家計簿には、母親の氏名を呼び捨てにして「狩った」と記してあったそうです。

　こうした例を見ると、「撲殺は気の弱い者の犯行」というセオリーも、単純には成り立たなくなっているのかもしれません。

時間差で効いてくる危険な脳打撲

　すでに述べたように、殴ることによって人を殺すというのは、変な言い方ですけれども、けっして効率の良い殺し方ではない。なぜなら、一撃のもとに相手を打ち倒し、即死のかたちにまでもっていくというのはまず不可能だからです。複数回以上殴らなければ、人は死に至らない。

　では、殴られた人はどのようなかたちで死に至るかについてですが、まず頭を殴られた場合を考えてみましょう。

　頭をいくら殴っても、脳の真の急所である脳幹は頭蓋の中にありますから、そこを損傷する

ことはできません。したがって、頭を殴っても、人は一般的に即死には至らない。だが、ある程度時間をおいたなら、仮に殴った回数が一度だけでも、人が死に至ることはじゅうぶんにあり得ます。

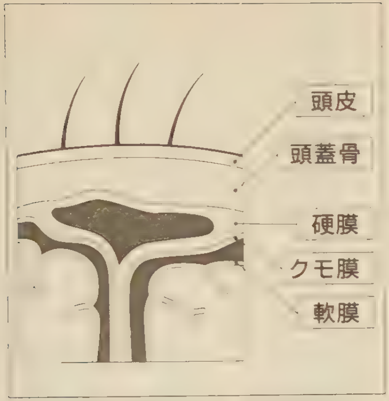
こんな事件がありました。

酒を呑んで自転車に乗り、交差点を直進しようとした中年男性が、トラックと接触、転倒して頭部を打撲しました。

男性はトラックの運転手とともに近くの病院に出向き、手当てを受けましたが、たいした傷ではないからと、薬をもらって家に帰ることになったのです。警察に届けるほどの事故でもないと、両者は話し合いの末、別れました。

ところが、翌朝この中年男性は帰らぬ人となったのです。

男性が帰宅したとき、家族はすでに寝ていました。当人もそのまま眠りについたのです。おそらくは足がふらついたり、なんらかの症状が出ていたはずですが、酒の



▲外部の衝撃から脳を守るため、3層の膜がある

酔いのためだと考えていたのでしょう。

翌朝、妻が起こしても、男性は高いびきをかいて寝ているばかりで、いっこうに目を覚ましません。異常を感じた妻は、救急車を呼びました。

病院の検査で、男性は**脳硬膜外血腫**（のうこうまくがいけっしゅ）と診断されました。しかし、手術は間に合わず、男性は死亡してしまったのです。

頭蓋骨の下、脳は3層の膜によって保護されています。外側から、硬膜・クモ膜・軟膜と言いますが、この男性の場合は、硬膜の外側に出血があったのです。

自転車で転んだばかりのときは、外傷の痛みがあるばかりでした。だが、1、2時間もすると、この硬膜外の出血が次第に頭蓋骨の下にたまってくることになります。この頃には、血液が50ccくらいたまってくるので、意識はあるが千鳥足になる。さらに4、5時間が経過し、硬膜外の出血が１５０cc程度になると、たまった血液が脳を圧迫し始めます。こうなると、脳に損傷がなくとも、圧迫のために脳に血がまわらず、人は死亡するのです。つまり、たとえ外傷はたいしたことがなくても、頭部の打撲は、死に至る危険性を大いにはらんでいるというわけです。

脳硬膜外血腫

頭部を強く打つなどして、脳を覆う硬膜の外で出血して血液がたまること。出血が多くなると、脳が圧迫されて頭痛、嘔吐などの症状が現われ、やがて昏睡に陥る。

尻を蹴られても人は死ぬ

危険なのは、頭部だけではありません。人間の肉体の他の部位も、打撲を受けることによって死に至ることがある。

ある大学のワンダーフォーゲル部が、新人強化訓練のため山登りに出発、新人の脱落者は集団暴行なみのシゴキを受けるということがありました。

新人のひとりは歩行不能となり、家族に連絡され、付き添われて帰宅しました。

しばらくは家で寝ていましたが、2日後から尿量が減少し始め、3日後に無尿となりました。吐き気を訴え血痰（けったん）を吐き、呼吸困難になって、5日目に入院しましたが、その翌朝に死亡したのです。

検死してみたところ、臀部（でんぶ）を中心に広い範囲に皮下出血と筋肉内の出血腫脹（しゅちょう）（腫れた状態）が見られました。

頭部に損傷がないのは、「おそらく頭部は危険だ」という加害者の考えがあって、シゴキでそこだけは避けられたものと見えます。おそらく臀部は筋肉だけだから安全だと考えて、そこを中心に蹴られたので

尿毒症
腎臓の機能低下によって尿素などの老廃物が蓄積して起こる。嘔吐、下痢、心不全、意識障害などの症状が表れる。

しょう。

しかし、皮下、筋肉の出血が強度になれば、ミオグロビンという物質が発生して腎臓につまり、徐々に尿が出なくなって、**尿毒症**を引き起こします。ふだんは腎臓が血液中の老廃物を濾（ろ）過（か）しているので大丈夫なのですが、そうなると、身体中に老廃物が出まわってしまうわけです。尿毒症を起こせば、人工透析をしないかぎり人は生きてはいられません。しかし、当時は人工透析器はありませんでした。

こうした例から考えると、肉体のどこの部位でも、殴られれば死の危険はあると言えるのです。

いずれにせよ、「人間を教育するのに、どの部位であろうと殴る蹴るの暴行は許されない」と私は思います。

上野正彦が語る

足立区首なし死体事件

死体は簡単には燃えない？

火災時の死体は事故死か他殺か解剖でわかる

火災現場の死体を検死する際、注意しなければならないことは「その人が火事で死んだものか、それともその前に死んだものか」を見きわめることです。犯人が殺人を隠蔽（いんぺい）するために、その犯行現場に火を放つといった事例はままある。それを確定するのは、死者を検死解剖してみるほかありません。

もっとも、火災現場の死体というのは、当然のことですが焼け焦げていますから、見た目だけで事故死か他殺かを判断することは難しい。たとえ首を締められて殺されていたとしても、死体の表面が焼け焦げてしまえば、その痕跡は見つかりません。したがって、解剖することに

なります。

　まず、火事で死んだかどうかの判断は、気管を切開してみることでわかります。火事で人が亡くなった場合は、気管粘膜に炭粉などが付着しています。これは火事の最中に呼吸していたことの証明になるわけです。

　これが見つからない場合、殺人の疑いが濃厚になる。したがって、他の部分を丁寧に解剖していき、血液や胃内容、骨折の有無などを子細に調べていくことになります。

人の焼死体は動物の丸焼きと同じ

　火災現場で発見された死体は、当然のこと表面は焼け焦げています。場合によっては、すっかり炭化して、真っ黒になっていることもある。ただ、ふつうそのように真っ黒になるのは、身体の一面だけです。たとえば、うつ伏せで倒れた場合、背中は火に炙られて真っ黒に焼け焦げていても、腹や顔までは火がまわらないから、そうはならない。

　仮に身体の表面がすっかり焦げてしまった場合であっても、身体の内部はきれいなものです。魚を完全に真っ黒な炭にするのは、フライパンでじっくり焼かないかぎりできないでしょう？

たとえ表面が黒くなっていても、ふつう中までは火が通らないものなのです。火災現場の死体にしても同様で、表面が黒くなっていても、中までは焼けていない。だから、解剖することによって、さまざまな情報を得ることもできるわけです。

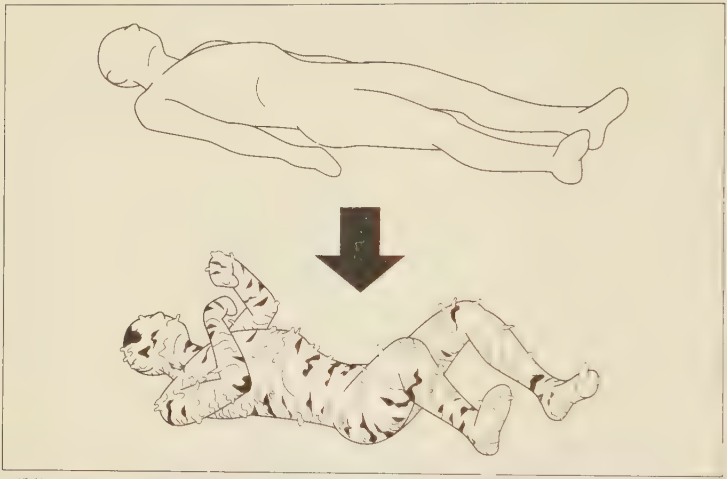
死体を焼こうとした小野悦男の本当の狙い

1996年、東京・足立区の駐車場で首のない女性の焼死体が見つかりました。首なし死体の発見は、マスコミを大きくにぎわせましたが、犯人が確定して、さらに話題を呼びました。犯人は、かつて「**松戸OL殺人事件**」の犯人として検挙されながら、冤罪（えんざい）として無罪を勝ちとっていた小野悦男だったのです。しかも、幼女にわいせつ行為をはたらいていた事実が同時に明らかになり、冤罪のヒーローが、やはり殺人犯であったことが明白になったのです。

発見された首なし死体は、小野と同棲していた女性のものであることがわかりました。女性の首は、小野の家の裏庭に埋められていました。

松戸OL殺人事件

1974年、松戸市で信用組合職員の宮田早苗さんが殺害され、小野悦男容疑者が逮捕された。一旦は無期懲役の判決を受けるが、1991年4月の東京高等裁判所で、自白に信用性がないとして、無罪の判決が下された。



▲遺体のときにどんなポーズをとっていたとしても、熱が加わると筋肉が収縮し、闘士型をとる

小野は遺体を焼いた理由について、こう供述しているといいます。

「骨を実家に返したいと考えて焼いたが、骨にまでならず、頭蓋骨だけでも実家に返したいと思い、持ち帰った」

私が思うに、小野は死体を焼くことによって、火葬場で焼いたときのように、骨壺に収まるような状態にすることができると考えていたのだと思います。そうなれば、隠すのも容易ですから。そこで、女性の遺体を屋外の駐車場に運んで火をつけたのでしょう。だが、そこで予期せぬことが起こった。

まず、死体が思うように焼けなかった。人体というものは、ふつうに火をつけたぐらいでは、骨になるまで焼けないのです。バーナーで徹底的に

炙（あぶ）れば別ですが、油をかけて燃やしたぐらいでは、表面が焼け焦げるばかりで、骨にはならない。

さらに考えられるのは、おそらく小野は死体を運び、焼くにあたって、死体をやわらかく折り曲げて、背骨が丸まった状態にしていたのではないかと思うのです。それが、火をつけたとたん、まっすぐに伸びたのではないかと思います。

人体は、火をつけると、「闘士型」と言うのですが、ボクサーのファイティングポーズのようなスタイルをとるのです。火の熱によって筋肉が収縮するためにこうしたかたちになるのですが、たとえば、前ページの図とは逆に、火をつけるときに身体を折り曲げていたとしたら、これが伸びて、次第にファイティングポーズのかたちになってくることになる。丸くなっていた背骨は、伸びてくるわけです。

小野はきっと、これに驚いたのではないでしょうか。これは目立つからとてもではないが死体の近くにいられない。しかも、死体は燃えにくく、なかなか骨になる様子がない。だから仕方なく、情報量の多い首だけを切り落として持ち帰った。それが真相だったのではないかと私は考えています。

◆第2部

名作「死体」の嘘に迫る

映画やマンガの世界では、死体は山のように存在する。ところが、現実では死体に接する機会が少ないため、映画やマンガに登場する死体は想像で描かれることが多く、死体の実態から遠くかけ離れたものも少なくない。この第２部では、第１部で上野正彦氏に語っていただいた死体の知識をフル動員して、あの映画のマンガの「死体」の嘘を徹底的に検証する！

名作「死体」の検証学
▼
撲殺

〈第1章〉

あしたのジョー

あの衝撃のラストから20年。真っ白な灰になった後、いったい、ジョーはどうなったんだ!? 生きているのか、それとも死んでしまったのか。ついに真相が明らかになる！

▼

矢吹ジョーは、天性のボクシングの才能を丹下段平に見い出され、ボクサーとしての道を歩んでいく。やがてライバル、力石徹との対決が迫る。力石は、階級の違うジョーと対戦するため、過酷な減量をして登場した。苛烈をきわめた力石との戦いに、ジョーは辛くも勝利する。しかし力石は、過酷な減量とジョーの強烈なパンチでこの世を去る。ショックでジョーは、深刻なスランプに陥ったが、ジョーは復活し、ついには世界チャンピオン、ホセ・メンドーサと戦うことになる。「週刊少年マガジン」に連載され、ボクシングマンガの名作として、20年を経たいまも評価が高い。
原作●高森朝雄　画●ちばてつや（講談社）

時代の象徴だった「力石徹」

数あるフィクションの登場人物の中で、もっともその死が惜しまれた人物は、『あしたのジョー』の力石徹ではないだろうか。

力石がジョーとの死闘の末、この世を去ったとき、寺山修司の劇団が中心になって、告別式がとり行なわれている。会場となった講談社講堂には700人のファンが集まり、全国から弔電が寄せられた。1970年のことである。

これだけ聞くと、人気キャラクターのファン集団が集って開催したカルト集会みたいに感じるかもしれない。だが、告別式の列席者ばかりでなく、当時の「少年マガジン」の読者のほとんどが、力石が死んだということにしたたかショックを受けていたのだ。告別式には作者である高森朝雄（梶原一騎）とちばてつやも列席したが、ちばは会場に入るまで、冗談だと思っていたらしい。だが、会場の厳粛な雰囲気に襟元を正さずにはいられなかったという。「力石ショック」は作者の思惑さえ超えていたのである。

おそらくは『あしたのジョー』ほど、読者との間に、幸福な関係を結べた作品はなかった。この作品を熱狂的に読んだ読者は、当時大学紛争で戦っていた学生たちだったのである。彼ら

は、ジョーの成長に、自分たちの成長を重ねていた。ジョーが泪橋（なみだばし）を逆に渡り、「あしたのために」ボクシングを始め、プロテストに受かったとき、学生運動はピークを迎えている。東大安田講堂籠城はこの頃のことだ。

力石の告別式に寄せて、寺山修司は「力石は死んだのでなく、見失われたのだ」という名言を吐いたが、おそらくは当時の読者の誰もがそう感じていたのだ。「戦うべき敵」の不在。『あしたのジョー』の主人公・矢吹丈も、力石を見失った。その後のジョーのスランプ、自暴自棄の日々は「戦うべき敵」を失った学生たちの心情にぴったりマッチしていたのである。

実際に起こり得る力石の死因

力石の死因については、作品中ではっきりと触れられている。

「過酷な減量に加えて、第6ラウンドに矢吹が放ったテンプルへの一撃および、そのときダウンした際にロープで後頭部を強打したことによる脳内出血」

これが、コミッション・ドクターによる診断だった。

原作者の高森朝雄は、劇画原作者として一時代を築くまでは、スポーツを題材にした娯楽小

説を書いていた人物である。当然、スポーツには造詣が深く、この力石の一件も実際の事件に材をとって描かれている。

１９６３年、世界フェザー級チャンピオン、デビー・ムーアが、挑戦者シュガー・ラモスとの試合後、死に至った事件があった。これが、力石のケースとそっくりそのまま同じなのだ。ムーアもまた、ラモスのテンプルへの一撃と、そのときのダウンによるロープへの後頭部の強打によって死に至っている。

力石と異なる点があるとすれば、ムーアが亡くなったのが試合後数日経ってからだったのに対し、力石は試合終了後すぐに亡くなっていることだろう。力石の死は、直接にこの試合が元ネタになっている。

ただ、おそらくは死因が脳内出血、というのは、高森の誤認だったのではないかと推測される。少なくとも、ムーアはともかく、力石の死因が脳内出血とは考えがたい。一般に、脳内出血は外傷によっては引き起こされないものであり、この場合の力石の死に方には当てはまらない。

だとすれば、力石はなぜ死んだのか？

力石の脳内出血に疑いあり！

力石の死について検証を行なう前に、まずは脳というものが、どのようなかたちで頭蓋骨の中に収まっているのか見てみよう。

第1部128ページの図（脳断面図）を見ていただきたい。頭蓋骨の下には、3層の膜があって脳を保護している。最も外側にあるのが硬膜と呼ばれるもので、これはかなり硬い。その下にクモ膜という膜がある。これは半透明の薄い膜で、クモの巣のような構造になっているからこう呼ばれている。脳に直接触れているのは、軟膜と呼ばれる柔らかい膜だ。

クモ膜と軟膜の間には、クモ膜下腔と呼ばれるすきまがあり、ここは脳脊髄液と呼ばれる液体で満たされている。脳は、この脳脊髄液の中に浮かぶ「豆腐のようなもの」だと思えばわかりやすい。豆腐を壊さずにおくためには、水に浮かせておかなければならないが、ちょうど脳も、脳脊髄液の中にあることで、傷つかずにいられるのである。実際、脳というのは、豆腐のようにきわめてナイーブなもので、強く握ったり地面に叩きつけたりすれば、グチャグチャに壊れてしまう。

『あしたのジョー』のコミッション・ドクターによる診断「脳内出血」は、脳内部の毛細血管

が切れた場合を言う。これは文字通り脳の中の血管が切れることだが、一般に外傷によっては生じにくく、動脈硬化や動脈瘤（どうみゃくりゅう）など、身体の疾病によって引き起こされることが多い。出血といっても、ドバドバ出るわけではなく、指先を針で突ついたときのような、微少な出血がふつうであり、出血は豆腐のような脳をかきわけながら出血するので、短時間に多量の出血が起こるわけではない。出血する部位によって、ろれつがまわらなくなったり、身体の平衡感覚を失って歩けなくなったりすることもあるが、多くの場合は出血が起こったとたん、意識を保つことができずにその場に倒れてガアガアいびきをかいて眠り込んでしまう。

むろん、これは放っておけば大変なことになるけれども、力石のように短い時間で死に至る、ということはまずない。傷そのものが小さなものだからだ。仮に脳内出血した人を積極的に治療せずにおいたとしても、命を失うまでに3週間とか4週間とか長い時間がかかるだろう。

力石はロープで後頭部を強打した後、立ち上がってしばらくはジョーと死闘を演じている。「ふふふ」と不敵な笑いも浮かべている。クロス・カウンターをアッパーで決める、という試合のかけひきも考えている。意識は正常だったと考えていいし、亡くなったのは試合が終わってすぐのことである。これらの点から考えて、力石の死因は脳内出血とは考えがたい。

もし仮に、脳内出血であったとしたら、力石は一命をとりとめていたのではないか。なにし

ろ力石は、白木財閥の経営による最新鋭設備を持った白木ジム所属のファイターである。貧乏ジムの丹下拳闘クラブとは違って、専属のドクターだっているのである。脳内出血した選手を放っておくなんてことは、白木ジムにかぎってはまずない。もし、この試合で力石を襲った症状が脳内出血だったとしたら、力石はボクシングを続けることはできなかったかもしれないが、命だけはとりとめた可能性が高いのである。

力石が死んだ本当の理由

では、力石の死因は何だったのか。

ここで浮上してくるのが、脳硬膜外血腫（第1部P129参照）という症状である。力石は、脳「内」ではなく、脳「外」の出血で倒れたのではないか。これなら、出血が起こってしばらくは、まったくふつうに試合を続行することが可能だし、時間が経過すれば命を落とす可能性も濃厚になってくるからだ。

力石が後頭部をロープに打ちつけたとき、硬膜の血管が傷ついた。これは、打ちつけた後頭部に生じるが、そのとき頭蓋骨の中の脳は、脳脊髄液に浮かんでいるようなかたちなので、反

動で反対側に振られて、脳の前頭部は、自分の頭蓋骨に激突し脳震とうを起こす。そこに、脳挫傷、クモ膜下出血などを生じ急死することがある。つまり、打撃を受けた反対側に生じることもある。打撃の反作用で、脳が反対側に動き、頭蓋骨に激突して傷つくことがあるのだ。これを対側打撃という。つまり、後頭部の頭皮下の出血、硬膜下出血に加え、その反対側に出血するのである。

硬膜下出血の特徴は、外傷を負った後も意識状態は良好のまま、しばらくは活動できる点だ。脳自体に傷がついているわけではないから、正常に活動ができるのである。

ところが、時間が経つにつれ、硬膜と脳の間に血液がたまってくる。この血液が、50ccを超えると、脳が圧迫され始め、足もとがおぼつかなくなり、ちょうど酒に酔ったときのように千鳥足になる。時間にして、２、３時間ぐらいだろうか。さらに時間が経過し、血液が１５０ccを超えると、脳は圧迫の極限に達する。先に述べたように、脳は豆腐のような柔軟性のあるものであるから、圧迫されれば、死に至るのである。

力石を死に追いやったのは、この硬膜外出血だったのではないか。むろん、実際の硬膜外出血は、これほど早くは死に至らない。力石は死ぬのが早すぎる、という難点は残る。しかしこれに対側打撃が加わって、前頭部の脳挫傷や外傷性クモ膜下出血なども起こしていれば、急死

することがあっても不思議ではない。あるいは、これは力石の人間の限界を超えた減量苦がたたったという『あしたのジョー』の解説を生かすべきだろう。力石はウェルター級（約66kg）の体格を持ちながら、ジョーのいるバンタム級（約53kg）までも、体重を落としていたのだから。

脳が端から崩れるパンチドランク

まっすぐ歩いたつもりでも、フラフラと酩酊（めいてい）したように歩いている。ちょっとした物にけつまづいて転ぶ。車の運転がうまくできない。

これらの症状から、ジョーは重度のパンチドランカーである疑いを持たれた。白木葉子は世界的なスポーツ医学の権威、ドクター・キニスキーにジョーの試合のビデオ診断を依頼するが、ドクターは正常と判断した。ところが実際のところ、ジョーの症状はかなり重かったのだ。彼は、服のボタンさえ留めることができなかったのだから。

パンチドランカーは、他に言葉がうまく話せなかったり、集中力や記憶力が低下したりする症状がある。

これらの症状は、すべて脳機能の低下によって引き起こされるものだ。どうして、ボクサーだけが、このような症状にさいなまれるのだろうか？　ここでは、それを考えてみよう。

強い打撃を受ければ、脳も頭蓋骨の中で激しく揺れる。先に脳は豆腐だと言ったが、容器に打撃を加えていれば、豆腐も容器の中で激しく揺れるだろう。これが不断に繰り返された場合、どうなるか考えてみてほしい。豆腐は、容器にぶつかって、端のほうから崩れてはこないだろうか？

パンチドランカーの症状は、脳表面が頭蓋骨に不断に当たったために、擦り減ってくることで起こる。脳表面の細胞・組織がいかれてしまうのだ。とくに「頭蓋底」と呼ばれる頭蓋骨の底の部分は、他の部分とは違い、凸凹が激しく摩耗しやすいのである。

ジョーのモデルになったと伝えられるボクサーのひとりに、たこ八郎がいる。相手に打たせるだけ打たせて相手が疲れてきた頃にぶちのめす彼のファイト・スタイルは、肉を切らせて骨を断つジョーの戦い方に、大きな影響を与えたと言われている。彼が重度のパンチドランカーであり、言語の正確さがかなり失われていたことをご記憶の方も多いことだろう。

たこ八郎の脳も、ジョーの脳も、頭蓋底に接触する部分が激しく擦り減っていた。たこ八郎は日常生活が営めなくなる前にボクサーを引退したが、ジョーはそれを知りつつ、カーロス・

リベラを一撃にして廃人に追い込んだ男、世界チャンピオンのホセ・メンドーサに立ち向かっていく。真っ白な灰になるために。この頃からジョーのドラマは、終局に向かって走り始める。

「一夜にして真っ白」のウソ

倒されても倒されても立ち上がるジョーに対して、ホセはすさまじい恐怖に襲われ、試合が終わる頃にはすっかり髪が白くなってしまっていた。

髪の毛が恐怖で白くなる、ということは、『あしたのジョー』にかぎらず、夏期恒例の怪談話などでもよく耳にする。極度の恐怖に接した人が、一瞬にして白髪になってしまうという表現は、おそらく物語構成上の小道具としては、かなり一般的なものだろう。

ところが、髪の毛の生えるメカニズムを知るならば、そんなことは絶対にあり得ないということがわかるのである。

われわれの毛髪は、皮膚の外に出ている毛幹と、皮膚内に埋まっている毛根とで構成される。髪の毛が伸びるのは、毛根の根本にある毛乳頭という部分で、細胞がさかんに分裂し、成長しているためだ。

白髪になるのは、毛根の部分から空気が混入した場合と、毛髪内部にあるメラニンと呼ばれる色素が、失われた場合に起こる。メラニンとは、頭髪の色を決定する色素である。茶色っぽい髪の人は、真っ黒な髪の人に比べ、毛髪内部のメラニンの量が少ないから茶色い。白髪となれば、メラニンはほとんどないと言えるだろう。

毛根から空気が混入する場合、それは毛乳頭から入る。色素の量もまた、毛乳頭で作られる細胞の生育過程で決定される。

したがって、人の髪が白いか黒いか茶色いかは、皮膚の外に出ている毛幹ではなく、皮膚の中の毛根で決定されているのだ。だから、どんなにその人が髪が逆立つほどの恐怖を経験したからといって、一気に白髪になるわけがない。試合を終えた3カ月後のホセ・メンドーサに、矢吹戦のタイトル防衛について取材を申し込み、会ってみたら白髪になっていた、というならわかるが、一瞬にして毛髪に空気が混入したり、色素が失われるなど、とうていあり得ない話である。

あえて推測するならば、ホセ・メンドーサはもともと若白髪で、髪は真っ白だった。若くして白髪はカッコ悪いから染めていたのだが、それがジョーとの戦いでとれちゃったということになるんだろうか。いずれにせよ、「一瞬にして白髪」は無理があると言わねばならない。

ジョーが生きているその根拠

『あしたのジョー』は、ホセとの戦いで真っ白に燃え尽きた矢吹丈が、コーナーの椅子に座り、柔和な笑顔を浮かべるシーンで終わる。死に場所を求めて生き急いでいたジョーは、確かにホセとの戦いの中で真っ白に燃え尽きたのだ。

この印象的なラストシーンにおいて、ジョーは死んだのか。それとも、生きているのか。答えは描かれていない。死んだとも、生きたとも言わず、『あしたのジョー』は、真っ白に燃え尽きた男の柔和な笑顔で終わっている。

このことは当時、ちょっとした波紋を呼び、「少年マガジン」編集部には「ジョーは死んだのか」という問い合わせ電話が相次いだという。編集者はたいがい「ご想像におまかせします」と答えていたらしいが、確かに気になるところではある。

いまここで、本書はその疑問に答えようとしている。長年のファンのみなさん、これは重大発表ですぞ。高森朝雄もちばてつやも「少年マガジン」の編集部も答えなかった問いに、連載終了後四半世紀以上を経たいま、本書は答えるというのだから！

結論から言おう。ジョーは、生きている。

早く治療しないとアブないジョーの状態

いかにも、ジョーは生きている。しかしここでは、この衝撃的な事実に触れる前に、ジョーの現在の状態というものについて考えてみたい。

ジョー対ホセの試合は、途中ホセの反則・減点を含みながらも、ホセの勝利に終わっている。それだけ、ホセのパンチがジョーにヒットしていたということで、ジョーのそのときの状態は、いずれにせよかなり危険なもの、と言わねばならない。

頭部に強い打撃を受けた場合、人は脳震とうを起こす。これは、経験したことのある方も多いことだろう。一時的にめまい・耳鳴り・頭痛などに襲われるが、たいていは短時間で回復する。

脳震とうは、頭蓋内で脳が強く震動するために起こるものだが、これが繰り返された場合、ことは脳震とう程度で済まなくなってくる。たび重なる震動で激しく揺すぶられ、頭蓋内であっちにぶつかり、こっちにぶつかりした脳は、次第に腫れ上がって、容積が増え始めるのだ。

これを脳腫張と言うが、脳は、ある一定以上の容積に膨れ上がると、頭蓋内に収まってはいられない。するとどうなるか。もちろん、脳は豆腐みたいなものだから、頭蓋を割って出てく

るというようなことはない。水が低きに流れるように腫れて肥大した脳は、自分が膨らむことのできる方向に向かって膨らみ始めることになる。

脳にとって、自分の肥大を許してくれる場所は1カ所しかない。それはどこかというと、脊椎（せきつい）――背骨の中央に開いた穴なのである。頭蓋骨と背骨はつながっているから、背骨の中に肥大した脳が押し込められる。したがって、膨れ上がった脳は背骨の中央に開いた穴の中にニュルニュル入り込んでくることになる。これを脳ヘルニアと呼ぶ。

脳ヘルニアになった場合、背骨の中に入り込んだ脳は、背骨の中に圧迫屈曲して血液の流れが悪くなる。したがって、酸素や栄養の供給が受けられなくなり、細胞が死に、腐り始める。

ジョーの現在の状態が危ういとするならば、おそらくは脳震とう・脳腫張・脳ヘルニアのいずれかの状態にあると見ていいだろう。脳震とうぐらいならすぐ回復するが、脳腫張になってしまうと、かなり危険だと見ていい。脳ヘルニアを発症するのは、時間の問題だからだ。

ジョーを待つバラ色の未来

しかし、大丈夫なのである。ジョーは脳腫張にはなっていないし、おそらくは脳震とうも起

こしてはいない。ジョーは生きているばかりでなく、意識もしっかりしている。

この衝撃の事実を明かすのは、他でもない『あしたのジョー』の有名なラスト、真っ白に燃え尽きてコーナーの椅子に座ったジョーの姿からである。

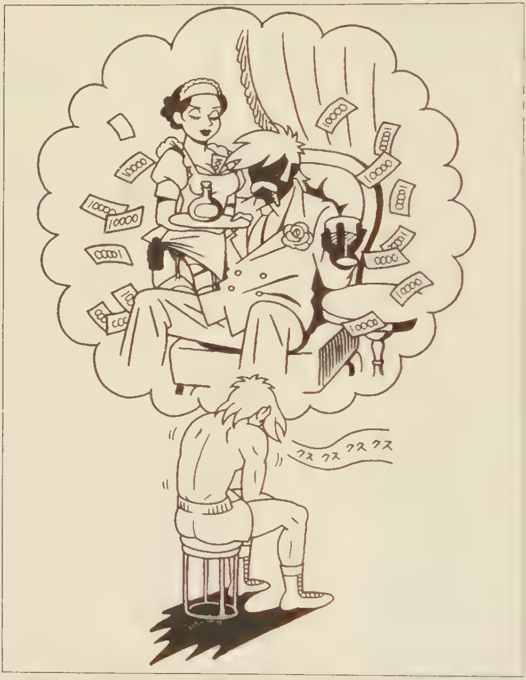
人が意識を失った場合、身体のあらゆる筋肉が弛緩する。したがって、ジョーが死んでいるとするならば、この状態で椅子に座っていることができるはずはないのだ。腰は椅子からずり落ち、腕などをロープに引っかけてでもおかないかぎり、リングに倒れ伏してしまうだろう。同じように、顔面の筋肉もゆるむので、このように柔和な笑顔を浮かべていることも不可能だ。ジョーは生きて、しかも意識を正常に保っているからこそ、椅子に座り、笑顔を浮かべていることができるのである。そう、ジョーは確かに生きていて、意識を正常に保っている。

ジョーは生きている――この事実は、自然に、「その後」を考えさせる。ジョーは、この試合が終わったら、さすがにもうボクサーとしてはやっていけないだろう。引退するに違いない。引退した彼には、どんな生活が待っているのか。ときおりしも、白木葉子から愛の告白を受けたばかりである。結婚するのか？　葉子と？

するとジョーは、白木財閥の入り婿である。逆玉だ。ドヤ街の不良少年が、一気に大財閥の姻戚である。しかも、ジョーはすでに、世界チャンピオンと戦った名誉あるボクサーでもある。

その知名度と端正なルックスは、タレントにも向いているだろう。あの野生児ジョーが、カネと名誉を持ち、美人の奥さんをもらう――そんなにぬるい暮らしをしてもいいもんなんだろうか？

個人的には、「それもいいんだよ」と認めてあげたい。だが「そんなもん許せるか」という人も、やっぱりいるだろう。



▲夢見ていたのは試合後の大金持ちとなった生活であった!?

生き残ったジョーに、世間並の幸福を与えることを、許さなかった人がいる。他でもない原作者・高森朝雄その人だ。

高森の実弟・真樹比佐夫氏によれば、『あしたのジョー』の原作には続きがあって、ジョーは死なず、パンチドランカーになって公園でカーロス・リベラと遊んでいるという陰惨なラストが用意されてい

たという。ジョーは「俺は試合には負けたがケンカには勝った」とカーロスに伝えるが、カーロスはそれを理解しない。ふたりの廃人を陰から見守る白木葉子。結末はそうなっていたというのだ。

力石のぶんまで、ジョーは生き続ける——高森はそう考えていたらしい。

ただし、高森は、断じてこの陰惨な結末を発表しようとはしなかった。『巨人の星』の原作小説が出版されているのに対し、『あしたのジョー』が出版されていないことを見ても、高森にこれを発表する意志はまったくなかったと見ていいだろう。

上野メモ

脳内出血は主に病気として起こりますから、このようにボクシングによるダメージで起こりません。それに、脳内出血は、長い時間をかけて出血しますから急死しないんですよ。ですから、外傷性脳挫傷でしょうね。それに加えて、脳の表面の血管も破裂して外傷性のクモ膜下出血を伴っていれば、急死ということもあり得ます。

名作「死体」の検証学
▼
腐敗

〈第2章〉

羊たちの沈黙

若い女性だけが狙われた猟奇事件。死体は皮を剥がれ、腐っていた。しかし犯人が皮を剥いだ後に見えた肉は、あまりにもきれいすぎる。あの女の死体は本当に腐っているのか？

▼

若い女性を殺し、その皮を剥ぐという猟奇連続殺人事件が発生する。犯人像を割り出すため、FBI訓練生のクラリスは、監禁されている天才精神科医にして殺人鬼のレクター博士と面会する。彼に犯人像のヒントを聞き出そうというのだ。レクター博士は、クラリスが自分の過去を話す、という条件で協力する。トマス・ハリスのベストセラー小説を映画化。アンソニー・ホプキンスの巧みな演技がストーリーに緊迫感を与えている。続編の「ハンニバル」も映画化され大ヒットを記録した。

監督●ジョナサン・デミ　出演●ジョディ・フォスター　アンソニー・ホプキンス／スコット・グレン　テッド・レビン　アンソニー・ヒールド

いつか役に立つ監察医の見分け方

若くて大柄な女性ばかりを誘拐し、殺害後に生皮を剝ぐという連続殺人鬼、バッファロー・ビル。ここではまず、この猟奇殺人者によって殺された、あわれな女性の死体について検分してみたい。

新しい被害者の遺体が、川から上げられた。ＦＢＩの上官とともに、主人公クラリス（ジョディ・フォスター）は、現場に急行する。やがて、死体のフードが取り除かれ、死体が明らかになるが、その前にクラリスも上官も、鼻の下に薬品を塗っていることに気づかれた方も多いことだろう。これはおそらく、メンソレータムのような軟膏（なんこう）のたぐいだろう。腐乱した死体の臭いをごまかすためだ。

腐乱した人間の肉体は、真夏に大量の生ゴミが腐って放置されたときのような、強烈な臭いを発する。マスクをしたぐらいではとうていごまかせない、常人には苦しい臭いである。これに耐えるべく、鼻の下に薬品を塗るというのは確かに理屈に合っている。

しかし、このシーンに、鼻の下に薬を塗っていない人物、メガネをかけたハゲ頭のスーツ姿の男がいたのを記憶しているだろうか？

彼が監察医だということが、この事実からわかるのである。検死をする監察医は、臭いをごまかしてはならないのだ。

たとえば、青酸カリの臭いがするかもしれない。口に近づいて、アルコールの臭いがすれば、死ぬ前に酒を飲んでいたことがわかる。ホルマリンの臭いがすれば、一時的に保存されてから、川に遺棄されたということになる。

死体と対話するのが職業の監察医が、死体が臭いで訴える何かを、ごまかしてはならないのである。

この場で鼻に軟膏を塗ってもいいのは、ＦＢＩの捜査員だけなのだ。

レクターの執刀技術を疑う

特別収容所を出て州立の裁判所に一時収容されたレクターは、守衛ふたりを殺害した後、あろうことか守衛の顔面の皮膚を切り取ってマスクとし、瀕死の守衛のふりをして救急車で運ばれ、見事脱走に成功する。

まさに残虐をいとわぬ狂気の天才だけがなすことのできる所業であり、その意外な脱走術に

は、誰もが舌を巻いたことであろう。

さて、この人面マスクであるが、誰にでも簡単に作れるようなシロモノではない。なぜなら、顔というのは、人間の肉体の中でも、目・鼻・口・耳と、非常に起伏に富んだ部位だからだ。よほど腕利きの外科医か、料理人でもなければ、きれいに切り離すことは不可能である。大手術になるから時間も相当に要するだろうし、果たしてレクターが持っていた食事用のナイフ程度で、この大手術が敢行できるものなのかどうか、非常に疑問である。それに、レクターは医者は医者でも、けっしてメスを持つことのない精神科医なのである。猟奇殺人鬼ではあったけれども、それは人を切り刻むのではなくて、かじりつくものだったから、それほどに執刀技術が発達するとは、どうも考えがたい。

レクターのマスクはゴムつきだ！

百歩ゆずって、レクターはブラックジャックなみの執刀技術を持っていた、としよう。食事用のナイフで瞬時に人の顔を切り出し、マスクを作り上げる大手術をやってのける腕前を持っていたとしよう。

▲夏祭りには欠かせない、リアルさが売りのレクター博士のお面屋!?

だが、ここでクールな完全無欠の殺人鬼レクターの、意外なマヌケさが、明らかになるのである。

人間の皮膚は、あらかじめ引っ張られた状態で、肉体をとりまいている。当然、これを切り出してしまえば、引っ張っていたゴムから手を離したときのように、縮んでしまい、くるくると丸まってしまう。

仮に、われわれの手の皮を、きれいに切り出したと想定しよう。その状態で、もう一度その手に、切り出した皮膚が手袋のようにつけられるか、といったら答えは否である。皮はくるくると丸まって、手にはまってはくれないはずだ。しっかりと縫合するか、手首にカギ状の器具をつけ、

ヒモでゆわえるとかしなければ、手の皮は元の形に収まってくれない。

したがって、レクターが守衛の顔の皮をかぶるためには、あのお祭りで売っているお面のように、自分の頭からずり落ちないような工作をしなければならないはずだ。最低でも皮の上下左右を、ゴムで引っ張って固定するとかしなければならないのである。

そう、レクターは、脱走のために、いそいそとゴムつきのお面を作っていたのだ！

節分の鬼かお祭りのお面か、クールな殺人鬼が、意外にマヌケなことを、マメにやっていたことになる。

縫い合わせられる皮膚を作る苦労

バッファロー・ビルは、女の皮膚を縫い合わせ、それを着たい、という願望を持つ殺人鬼である。女を屋敷の中にある井戸に閉じ込めて苦しむさまを眺めながら、自らはミシンを使って皮膚を縫い合わせている。このまま逮捕されずにいたならば、彼はきっと念願の女の皮膚で作った服を着て、鏡の前でダンスを踊ることができただろう。

だが——それを実際にやろうとしたら、とんでもない根気なのだ。

まず、人間の皮を剝いだからといって、それをそのまま着られるわけではないのはおわかりだろう。人間の皮膚だってナマモノである。放っておけば腐ってしまうのだ。

　したがって、腐敗を防ぐために、防腐加工をしなければならない。いちばん適当なのは、ホルマリンに一度漬けて、皮膚から酸素を奪ってしまうことだろう。酸素を奪うことにより、細菌やカビなどが繁殖できない状態を作り出すわけだ。

　だが、すでに述べたように、切り出した人間の皮膚は、そのままではくるくると丸まってしまうものであるから、無造作にホルマリンに漬けてもダメだ。ちゃんと引っ張って固定して、すっかり伸びた状態にしてから、行なわねばならない。いずれにせよ、なかなか手間のかかる作業である。

　引っ張った皮膚をそのまま収納できる大きさの、桶のようなものも必要だ。一般の家庭ならバスタブが適当だろうが、バッファロー・ビルの家のバスタブには、腐乱死体が入っていた。すると、バスタブ以外の桶、ということになる。まあ、家の中に井戸があるぐらいだから、そのぐらいの桶があってもおかしくはない。

　しかし、そこからの作業もまた、山あり谷ありで大変である。ホルマリンをじゅうぶんに浸透させるため、根気よく待った後、今度はそれを取り出して乾かし、ホルマリンを完全に抜か

なければならない。

本郷の東大医学部標本室には、見事なイレズミの入った人間の背中の皮膚標本が残されているが、あのレベルまでもっていくとしたなら、最低でも1カ月はかかるだろう。

当然、皮膚は縮むから、縫い合わせて成人男性のバッファロー・ビルが着られるレベルまでもっていくためには、いったい何人の犠牲者が必要だったのか、気が遠くなる。背中の皮だけ、なんて選り好みをしている場合ではない。

ある仕事に着手して、作業を始めてから、その意外な困難に気づき、茫然とした経験はないだろうか。始めてしまったからやめるにやめられないし、しかしゴールまでの道のりは遠く、いつまでたっても終わりが見えない、というような。その徒労感たるや、相当のものがある。

バッファロー・ビルも、その作業の困難を始めてから気づいたかもしれない。まあ、制作途中に踊ったり楽しんでいるようだから、気長にやっていくつもりだったのかもしれないが。

日焼けでむける「表皮」

さて、問題はこの死体である。バッファロー・ビルは若い大柄な女を襲い、その死体の皮を

剝ぐ異常殺人者だ。だから、川から上げられたこの死体にも、背中に皮を剝いだとおぼしき痕（あと）が残っている。

だが、妙なのである。

赤い皮を剝いだなら、赤い筋肉が露出しなければならないが、この死体、筋肉は見えていないのだ。白くただれたようになっている問題の箇所は、どう見ても筋肉ではない。これ、皮下脂肪なのではないかという気がする。皮下脂肪は腐ると白っぽく変色するのでじゅうぶんその可能性はあり得る。

しかし、それにしては皮膚が生前と変わらない気がする。これは表皮が剝がれているだけなのではないか、と思えるほどだ。

表皮とは、夏、日焼けしたときなどに、ペロペロとむけるあの皮のことだ。それがきわめて薄い皮であることは、読者の方々もご存じであろう。

さすがの猟奇殺人鬼バッファロー・ビルといえども、これを縫い合わせて着る、なんてことは不可能だ。

いや、しかし、この死体は腐敗しているんだから、傷跡の状態が変わることは確かにあり得る。表皮を剝いだだけ、と判断するのは早計だ。もっと、死体をよく見てみなければならない

であろう。

あまり腐っていない死体は臭くない

ところが、見れば見るほどこの死体、おかしいのである。

鼻に軟膏を塗るほどに、臭いを発していたとはどうしても思えない。もし、がまんならない臭いを発するほどに腐敗が進行しているならば、体内にたまった腐敗ガスでもっともっとブクブクに膨れ、「赤鬼」状態（第1部P53参照）になっていなければおかしい。ところが、この死体はそうはなっていない。

腐敗の進行は、空気中より水中のほうが2倍ほど遅いはずだから、そんなに腐っていないのはうなずけるし、皮膚を切っているから腐敗ガスが抜けてしまう、ということも考えられなくはない。

だが、どうしてくれるこの肌の色。この死体の肌の色は、まだ生前の面影をありありと残しているではないか。腐敗した死体とは、こんな色ではあり得ない。なにしろ、「青鬼→赤鬼→黒鬼」で白骨化していくわけであるから、腐敗の過程にあるならば、いずれかの状態でなくては

おかしいのである。

これって、死体の腐敗臭が臭いんじゃなくて、川の水が臭いんじゃないのか。

水中の死体にはいろんなおみやげが

被害者の遺体を調べるうち、クラリスは口の中から、蛾（が）のサナギを発見する。これがアメリカには生息しない、特殊な蛾であることから、犯人像は絞られ、捜査は大きく進展することになる。

このとき、検死に立ち会った監察医は、それが虫のサナギであることを示唆した後、不思議そうに「水の力でノドに詰まるかな」と言っている。これはほんとにその通りで、木の葉程度ならともかく、水の力で生物がノドに詰まるというのはきわめて稀なことだ。誰かに詰め込まれでもしなければ、あり得ない話なのである。

ただし、水中の死体が、生物の侵略からまったく切り離されて存在できるかといえば、むろんそうではない。むしろ、ふつうの魚より大きな人間の身体が、生物に見つからずに存在できるほうがおかしい。

だから、川から上げられた死体には、たいがいザリガニなんかが大量にくっついてくるものだ。東京湾あたりなら、ダボハゼが衣服の間に入って、ぴちぴち跳ねている。

自然は、人間だからといって特別に扱ったりしてくれないのである。これから入水自殺される方は、そのあたりを考えてから行動に移したほうがいいだろう。

上野メモ

表層の筋肉は赤色をしていますから、皮膚を剥がされたこの死体の表面に見えているのは、筋肉ではなく、皮下脂肪ではないでしょうか。本来、皮下脂肪は黄色いものなのですが、腐敗することによって白っぽい色になります。太った女性だと皮下脂肪がたくさんありますし、つまり、ちゃんと皮も剥がされているし、腐敗もしているのだと思います。

名作「死体」の
検証学
▼
腐敗

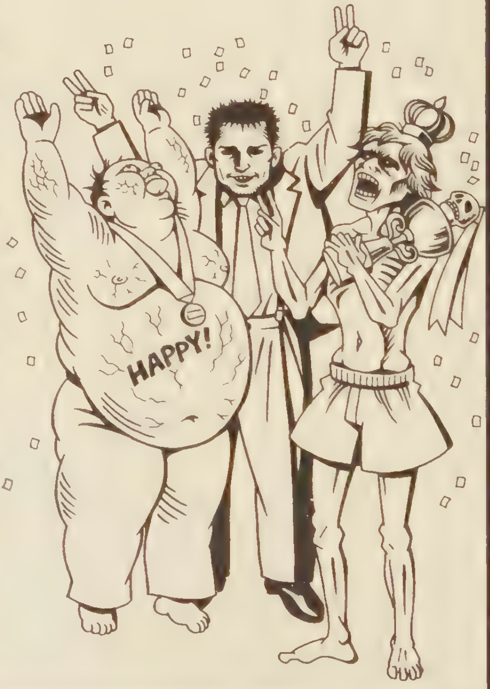
〈第3章〉

セブン

誰もが納得する見事なデブ男の死体造型は、さすが名監督。ところが、衰弱したミイラ男にアヤしいところ発見！　ミイラのくせに、どうしてそんなに元気だったのか!?

退職間近の刑事サマセットと新人刑事ミルズは、異様な連続殺人事件の捜査にあたる。死ぬまで食事を強要された肥満の男、血まみれで殺された敏腕弁護士……。それぞれの現場には「大食」「強欲」の文字が記されていた。この事件は、キリスト教における7つの大罪に基づいて行なわれていたのだ。残る5つの殺人事件を阻止するため捜査を続けるサマセットとミルズをあざ笑うように、犯人の魔の手が迫る。世界中で絶賛された、秀逸のホラーサスペンス。

監督●デヴィッド・フィンチャー　出演●ブラッド・ピット／モーガン・フリーマン　グウィネス・パルトロウ　ジョン・C・マッキンリー



増え続けるニセ死体、ホンモノ死体

死んだ人間の肉体は、ナマモノである。だから当然、放っておけば腐る。

しかし、われわれは通常、腐っていく死体をダイレクトに見ることはない。少なくとも日本ではそうだ。死んで生命活動のない有機物のカタマリとなったわれわれの肉体は、入棺され荼毘に付され、埋葬される。

だから、われわれは腐った死体がわからない。それがどんな色をしていて、どんな臭いを発していて、どんな姿をしているのか。まったく知らない。

かくして、フィクションの世界には、じつにイイカゲンな死体が頻出することになる。見る側もわかっていないし、作る側も知らない。わからないこと、知らないことをさもありそうなふうに描こうとするから、無理が生じてくるわけである。先に取り上げた『羊たちの沈黙』の腐乱死体が、まさにそうであった。

しかし――新進気鋭の映画監督、デビッド・フィンチャーは、スクリーン上で、目を見張るほどに精巧な死体を演出してみせた。アカデミー賞に腐乱死体造形賞なんてものがあれば、まっ先に特賞を与えたくなる作品――それが『セブン』である。

ほとんどホンモノの「肥満男の死体」

月曜。新任のミルズ刑事と、ベテランのサマセット刑事は殺人事件の現場に急行する。現場には、これ以上ないほどブクブクに太った肥満体の醜悪な男が両手足を縛られ、スパゲッティの皿に顔を突っ伏して息絶えていた。「大食」の名で殺されたこの男は、後に解剖され、死因は腹を蹴られたことによる内臓破裂と診断される。食べ過ぎで死ぬというのは、何度も嘔吐（おうと）することで胃が切れ、あるいは別の原因で嘔吐を繰り返し出血する**マロリーワイス症候群**の可能性もあるが、ここではおいておこう。

マロリーワイス症候群
たび重なる嘔吐や、ひどい吐き気などによって引き起こされる症状。食道と胃を結ぶ部分の粘膜が切れて、そこから大出血を起こすことがある。

さて、ここで話題にしたいのは、この肥満男の死体である。スパゲッティに顔を突っ込んでいるシーンや、「4人がかりで乗せた」という解剖台の上の死体など、ホンモノを使っているのではないかというほどによくできている。

何度もたとえにあげて申し訳ないが、『羊たちの沈黙』の死体が着ぐるみのライオンだとするなら、『セブン』のそれは、本物の獅子だ。画面に映し出されたときのリアリティが、全然違っているのである。とにかく、死体の造形に関しては『セブン』は群を抜いている。

ここまで持ち上げたからには、なぜ優れているのか解説しなければならないだろう。解剖台

の上のデブの死体は、次の2点において、本物と変わらぬリアルさを保っているのだ。

決め手は死斑と樹枝状血管網

解剖台の上のデブ死体のリアルさを支えているもの——その第1は、死斑（第1部P40参照）である。これがどういったものであるかは、上野氏が酒鬼薔薇事件の項でも触れた。『セブン』のデブ死体は、この死斑が非常にリアルに造形されていて、まさに真に迫っている。

第2は、**樹枝状血管網**と呼ばれる、死後時間が経った死体に独特の相が、体表に表われている点だろう。

人間の血液が赤いのは、血液内の赤血球中に含まれるヘモグロビンが、酸素と結びついて赤くなるためだ。しかし、人間が死んでしばらく時間が経つと、これが硫化水素と結びつき、硫化ヘモグロビンと呼ばれる物質に変わる。硫化ヘモグロビンは、青い色をしている。

樹枝状血管網
死体の表面に表れる樹枝状の模様。血液中に含まれるヘモグロビン（赤色をしている）と呼ばれる物質が、死後血管の外に染み出て、硫化ヘモグロビン（青色をしている）に変化することで、形成される。主に、上胸部、下腹部、大腿部などに顕著に表われる。

一般に、死んだ人の身体が全体に青味を帯びるのはそのためだ。死んで時間が経っていない状態なら、肌が血色を失い、青白くなる。われわれがふつう、お通夜のときなどに見る亡くな

った人の遺体は、この状態になっている。

ところが、ある程度の時間が経つと、死体は腐り始める。

腐敗が進行していけば当然、血管も腐る。腐った血管に血液がにじみ出るので、皮下の血管が赤褐色にあるいは青藍色に変色して、体表に見えてくるのが樹枝状血管網である。文字通り木の枝のように、赤い、あるいは青い血管が体表に広がるわけである。

▲アカデミー賞特別部門「腐乱死体造形賞」（？）はセブンでキマリ!?

『セブン』のデブ死体は、このあたりもリアルに再現しているのだ。上野氏にこの作品のビデオを観てもらったときに「これホンモノじゃないの？」と言っていたくらいだ。おそ

らく、じゅうぶんな技術監修を受けたうえで、撮影を行なったということなのだろう。

血色のいいミイラ人間

以上に述べたように、死体造形において他を大きく圧倒する『セブン』であるが、残念ながら手放しに認めることができない箇所も存在する。ああ、そんなはずはないだろう、というところは、やっぱりあるのだ。

問題となるのは、「貪欲」の弁護士に続き、発見された「怠惰」の男である。

「怠惰」男の状態を一言で形容するならば、蒼白なミイラとでも言うべきであろう。

ミイラとは、人間の干物であるから、肌の色はこの男のように白くはならず、水分を失い、黒っぽくなる。だが、ガリガリに痩せさらばえて骨と皮だけになった男の顔は、ミイラ、としか表現のできない凄惨さを持っている。

およそ生きているとは思えない彼だったが、ギリギリのところで命脈を保っていた。医者の診断によれば、およそ1年間ベッドに縛りつけられ、身動きのできない状態にされていたらしい。むろん、食事（あるいは栄養剤か?）は与えられていたのだろうが、これだけ痩せてしま

ったのは極度の栄養失調によるものだろう。

死体の造形の点では最高得点の『セブン』の弱点は、じつはここにある。栄養失調で衰弱しきっているにしては、この男、あまりにも身体が健康なのだ。足など明らかに健常者のもので、歩行可能なのはもちろん、走ることだってできるだろう。アバラは浮き出ているものの、腹は健康そうに膨らんでいるし、とても栄養失調の腹じゃない。この顔でそこらへんを走りまわれるとしたら、かなりキモチ悪いぞ！

アーティスト、フィンチャーのジレンマ

思うに、フィンチャー監督もこのシーンには相当、ジレンマがあったのではないだろうか。デブ死体のリアルさに比して、このミイラ人間の造形はあまりにもお粗末だからである。

おそらく、『セブン』のスタッフの中には、医学知識を持った考証係がいたはずである。そうでなければ、あれだけリアルなデブ死体は作れないだろう。目を皿のようにしてエンドロールを眺めれば、あるいはそのクレジットも見つかるかもしれない。

その考証係は、まちがいなく言ったはずなのだ。

「カントク、まずいです。この男、栄養失調にしては、身体が健康過ぎます」

ここでフィンチャーはじっと考えた……かどうかはわからないが、おそらくは一瞬、リアリズムとフィクションのダイナミズムを秤にかけたに違いない。

「このミイラ人間が死んでいることにしてしまえば、確かにリアルな造形ができる。作ればいいんだからな。しかし……それはできん、できんぞ！　ここでこいつが1年もこの状態でいるからこそ、犯人の異様な計画性がわかって、視聴者は戦慄するはずなのだ。なにしろ、ミイラが突然起き上がって『ウォーッ』と叫ぶんだぞ。こんないいシーンを、くそリアリズムのために、台無しにしてたまるもんか！　『ウォーッ』だっ！　断固として『ウォーッ』でいくぞ！」

かくして、健康な役者の顔に栄養失調のメイクを施し、ミイラ人間の「ウォーッ」という咆哮は撮影、となったというわけだ。むろん、実際にこういう会話が闘わされてはいないにせよ、まちがいなくフィンチャー監督の脳裏には、こうした葛藤がよぎったはずである。

上野メモ

ミイラというのは黒くて乾燥しているものです。この映画に出てくるミイラ男が黒くなっていない、ということは、そもそもミイラ化していないんでしょう。身体が白くてきれい過ぎます。太った死体のほうは、死斑がとてもリアルでよくできていますね。樹枝状血管網もちゃんと身体の表面に表われています。

名作「死体」の
検証学
▼
毒殺

〈第４章〉

失楽園

哀しくも美しい、愛するふたりにふさわしいエンディング。あのふたりの死体検案調書は、上野正彦氏が書いていた!!　だけど、本当にあんな都合のいい死に方が出来るのか？

▼

出版社に勤務する久木（くき）は、ある日閑職にまわされてしまう。虚無感にさいなまれる久木の前に、美しい人妻、凜子（りんこ）が現われる。やがてふたりは、激しく愛し合うようになる。しかし、すぐに互いの妻や夫の知るところとなってしまい、不倫を理由に久木は会社を解雇されてしまう。世間に居場所を失い、孤立を深めていくふたりは、それゆえに愛を深めていく。そして、ふたりは最後の手段を選ぶ。それは、毒を飲んで、ふたり一緒のままに死ぬというものだった。「日経新聞」で連載され、社会現象にまでなったベストセラー小説を映画化。

監督●森田芳光　出演●役所広司　黒木瞳　寺尾聰　柴俊夫　平泉成　木村佳乃　小坂一也／あがた森魚

監察医の書く「死体検案調書」

『失楽園』は、互いに家庭を持った男女がめぐり合い、愛し合い、最後に心中するまでを描いた物語である。愛し合いながらともに生きるのではなく、愛しているからこそ、その愛を永久不変の中に閉じ込めるために死を選ぶ。ここで描かれた狂おしい不倫愛は、主演の役所広司と黒木瞳の魅力も手伝って、「失楽園症候群」なる流行語を生み出し、世の善男善女を「許されぬ恋」へと駆り立てずにおかなかった。

『失楽園』は、主人公である編集者・久木とカルチャースクールで書道の先生をする凛子が、旅先で服毒自殺をするところで終わる。ふたりは、性行為の途中で結ばれたまま、毒物をあおり、死んでいく。

映画の終幕には、次のようなテロップが流れた。

死体検案調書

久木祥一郎（50歳）、松原凛子（38歳）両人に対する死亡状況、および検案所見に関する

考察。

発見時、両者は全裸のまま、ともに強く抱擁し、局所まで結合したまま、死後硬直のもっとも強い時間帯であるため容易に離し得ずかかる状態はきわめて稀である。

死亡原因、赤ワインに混入された毒物による急性呼吸停止。

この「死体検案調書」と呼ばれるものは、臨床医が書くカルテと同じようなもので、監察医が検死を終えた後に書く公文書である。死体所見、死因、死亡時間などを記録し、なぜ死に至ったのか死亡前後の状況など警察官の捜査によってわかった事実も簡略に記載する。できた調書は、立会官に2部が手渡され、監察医務院に保存されるという。

究極の愛のかたち「結合死」

じつは、この『失楽園』における死体検案調書を書いたのは、上野正彦氏なのである。上野

氏はこう語ってくれた。

「編集者がね、渡辺淳一さんが私に会いたがってるから『ぜひ食事でも』と言うんですよ。で、行ってみたら、この『失楽園』のラストの件だったんです」

当時、『失楽園』はまだ新聞紙上に連載中で、渡辺氏の頭にはこの最終回のことがあったのだという。つまり、性行為をしている途中で、ふたりが結び合ったまま死ぬなどということが可能なのかどうか。それを知るために、上野氏と会食の場を設けたということらしい。

「それで、小説のストーリーに合わせて死体検案調書を書いてあげたんですよ。それがそのまま、小説に使われたというわけです」

上野氏は笑いながら、さらにこう続けた。

「そのときすでに『失楽園』って人気小説だったし、話題になっていたから知っていたんだけど、読んだことはなかった。後で本が出たときに、渡辺さんが送ってくれたので読んだんですよ。そしたら驚いた。やっぱり作家ってのはすごいもんだなあ、って思ったよ。私だったら、セックスシーンを書けって言われれば『あー気持ちよかった』で終わりだけど、作家はセックスだけで2冊も（『失楽園』は上下2巻）本を書けちゃうんだからねえ。ほんとにすごいよねえ。はははは」

▲結合したまま死ぬのは難しいため、久木はあの世できっと凛子になじられていることだろう

上野氏は屈託なく笑うのである。だが、肝腎なことを聞くのを忘れなかった。

「先生、ところで」

「うん？」

「あの死に方って、ほんとにあるんですか」

「あの死に方？」

「男女の局部が結合したまま、死ぬなんてことがほんとに可能なんですか」

『失楽園』を見たときから、気になっていたのである。どうも、これは難しいのではないか。かなり苦しいのではないかという気がしてならなかったのである。

「ああ、そりゃムリだよ。はははは」

上野氏はまたも屈託なく笑い、さらにこう続けた。

「死ぬと、神経も麻痺するし、血流も止まるよね。当然、あそこだって硬いままじゃいられない。しなびちゃうよね。そしたらまあ、くっついたままじゃあいられない。そりゃムリですよ。……だからね、私だってちゃんと、『こういうことは稀である』って書いているでしょう。まあ、フィクションの世界だからね、いいと思うんだけどね、私は」

上野メモ

これは許される嘘だと思います。文学的に読者に作品のテーマをアピールするために、情緒、余韻としてこういうテクニックは使われても問題ありません。この作品には私もかかわってますしね(笑)。厳密さが要求される科学の世界では許されませんが、文学の世界では許されていいと私は思います。

名作「死体」の
検証学
▼
凍死

〈第５章〉

タイタニック

極寒の海に投げ出されてしまったジャックとローズ。しかし、どうしてローズだけが助かったのか。いや、そもそもジャックは、死んでいたのか⁉　犠牲愛の真実が明らかに！

▼

1912年、ロンドンから出航した豪華客船タイタニック号に乗り込んだジャックは、海へ身を投げ出そうとしている令嬢ローズを見つけて助け出す。気の進まない男との結婚を強いられ、自殺しようとしていたのだ。やがて、ふたりに芽生える恋心。順調に航海を続けるタイタニック号だったが、突如現われた氷山にぶつかり、ついには沈没し始める。逃げようとする人々で船内は大混乱に陥っていた。ローズは、３等船室にいるジャックを何とか救い出すが、すでに救命ボートはなく、ふたりは、極寒の海に投げ出されてしまう……。1997年のアカデミー賞を独占した超大作。

監督・脚本●ジェームズ・キャメロン　出演●レオナルド・ディカプリオ　ケイト・ウィンスレット　ビリー・ゼイン　キャシー・ベイツ

タイタニック現象はいまだに沈まない

1912年4月10日、イギリスのサウサンプトン港を出発した夢の超豪華客船「タイタニック」は、大西洋上で氷山に衝突、15日午前2時20分に沈没した。

この悲惨な沈没事故を背景に繰り広げられる感動のラブ・ロマンス――それが映画『タイタニック』である。

史上最高の制作費2億ドルを投じて作られたこの映画、全米公開からわずか10週で全世界の累計興行収入9億1400万ドルを突破して歴代興行収入記録のトップに立ち、記録を大きく塗り替えたことでも有名である。

日本でも『もののけ姫』を抜いて興行成績日本一を樹立、ラブシーンは御法度の国・中国でもノーカットで上映されたとかで、とにかく1997年はタイタニックの年、この沈没船はいつまでも沈む気配を見せなかった。

2002年にはスイスとアメリカの会社が共同で全長275メートルのタイタニックを再現し就航させるという計画もあるとかで、ブーム再燃に結びつくこともじゅうぶんに考えられる。タイタニックの航海はまだまだ続くのである。

何があっても諦めないローズ

映画『タイタニック』の中でも、もっとも多くの善男善女を感涙せしめたのは、何といってもレオナルド・ディカプリオ演ずる画家の卵ジャック青年と、没落貴族の娘ローズ（ケイト・ウィンスレット）の悲劇の恋愛であろう。

「家」を守るため政略結婚することが決まっていたローズは、豪華客船タイタニックの船上で、ジャックと出会い恋に落ちる。身分の差やヒステリックなフィアンセの干渉にもめげず、ふたりはやがて愛を成就した。しかし、ちょうどその頃、氷山に激突したタイタニックは、徐々に船内に浸水し始め、沈み始めていたのだ。

ジャックとローズは、さまざまなアクシデントに見舞われつつ、からくもタイタニックを脱出する。しかし、海に投げ出されたふたりに、助けは訪れない。

なにしろ氷山の浮いているような海である。たちまち身体の感覚はなくなり、ローズは死を覚悟する。しかし、ジャックが言うのだ。

「約束してくれ、僕のために。絶対に生き残る、と。何があろうと最後まで諦めない、と」

ローズは約束を守ることを誓った。

彼らのもとに救助のボートがやってくるのは、それからしばらく後のことである。意識が朦朧（もうろう）としていたローズも、顔に懐中電灯の光を当てられ、正気を取り戻す。ジャックはすでに死んでいた。だが、「何があっても絶対に生き残る」というジャックとの約束を果たすため、ローズは渾身（こんしん）の力を振り絞り、助けを呼ぶ。

凍死する人々が見たもの

ローズは救出されたが、ジャックを含め、海に投げ出された多くの人々は、無惨にも死んでしまっていた。なかには赤ん坊を抱いたお母さんなどもいて、事件の悲壮さを物語っている。まずは、この名もなき豪華客船の乗船者たちの死因について考えてみたい。

海に浮かんだ人々のほとんどが、救命胴衣をつけていることから考えて、彼らの死因は、溺死ではなく、凍死であろう。

「凍死」という状態はいかなる状態かと言えば、要するに人間の体内で熱を生産する力よりも、低下する力が強くなる状態である。

人体は外界の温度に関係なく、37度前後の体温を保つ仕組みになっている。外界の温度が何

度であろうと、体内だけは一定の温度になるようつねに熱を生産している。これが行き過ぎれば、汗をかくことによって熱を放出しようとする。

ところが、この『タイタニック』の場合のように、寒い海に長い時間放り出されていればどうなるか。体熱の生産が、外界の温度に追いつかなくなる。人間の臨界点と言われる28度以下に、体温が下がってしまうのだ。すると、体内のほとんどの器官（心臓を含む）ははたらくことができなくなり、絶命することになる。

よく映画などで、山で遭難した人が「眠るな、死ぬぞ」と言うシーンを観たことがないだろうか。寝れば凍死するから、と。いったいあれはどうしてかと言うと、眠ると人体は熱の生産がおざなりになってしまうからだ。人間は動くことによって、熱を作り出している。筋肉が動けば熱が出て、体温が上がる。しかし、眠ってしまえば、熱の生産はきわめて微弱になってしまうのだ。当然、死期は早まることになる。

じつは、この「眠るな、死ぬぞ」の状態は、まだ体温は35度程度、平熱から2度程度しか下がっていない状態である。だが、このぐらいで人間の身体は疲労感・倦怠感・眠気を感じてしまうのだ。したがって、遭難者は、この眠気を振り払い、無理にでも身体を動かしていなければならない。そのために、ときには、ぶん殴り合ったりもするわけだ。

ローズが生き残った理由

豪華客船タイタニックから、海に投げ出された人のほとんどは死んだ。この映画のフィルムに収まっているかぎりにおいては、生存者はローズのみのようだ。なぜ、ローズだけが生き残ることができたのか。

これは、ローズが浮かんでいる木の板（船の舳先の破片と思われる）に横たわっていて、海水に浸かっていなかったからだ。救命胴衣をつけ、半身を海水に浸している人たちは、冷たい海水によって体温を奪われてしまったのだ。ローズを木の板まで案内したのはジャックその人であるから、ローズはまさに、ジャックの心づかいによって生き残ったことになる。この木の板にはふたりは乗ることができなくて、ジャックはとりあえずローズを乗せ、自分は木の板にぶら下がる形で落ち着いた。

それにしても感慨深いのは、ジャックとローズが木の板につかまってひとまず助かった後に、カメラはしっかりと、「助けてくれ」と叫びながら溺れる人を映していることだろう。すぐそばを「助けてくれ」と叫んでいる人がいても、ジャックとローズは自分が生き残りたいがために、彼に手を差しのべないのである。沈没する豪華客船の上での、短い花火のような恋愛にも、か

くも独善的側面があるのだ。「ジャックが死んじゃってローズかわいそう」とか言ってる善男善女よ、愛とはときにこれほど冷酷なのである。ゆめゆめ忘れることのなきよう。

意識混濁のローズは甘美な夢を見る

やがて、ふたりのもとに救助のボートがやってくる。

ローズはこのときなぜか、手を握り合ったジャックも気づかないほどかすかに、鼻歌を歌いながら天空を見上げている。「ちょっと待て、そういう場面じゃないだろう」と思った方も多かったのではないだろうか。

これはおそらく、体温の低下による意識混濁が、ある種の「甘美な恍惚感」を呼び起こしているせいだろう。体温が34度ぐらいになると、人は恍惚に襲われるらしい。凍死からの生還者は、みな異口同音に、「春風が吹いて、心地よい風が吹くどこかにいるような気がしていた」とか、「夢を見ているように妻子の姿を思い出した」と、甘美な幻想の中にいたことを語る。おそらくはローズも、この状態にあったに違いない。

ジャックを殺したローズ

顔に電灯の光を当てられ、あまりの明るさに意識を取り戻したローズはジャックを呼んだ。だが、ジャックは答えない。渾身の力を振り絞り、助けを呼ぶのだが、衰弱した身体から出る声は小さく、救助のボートには届かなかった。そのとき、彼女の脳裏を、ある言葉がよぎる。

「生き残ると約束してくれ、僕のために。何があろうと絶対に諦めるな――」

ジャックととり交わした約束である。彼女は、そのジャックとの約束を守るため、ジャックの身体を海中に沈める。「諦めないわ、絶対に」という意志の言葉とともに、握りしめた手にキスをする。手を放すと、冷たくなったジャックは、静かに水に呑まれていく。

まさに、『タイタニック』のクライマックス、悲劇のふたりの別れのシーンである。

死んだジャックの身体は海に呑まれていく。ローズは沈んでいくジャックの顔をじっと見つめていたが、やがて、見えなくなった。

だが、だがである。ここで疑惑が生じるのだ。果たして、ジャックは本当に死んでいたのであろうか？

ジャックは本当は生きていた？

▲ジャックは全身全霊を持って泳いだ。イアン・ソープのように!?

沈んでいくジャックの口からは、空気の泡がまったく出なかった。まるで、水に石を落としたときのように、静かに沈んでいった。

そんなはずないのである。ジャックはいままで、浮いていたのだから。肺内に空気があるから、浮いていられるので、そうでなければ浮いてはいられない。

浮いているものを沈めたら、肺の中の空気は当然のことだが出ていく。だとするならば、ローズがジャックの顔をじっと見つめることなどできようはずがない。口や鼻から出る空気の泡で、彼の死に顔は隠れてしまうはずだからだ。

にもかかわらず、ローズがジャックの死に顔

を見ることができた理由は何だろう？　ジャックの鼻や口から、空気が出なかった理由は何だろう？

考えられるのはひとつ。ジャックは「息を止めていた」ということだ。われわれが潜水をするときのように、彼は息を止め、海中に没したのである。つまり彼は、生きていたのだ！　現在製作中という『タイタニック2』の噂もジャックが生きているなら話が早い、というものだ。

いったいなぜ、そのような演技をする必要があったのか。それはわからない。死に際はカッコよく、という男の意志のなせる技かもしれぬ。いずれにせよローズは、すっかりジャックが死んだと思い込んで、助かった後は別の男と結婚してしまうのである。ジャックとのアバンチュールを、美しい思い出として胸に秘めながら。

知らぬが仏、とはまさにこのことである!?

上野メモ

この映画のように、氷山が浮いているような水温が0度に近い海に落ちれば、10数分でみんな死んでしまいます。死因は「寒冷による血液粘稠性の増加」と、「毛細血管の収縮による心臓の負担の増大」です。寒くなると血液の流れが悪くなって、心臓への負担が増えて、負荷に耐えられなくなって急性心不全になってしまうわけです。

名作「死体」の
検証学
▼
刺殺

〈第6章〉

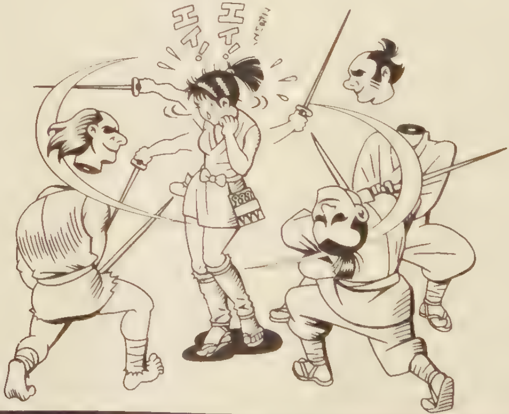
あずみ

可憐にして無敵の剣士あずみ。繰り出される卓越した剣術によって、次々と敵は斬り倒されていく。しかし、あの少女が殺した、刺客たちの首は、どうして斬り落とされたのか!?

▼

あずみを始めとする子どもたちは、人里離れた場所で、徳川の精鋭となるべく厳しい訓練を受けていた。仲間同士で殺し合う、という過酷な修行を経て、ついに人里へ下りるあずみたち。使命を受けてあずみたちは、加藤清正を首領に担ぎ、徳川幕府に反旗を翻そうとする者を次々に斬り倒していく。しかし仲間は、ひとり、またひとりと倒されていき、ついにはあずみただひとりになってしまう。大坂夏の陣の際、豊臣秀頼を介錯したあずみは、やがて戦う虚しさを覚える。そして、徳川方の柳生新陰流の剣士たちがあずみに襲いかかる。徳川に不信感を抱くあずみは、ついには徳川家康を暗殺してしまう……。徹底したヴァイオレンス描写と確かな構成でマンガファンをはじめ、歴史ファンにも高い評価を得ている。

作画●小山ゆう(小学館)



時代劇画ならではの表現を疑う

まず、初めに断っておかねばならない。

この項、題材が『あずみ』となっているが、ほんとのところは『あずみ』じゃなくたっていいのである。古くは手塚治虫の『どろろ』、白土三平の諸作、平田弘史の剣劇もの。新しくは井上雄彦の『バガボンド』、江川達也の『DEADMAN』。何だっていいのだ。チャンバラが描かれた劇画であれば、たいがいこの項で取り上げる題材に当てはまってしまう。

ここで扱うのは、劇画ならではの誇張表現についてだ。

平和な現代に住むわれわれは、幸か不幸か（まあまちがいなく幸だろう）、人と人とが斬り合う風景を、実際に目にすることはない。むろん、政局が不安定で、つねに人と人とが殺し合う地域も、世界にはある。しかし、そこで行なわれているのも、あくまで銃器を使用した近代白兵戦であって、刀や剣を使っての斬り合いではない。斬り合いというのは、現代ではほとんど見ることができないものなのだ。

誰も見たことがないものを描こうとすれば、たとえそれが実際にあり得なくても、絵になるフォトジェニックな殺し方がハバをきかすようになって当然だ。誰が始めたのかわからないが

（少なくともマンガの分野での創始者は白土三平だと思うが）、その人に罪はない。

首斬り――ここで取り上げるのは、それである。

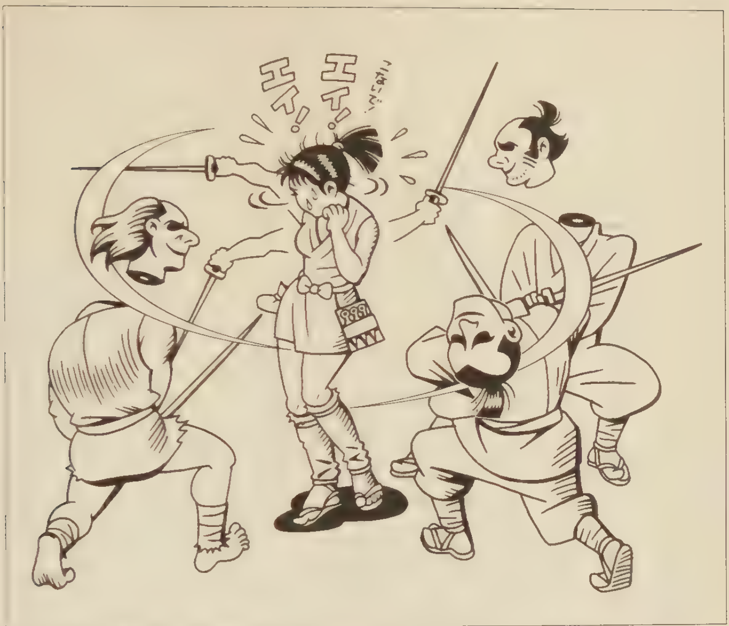
ついつい首を斬ってしまうのは猟奇殺人者か⁉

『あずみ』において、問題となる首斬りシーンは、主人公あずみが、柳生派の刺客数十人と往来で対決するところに表われている。

あずみは、その剣で一撃のもとに刺客たちの命を奪うか、腕や足を傷つけて戦闘能力を奪うかして窮地を逃れるわけだが、このとき、刺客のひとりが、まるごと首を斬り落とされているのだ。あずみの剣の一閃によって刺客の首は落とされ、地面に落ちていく。

すでに本書で何度も述べたように、人は頚動脈を切られては生きていられない。数分ともたずに絶命する、と見ていいだろう。死因は頚動脈切断による出血多量（失血死）だ。

したがって、攻撃する側としては、首を斬り落とす必要はまったくない。ただ、確実に頚動脈を損傷させるだけでいいのだ。だから、首を斬り落とすとするなら、



▲とにかく刀を振りまわせば、面白いように首が落ちるなどということは、人体の構造上あり得ない

①勢い余って首を斬り落としてしまった

②斬る人が首を斬り落とすのが好きな猟奇殺人者だった

のいずれかであると思われる。

あずみの場合、その性格から判断して、②であることはまずあり得ない。いや、あずみばかりでなく、古今東西の首斬りシーンを演じた剣豪たちも、②だったことはほとんどないのではないか。殺人剣の目的は、ただ相手の命を奪うことにあるのだから、わざわざ好き好んで②の方法をとる必要はない。

まして、このときのあずみの場合、

四方八方を敵に囲まれているのだから、仮に猟奇的性向があったとしても、首斬りを愉しんでいるヒマはないはずだ。さっさとこの場をやり過ごして、立ち去るのが賢明なのである。喜んで首を斬ってるうちに、思わぬところから刺客が顔を出さないともかぎらないわけだから。

以上のことから判断して、あずみ、ないしは首を斬り飛ばした剣の達人たちは、みな①の理由――勢い余って首ごとやってしまった、ことになる。

そうそう斬り落とせない首

しかし、しかしだ。

首を刀で斬り落とす、というのは、けっして容易な作業ではない。なぜなら、首の骨――頸(けい)椎骨(ついこつ)というのは、とにかく硬いものだからだ。日本刀程度で斬り落とすことはできない。おそらくはどんな剣豪の剛剣でも、首の骨に当たったら、ちょうど刀で岩に打ちかかったときのように、刃こぼれしてしまうことだろう。切腹のときに、首を斬り落とす「介錯人(かいしゃくにん)」という人物がいたが、一刀で首を斬り落とすということは、ほとんどなかったのではないだろうか？

『あずみ』に話を戻せば、このときのあずみの刀が、刃こぼれしていたら大変なことになる。

次々に刺客は襲ってくるわけだから、次からはその刃こぼれした刀で、戦っていかねばならないことになるからだ。これは苦しい。

まして、人の肉を斬れば刀には脂肪がべったりとついてくる。肉切り包丁だって、刀身を拭くことなしにずっと肉を切り続けていたら、切れ味が鈍ってくるものだ。それは日本刀の場合だって同じだ。刃こぼれして、なおかつ人の脂のべったりついた剣で戦うというのは、いくらあずみが剣の達人でも、不利な条件だと言わねばならない。

つまり、首を一刀のもとに両断する、などというのはできない相談なのである。もし仮に斬ることができたとしても、真の武芸者は、そんな効率の悪いことをするはずがない。頚動脈さえ斬ればいいだけなのだから、わざわざ頚椎骨まで斬らなくてもいい、というわけである。

ムダばかりが目立つ首斬り剣豪

では、首を斬り落とすのはまったく不可能なのか？　むろん、できないことはない。日本刀では難しいが、それ以外の道具を使うならば、じゅうぶんに可能だ。

その代表的な器具は、西洋で処刑に使われたギロチンだろう。じゅうぶんな重さを持つ刃に、

落下のエネルギーが加われば、首は椎骨ごと斬り落とされボロリと落ちる。あるいは『13日の金曜日』のジェイソンのように、チェーンソーを使うという手もある。この場合も、高速回転する刃という運動エネルギーを使用しているわけだ。つまり椎骨の切断は、じゅうぶんなエネルギーが加わって初めて可能になるのだ。人間の非力な腕＋日本刀では、どうにもならない。

すると、ここで疑問がわいてくる。いまここに、解剖台の上に乗り、解剖される予定の人間の死体があったとする。この人間の首を斬り落とすことはできないのかということだ。日本刀で斬れないのなら、メスで切れるはずはないではないか。

ところが、これは意外に容易な作業なのである。すでに第1部で上野氏が述べている通り（P36参照）、人間の骨と骨は靭帯（じんたい）でつながっているからだ。

首の皮膚を切り、肉を断っていけば、やがて椎骨が見えてくる。頸椎骨は7つあって、これが靭帯でつながっているが、椎骨と椎骨の間は5ミリくらいあって、そこに椎間板という軟骨がクッションの役割を持って介在する。これらを切ればいいのである。それだけで、首はポロリと落ちてしまう。これはわざわざ日本刀を持ち出す必要はない。

それゆえ、侍同士の斬り合いの場でも、まったく首が落ちることがなかったとは言い切れない。首めがけて振るった刀が、たまたま椎骨同士をつなぐ関節の部分に当たれば、首は落ちて

しまうこともあり得るからだ。ただし、首の関節の位置なんて、たとえ解剖学教授であっても、外から見ただけでわかるものではない。だから、関節を狙って斬りつけることは不可能で、たまたま振るった刀が関節に当たるというラッキーな場合だけ、首は落ちることもある。

『あずみ』の場合も、あずみが斬った刺客のひとりは、たまたま関節部に刀が当たり、首が落ちたのだと言うことはできる。

だが、すでに述べた通り、命を奪うことが目的ならば首を斬り落とす必要はない。二の太刀を出すためには、頚動脈を斬って刀を返し、別の刺客に向かって刀を振るった方が効果的だからだ。首を斬り落としてしまう剣術は、どう考えても効率が悪く、エレガントではないのだ。

劇画で首斬りシーンを見たなら、こう思うといい。あっ、こいつはたいした刀の使い手じゃないな、と。首を斬り落とす剣豪は、わざわざやらなくてもいいことをやっているという意味で、真の剣豪ではないのである。

上野メモ

首を斬る場面をあんまりリアルに描くと真似される恐れがあるから、この作品では劇画的表現にしたんじゃないかな。いま、バラバラ事件が多いですから。バラバラにするのは、死体を隠すためなんです。怖くて人を殺すんだけど、殺す前と殺した後では、人格が全然変わる。どうやって死体を隠そうか、というので頭がいっぱいになっちゃうんですね。

〈第７章〉

病院坂の首縊りの家

前時代的な、複雑にして不可解な血縁関係から起こってしまう、猟奇的でおどろおどろしい猟奇殺人事件。あの吊（つる）された首から流れ出た血液が語る衝撃の真実!!

▼

金田一耕助は、パスポートの写真を撮るために古い写真館を訪ねる。そこで金田一は、結婚記念日の写真撮影を依頼に来た女性と出会う。その女性に不審なものを感じた金田一は、撮影に指定された首縊りの家と呼ばれる屋敷に、店主とともに様子を見に行く。そこには、風鈴のように吊された、血を滴らせる男の生首があった……。大人気を博した、監督・市川崑＆主演・石坂浩二による「名探偵金田一」シリーズ最終作。猟奇描写がもっとも優れていると、横溝ファンの評価も高い。原作者の横溝正史が特別出演している。

監督●市川崑　原作●横溝正史　出演●石坂浩二／佐久間良子／桜田淳子／草刈正雄

ピーター

血の雨が降る『病院坂の首縊りの家』

誤って指を切れば、赤い血が流れてくる。膝小僧をすりむけば、膝に血がにじむ。そういうさまを見ているせいもあるのだろう。「切れば血が出る」因果関係は、われわれの頭に刷り込まれていて、なかなか取り払うことができない。

だから仮に、死んだ人の身体を切ったとしても、当然血は流れ出るものだろうと、われわれは思ってしまう。

しかし、実際にそんなことがあり得ないのは、すでに第1部で上野氏の指摘にあった通り（P42参照）。死んだ人は心臓が止まっているから、血流もない。

だから、死んだ人をいくら切り刻んでも、身体の構造上、派手に血が出ることはあり得ないのである。

ところが、だ。ここに、そういうセオリーをいっさい無視して、スクリーンに血の雨を降らせまくった映画がある。

市川崑監督・石坂浩二主演の「金田一耕助シリーズ」の最後の作品『病院坂の首縊りの家』だ。

じつは自ら望んだ生首風鈴の正体

問題の「死体切断」が、この映画のストーリーにとって重要な根幹となっていることはまちがいないだろう。

廃屋「首縊りの家」で、風鈴に見立てて吊された生首。

いったい誰が、何のためにこんなことをしたのか。これがこの物語の最大の謎になっているのだ。

本来、こうした推理ものでトリックを明かすのはマナー違反とされているが、ここでは便宜のために、あえて禁を破ることにしよう。

まず、吊されていた生首であるが、これはジャズ・バンド、アングリー・ハイレーツ（怒れる海賊たち）のリーダー、山内敏男（あおい輝彦）のものである。敏男は殺されたのではなくて、事情があって自殺したのだ。

むろん、死んだ人間が自らの意志で風鈴になることはできないので、これは第三者のしわざである。この第三者に当たるのが、敏男の妹・山内小雪（桜田淳子）と、旧家・法眼家の奥方・法眼弥生（佐久間良子）であった。

生首を風鈴にしてぶら下げるのは、じつは敏男の遺言であって、このふたりは敏男の遺言を叶えるために、わざわざ死んだ敏男の胴体と首を切断し、「首縊りの家」にぶら下げた、というのが事件の顚末（てんまつ）である。

ほぼ死に至る動脈切断

さて、そこまでわかったところで、この映画の問題の部分に当たってみよう。まず、敏男の自殺である。

敏男は、自殺するにあたって、ガラス片で自らの首をかっ切って息絶えている。壮絶な死にざまであるが、むろん、このこと自体に不審点はない。

人間が刃物を使って自殺しようとするとき、もっとも効果的なのが、首と手首に流れる動脈を切断することなのである。

この2カ所は、部位的にも切りやすく、多量の出血を起こしやすいので、人体の急所となっている。

動脈血は心臓から流れ出る血液で、血流に勢いがあるから、血管（動脈）が傷ついた時点で

おびただしい量の血液が流れることとなる。動脈血は人体からその4分の1がなくなると死に至ると言われているが（第1部P28参照）、その量の血液が流出するまで、ものの1分とかからない。

つまり、動脈を切れば、人は即死に近いかたちで絶命するのである。

シャワーノズルで血をまき散らす

敏男がガラス片で首を切ったときに、血は大量に流れ出ている。これはいい。しかし、映像を見ていただければわかるが、この血の出方がミョーなのである。

この血、どう見ても、広がって流れている。なにしろ、瞬時に周囲の壁が真っ赤になってしまったのだから。

動脈というのは、要するに、赤い水の流れているホースだと考えてもらえばわかりやすい。このホースに、ナイフで切れ目を入れたとしたら、どうなるだろうか？　当然、切れ目を入れたところから、水は勢いよく吹き出ることになる。だが、その水は、1本の線の軌跡を描くはずで、断じて広がって流れはしない。そこに壁があったとしても、壁全体が真っ赤になるよう

に流れるはずがないのである。

この赤い水を、壁一面に広がって流れるようにするためには、人為的な操作が必要になる。切り口にシャワーノズルを取り付けるとか、ホースそのものを指でつかんでひしゃげた形にするとか、ホースに何らかの加工をしなければ、血は広がって流れない。

この血の流れ方を見ていると、どう考えても敏男という人は、首にノズルがついた特殊な人間だとしか思えないのである。そんな人間がほんとにいるかどうかはともかく、敏男の首はそうなっていないと、この場面は理屈に合わないのだ。

2時間20分後でも死体はよみがえる

敏男の自殺の後、法眼弥生が敏男の遺体から、首を切り落とすことになる。

ただし、弥生は敏男の自殺の際、そばにいたわけではない。敏男のそばにいて、敏男の遺言を聞き届けたのは、妹の小雪だけだった。

小雪は敏男が息絶えたのを看取ると、ふたりの生活の場であり敏男が自殺した場でもあるガレージから車を飛ばし、法眼家の弥生のもとに走る。法眼家はこのガレージから1時間の距離

にある、と劇中で触れられているから、弥生が敏男のもとに現われるまで、往復で最低2時間の時間が経過していなければならない。しかも、じつはこのとき、小雪と弥生は初対面である。お互いの素性を明かし、その悲しむべき因縁を涙を流しながら語るシーンは、映画の中でもひとつのクライマックスとなっている。ことの経緯を話すだけでも、最低20分はかかっているだろう。

つまり、弥生と小雪が敏男の遺体のもとに戻るまでに、最低でも2時間と20分の時間が経過していなければならないのだ。

ところが、だ。

弥生が生首風鈴を作るべく、手にしたナタで敏男の首を斬るそのシーンでは、敏男の遺体から、おびただしい量の血液が噴出しているのである。

すでに述べたように、人体から動脈血が4分の1（成人男子の血液総量は約5リットル。すなわち、約1・25リットル）が失われれば、その人は死に至る。だとするならば、弥生が敏男の死体を目にしたとき、敏男の体内には3・75リットル以下しか血液が残っていないという計算になる。

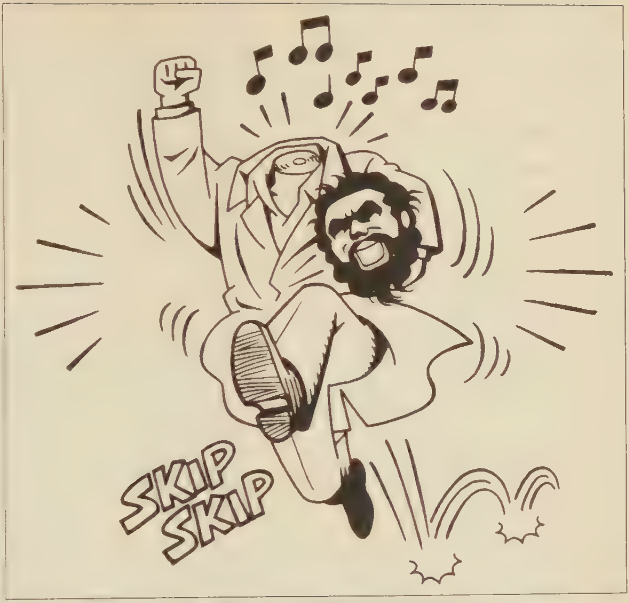
しかし、そのわりにはこのシーンで、派手に血が飛ぶのである。弥生がナタを振り下ろすたび、

壁に、床に、弥生の身体に、激しく血が乱れ飛ぶ。どう見ても、3・75リットルより多いことはまちがいない。

さらに、死んでいるのであるから、こんなに派手に血が飛ぶわけがない。血流が止まってすでに2時間20分、いい加減、敏男の血液も落ち着くところに落ち着いていないとおかしいはずなのだ。

ナタを振り下ろして首を切断しても、せいぜい切り口にたまっていた血がドロリ、と床にたれる程度だろう。それが、この場で流れる血液のすべてであるはずだ。

ところが、この映画は、死んだはずの人の身体から、あたかも彼が生きているかのように、流血するのである。



▲首がなくても大丈夫!?　敏男は再生し自らの首をかかえて消えた……!?

人間とは思えない敏男の正体

先の敏男の首ノズルの血液噴射や、死んでからの流血加減を総合すると、敏男は人間ではないのではないか、という類推が可能になってくる。

敏男は、再生能力を持った異次元の生物にちがいない。彼は1回死んだ後、2時間後には再生できる能力を持っていたのである。

おそらくは、首を切って死んだ後、小雪が弥生を迎えに行っている間に、敏男は再生していたのだ。再生して、すやすや寝ていたところに、弥生が現われて、敏男の首を切断した。だとするならば、この流血もムリなく首肯できるのである。この流血を肯定するためには、そういうSFチックな設定がどうしても必要になってくる。

だとすると、この映画の冒頭に現われて、事件の異様さをいやがうえにも盛り上げた生首の風鈴も、再び生き返り、胴体を求めてさまよい始めなければおかしい。

あの首は生きていたのか。

現場検証が終わった後などに、首はふらふらとさまよいだし、いつしか警察や金田一耕助の前から忽然（こつぜん）と消えていた、というのが、じつはこの事件最大の謎なのかもしれない。

弥生は敏男の胴体を海の見える松原に埋めたと供述しているが、その供述が終わる頃には敏男は松原にいて、胴体と合体を果たしていることだろう。

この作品は、連続殺人を題材としたミステリーではなく、謎の宇宙生物のドキュメンタリーだった……のかも？

上野メモ

心臓が止まっているなら、この映画のように死後に大量の血液が流れ出たりはしませんよ。酒鬼薔薇聖斗事件と同じ。犯人の少年がタンク山で首を切断したけど、血液は流れていないでしょ。多少は死んだ後でも血が出るから、原作の文章で「血が流れている」と書いたのを、映像にするとき、派手に表現しちゃったんじゃないかな。

名作「死体」の
検証学
▼
射殺

〈第8章〉

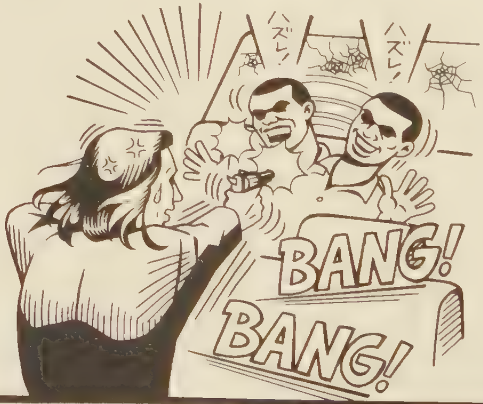
パルプ・フィクション

複雑に絡み合った４つのストーリーが、エンディングで見事に収束する名作。ところが、あの死体のせいでストーリーが成立しなくなってしまう危険が発生した！

▼

一仕事を終えて帰る途中、車内でビンセントの銃が暴発して、タレコミ屋を殺してしまう。車内は血でべっとりと汚れ、このまま車で走っていたら警察に捕まってしまう危険がある。困ったヴィンセントたちは、友人の家に逃げ込み、ボスに指示を請う。ロサンゼルスを舞台に「パンプキンとハニー・バニー」「ヴィンセントとジュールス」「ミアとヴィンセント」「マーセルスとブッチ」といった４つのストーリーが複雑に絡み合い、エンディングへと収束していく。監督のタランティーノは、２作目となる本作でカンヌ映画祭グランプリを受賞した。

監督・脚本●クエンティン・タランティーノ　出演●ジョン・トラボルタ／サミュエル・L・ジャクソン／ハーヴェイ・カイテル／ティム・ロス／ユマ・サーマン


ハズレ！
ハズレ！
BANG!
BANG!

ストーリーの核を成す1発の銃弾

『パルプ・フィクション』は、レストランで食事をするカップルが、強盗計画を練るところから始まる。思いついたら即実行、ふたりは拳銃を取り出して「手を挙げろ」と叫ぶ。これが1話目となり、同時にこの映画のプロローグとなる。この映画を観る者は、さらにここから3つの異なるストーリーへと導かれていくことになる。

2話目は、下っ端ギャングとギャングのボスの奥さんとの危険なデート。3話目は、イカサマ試合を強要され、それを拒んだボクサーの逃避行。4話目は、殺し屋のミスの後始末。

これらのエピソードはそれぞれ独立していながら、微妙に関係し合っている。じつは、この4つのエピソードは、たった2日間のうちに起こった4つの事件を時間経過を追わずに描いたものだからだ。

映画はやがて、あの冒頭のレストランへと帰ってくる。この1話目が、じつは映画の重要なパートのひとつであることを、観る者は最後になって知ることになる。この構成には、誰もがしてやられたという感を抱くだろう。『パルプ・フィクション』の面白さは、鬼才クエンティン・タランティーノによるこの構成の妙に負うところも大きい。

だが、この構成、じつは非常に曖昧（あいまい）な基盤の上に築かれている。この映画のある1場面を、ただ「あり得るかたち」に変えてしまうだけで、映画はあらぬ方向に行ってしまうのだ。

その決定的な1場面とは、4つのストーリーの4話目、ギャングのヴィンセントとジュールスが車の中で誤って人を殺してしまうくだりである。

誤って射殺された男

ふたりは、ボスの命を受け、4人の人間を殺して金塊を運搬する途中だった。ちょっとしたことで口論になり、ヴィンセントは後部座席に座っていた男に意見を求める。カッカしやすい彼は、誤って発砲し、男を殺してしまうのだ。

男からはこれでもかというほど血液が吹き出た。ふたりの会話によれば、脳ミソが飛び散ったという。ヴィンセントもジュールスも、返り血を浴びて真っ赤になり、車はシートから後部ガラスまで真っ赤に染まってしまった。とてもこのまま天下の往来を走れる状態ではない。

なにしろ、ふたりは4人を殺すヤバイ仕事の帰りである。そのうえ、車には出所不明の金塊が山と積まれているのだ。警察に見つかったらことなのである。とにかく後部座席の死体を隠

し、車にこびりついた血痕（けっこん）を拭き取り、返り血を浴びた身体をきれいにしなくてはならない。

ふたりは近くの友人ジミー（監督クエンティン・タランティーノが自ら演じている）の家に駆け込み、事態を収拾しようとする。

動脈をかすめた銃弾の不思議

問題となるのは、この後部座席の男の死にざまだ。この男、いったいどのような状態で死に至ったのだろう？

まず、妙なのは、この男から吹き出た血液の量である。

ありていに言うと、これ、異様な量なのである。撃ったヴィンセントにも、運転していたジュールスにも返り血がかかり、後部ガラスが真っ赤に染まるほどの血液。いったい、どこを撃てば人はこれほど出血するのだろう？

答えはひとつ、頸動脈（けいどうみゃく）以外にはあり得ない。これだけの血液が飛ぶためには、動脈が損傷したと考えるしかないのだ。つまり、ヴィンセントが撃った銃弾は、後部座席の男の首に命中し、それが致命傷となって男は絶命したのだろう。少なくとも、そう類推することでしか事態の説

明はつかない。

ところが、ヴィンセントもジュールスも、そして死体の掃除をするためボスから派遣された男、ウルフも、座席や後部ガラスには脳ミソが付着している、と言っているのである。首に銃弾が当たったとは一言も言っていない。発射された銃弾は1発だから、脳以外の場所に当たったとは考えられない。なおかつ、劇中で1カットだけ挿入される男の死体を穴の開くほど眺めてみても、首から出血している様子はない。

返り血を浴びない撃った側

これはミステリーではないか。いったい、ヴィンセントの銃弾はどこに当たったのか？

仮に、ヴィンセントやジュールスの言葉通り、銃弾は脳を撃ち抜いたのだ、と想定してみよう。前の座席に座ったヴィンセントの銃弾は、後部座席の男の脳天にぶち当たり、男を死に至らしめたのだ。

だとすると、ここで矛盾が生じてしまう。発射された銃弾は相当の熱を持っているため、人間に命中した場合、命中した部分の皮膚は銃弾に巻き込まれ、必ずめり込むものだ。したがっ

て、後部ガラスはともかく、前に座っているジュールスやヴィンセントに返り血がかかることはまずあり得ない。脳の血管のほとんどは細い血管で、動脈を切断した場合のように勢いよく血液が吹き出る、ということは珍しい。

　さらに、この男は即死しているのだから、銃弾は大脳ではなく、脳幹を損傷したと考えられる（第1部92ページ参照）。すると、銃弾は男の額から、斜め下に向かって貫通していなければならない。脳幹は生命維持に重要な部位で、「心臓動け」「呼吸しろ」と命令を出しているところである。この部分が銃弾で破壊されれば、心停止、呼吸停止となり即死する。それでも大量の血が流れ出たというのであれば、銃創が下になっていてそこから体内の血液が流れ出たものであり、車内に血が飛び散って、血だらけになることはない。

　至近距離だから、頭蓋骨が砕けて脳ミソが飛び散ることも、ないとは言えない。しかし、仮にそうだとしても、この後部ガラスの染まり加減は大げさなのだ。なにしろ天井のほうまで真っ赤なのだから。

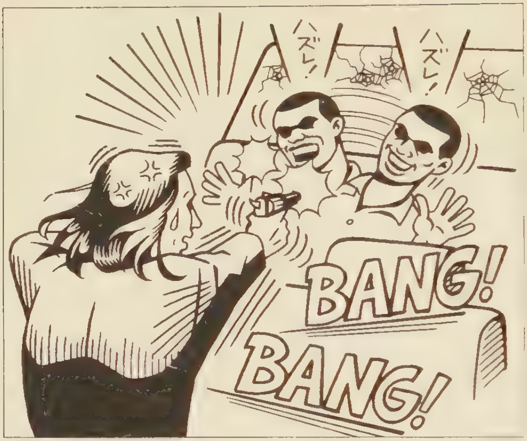
　脳幹を損傷し、なおかつ頭蓋骨を砕いて銃弾が出てきたとしたら、ソファの背もたれのあたりが一番汚れるはずで、天井まで血液が飛ぶなんてことはまずあり得ない。ヴィンセントやジュールスに返り血がかかる可能性は、ゼロと言っていいだろう。

絶妙なストーリーを支えていた「射殺死体」

以上の推測を総合すると、妙なことになってくるのである。

もし、劇中で説明されているように、ヴィンセントの銃弾が後部座席の男の脳を砕いたのだとしたら、ヴィンセントとジュールスによる車内清掃は意外なほど簡単に済んだはずではないか？　ふたりはどこか人気のないところに車を止め、死体をトランクに移動し、ソファを大きめのタオルなどで覆っておけばいい。それで人目につくことなく、事態を丸く収めることができてしまう。早朝からカタギの友人の家に押しかける必要はないし、ウルフの世話になる必要もむろんない。誇り高きギャングが、よりにもよってTシャツに半ズボンのマヌケなカッコでうろうろすることもなかったのだ。

すると、この後のドラマの展開も大きく変わってく


ハズレ！
ハズレ！
BANG!
BANG!

▲ストーリー上、重要なヴィンセントの１発。失敗は許されない!?

ることになるはずだ。ヴィンセントとジュールスは、すみやかに死体を片づけ、任務を遂行することになるから、レストランに朝食を食べに入ることもなかった。すると、ああ大変だあ。ふたりはあの印象的なカップルの強盗シーンに出会うこともない。映画のプロローグがそのままエピローグになる構成も、めちゃめちゃになってしまう！

たったひとりの男――それも明らかな端役の死に方が、「あり得るかたち」になっただけで、『パルプ・フィクション』の感嘆すべき構成は、見事に壊れてしまうのだ。この映画の構成の妙は、後部座席の男が派手に出血する、というエピソードがあってこそ成立し得ていたのだから。

この後部座席の男の死って、じつはひどく重要な部分だったのである。『パルプ・フィクション』の脳幹だった、と言ってもいい。小さいがひどく重要な部分という意味でも、これは脳幹である。そう、脳幹損傷はまさに、致命傷である。

余談であるが、一流の殺し屋はみな、確実に脳幹を貫くように、1発だけ銃を撃つという。

上野メモ

この映画では即死しているようですが、頭を弾丸が貫通しても脳幹に当たらなければ即死はしません。弾丸は熱を持っていますから、血管などを焼きながら貫通するので、あまり出血もせず、出血多量で死ぬ可能性が低いんですね。ちゃんと治療すれば助かるんです。もっとも、植物人間になってしまいますけど。

名作「死体」の
検証学
▼
轢死

〈第９章〉

スタンド・バイ・ミー

４人の少年が大冒険の末に見つけ出した、あの轢死体（れきしたい）。少年から大人になった第一歩だった。ところであの死体、どうしてあんなところまで飛ばされていたんだろう？

▼

オレゴン州の片田舎に住む少年ゴーディは、仲間のクリス、テディ、バーンと仲良く遊んで暮らしていた。ある日４人は、ラジオで話題の、列車に轢（ひ）かれたまま行方不明になっている少年の死体を探しに旅立つ。いままで町から出たことのない４人にとって、それは大冒険だった。途中、犬に追われたり、ヒルに襲われたり、さまざまな困難が４人に襲いかかる。やがて、死体があるはずの場所にたどり着く……。小説家スティーブン・キングの短編小説を映像化した青春映画。ベン・Ｅ・キングが歌う同名主題歌も大ヒットした。

監督●ロブ・ライナー　出演●ウィル・ウィートン　リヴァー・フェニックス／コリー・フェルドマン

たったひとつの死体の死因

現在、世界でもっとも人気のある作家は誰かと言ったら、たぶんほとんどの人はスティーブン・キングだと答えるのではないだろうか。なにしろ映画化された作品の数が半端ではないし、そのほとんどが大ヒットしている。それにともなって単行本も全世界で飛ぶように売れている。いまやキングと言えばスティーブン・キングのことを指す時代になっているのだ。B・B・キングではないし、フレディ・キングではむろんない。

そのキングが、映画化された自作品のなかで唯一、これは満足のいく映像作品だと漏らしたと伝えられる作品が、ロブ・ライナー監督の『スタンド・バイ・ミー』である。この映画のヒットに合わせ、テーマ曲として使われたベン・E・キングの同タイトルのシングルがリバイバル・ヒットしたりもした。

『スタンド・バイ・ミー』において、死人はひとりしか出てこない。ブルーベリーを摘みに行って、その帰りに死んだあわれな少年である。この少年は、物語の中では、すでに死んだ状態になっている。なにしろこのストーリー、この死体の噂を聞いた少年たちが、第1発見者になってラジオや新聞に載って人気者になろうという企てから始まるのだから。

途中、犬にわんわん吠えられたり、森の中でたき火をして交代で見張りについたり、ヒルに嚙（か）まれたりしながら、少年たちは最終的にこの死体の発見者になる。ただし、彼らはそれを警察に通報したり、マスコミにタレコミしたりはしなかった。それが、この少年たちの成長のかたちであったことは言うまでもない。

轢かれて死ぬ「轢死」という死に方

人が列車と接触して起こる事故には、3つの形態が存在する。

ひとつは、文字通り「列車に轢かれる」場合。つまり、人間の肉体が走っていく列車の下敷きになるという事故である。

子どもの頃、線路の上に10円玉ないしはそれに類する硬貨を置いて、列車が通過した後に、それがぺっちゃんこになっているのを見るというたわいのないイタズラをしたことのある人もいるだろう。通過する列車の速度や重量というものは、かくも苛烈なものかと身をもって感じることができたはずだ。当然のこと、線路の上に人が横たわるなどして、そこを列車が通り過ぎたなら、この硬貨のごとくつぶされることになる。まさにグチャグチャという状態になるの

だ。

ところが『スタンド・バイ・ミー』の少年死体は、こうはなっていない。つまり、この不幸な少年は、列車の下敷きにはなっていないのである。彼は「轢かれた」のではなく、ふたつ目の理由「跳ね飛ばされる」ことによって死に至ったのだ。それが証拠に、彼の死体は線路から離れた場所に、とくに大きな外傷も見られないかたちで転がっていた。ちなみに3つ目は列車とホームの間に挟まれる場合だが、ここではあまり関係なさそうだ。

ここで疑問なのは、少年の死体の転がっている位置なのである。彼の死体はいったいなぜ「そこ」にあるのか？

少年の死体は、線路からかなり離れた地点に転がっていた。死体探しの4人は、線路の上から死体を見つけ、そこに近づいていくが、彼らが線路上から死体の場所まで行く間に数秒はかかっている。歩数にしても20歩以上はあるのではないだろうか。そうすると死体発見現場と線路とは、おそらく10メートルは離れていると思われる。

ぶつかる列車が速ければ速いほど、線路上にいた人間が遠くに飛ばされることは言うまでもない。当然のこと、人間の肉体を10メートルも跳ね飛ばすことができる列車は、相当の速度で走っていると考えられる。

だが、この『スタンド・バイ・ミー』に出てくる列車は、どう見てもそれほど速度があるとは思えないのである。あの印象的な、4人の少年が橋の上を歩いているときに、列車が後ろから追いかけてくる場面を思い起こしてほしい。

列車はカーブを曲がりきったところで橋に至る。つまり、橋を渡る寸前の時点では、列車の運転手から橋の上の少年たちは見えていない。したがって、この列車の運転手は橋にさしかかってから減速行動を起こしたと考えられる。

所詮、子どもが走って逃げられる程度の速さである。たいした速さではない。いかに橋が長くて、運転手の減速行動が迅速だったとしても、この列車の最高速度はたいしたことはないと断じてまちがいはなかろう。

だとすれば、不可解なのはこの、10メートル飛ばされた死体なのだ。いったい、どうしてこの死体は、こんな遅い列車にぶつかって、10メートルも飛ばされたのだろうか？

死体の飛距離をかせいだ物体

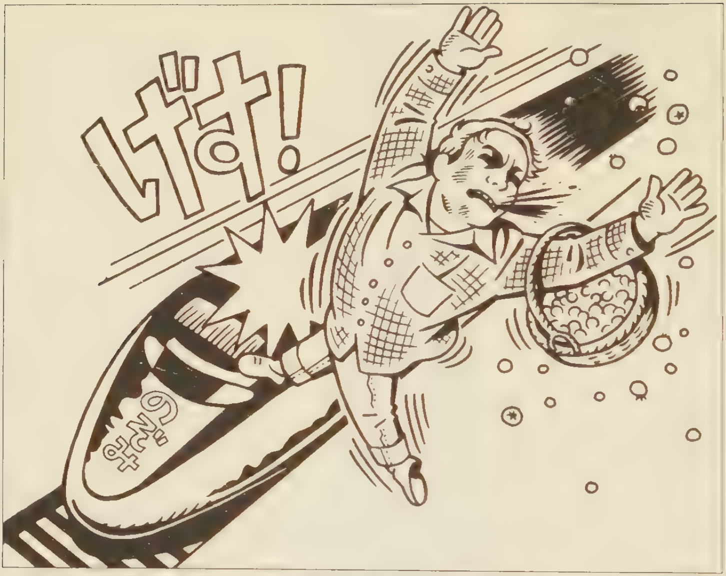
列車に突き飛ばされた少年は、10メートル「飛ばされた」のではなく、10メートル「転がっ

た」のではないか。その可能性は確かに否定できない。このあわれなブルーベリー摘みの少年は、列車に突き飛ばされた後、その勢いでさらに数メートル転がったのだ。そう考えてみることはできる。

確かに、線路と少年の死体発見現場は、ゆるやかな傾斜を作っていて、少年の死体が転がり落ちる可能性はある。だが、そもそもこの死体の発見現場は、奥深い森の中ではなかったか。あたり一面がきれいに整備された町の中や、アメリカに見られる砂漠の中央を走る線路ならともかく、こんなに木の生い茂った場所で10メートル転がることができるのか？　可能性としてはかなり低いと言わねばならない。

だとすると、この事態を説明づけるのは、列車の速度がじゅうぶんに速かったということしかないではないか。あの印象的な橋の上の場面に現われた、のろくさい蒸気機関車とは別の列車によって、少年は突き飛ばされたのだ。そう推測するならば、10メートルの飛距離も説明できるだろう。

では、人を10メートル突き飛ばすことのできる列車とは、どの程度の速度を出さねばならないのか？　これは、当然のこと、速度ばかりではなく、少年の体重や当たった場所なども関係するから簡単に結論づけることはできない。しかし、半端なスピードでは少年の肉体を10メー



▲のぞみ号に跳ね飛ばされる少年。せっかく摘んだブルーベリーも台無しだ

トル飛ばすことは不可能だろう。

しかし、われわれは知っているはずだ。この映画の舞台となった1950年代後半から40年以上を経た現代、われわれは人間を10メートル突き飛ばすことのできる列車を持っている。

新幹線だ。しかも速いやつ。そう、のぞみ号だ。日本が世界に誇るのぞみ号なら可能かもしれない。

アメリカ・オレゴン州には、すでに50年代後半に、のぞみ号に匹敵する速さの超特急が走っていたのである。しかも、高架を走る新幹線ではなく、蒸気機関車が走る在来線を、新幹線が走っていた。アメリカの特急がのぞみ号を超える速度を出したとい

う話は聞いたことがないから、おそらくは軍の開発した新型輸送列車か何かのプロトタイプだったのだろう。少年は、きっとこの列車のテストに出くわしたのだ。つくづくツキのないヤツである。ブルーベリーなんか摘みに行かなければよかったのに。

50年代のアメリカは、かくも文明の発展した国だったのである。アメリカが底力を持った国であることは誰でも知っているが、その程度は想像をはるかに上まわるものであることを、われわれは知らねばならない。

上野メモ

線路の端に立っていて跳ねられたら、この映画の死体のように遠くへ飛ばされないでしょう。ただ少年が、列車からレールに沿って走って逃げていて、かつ後方から追突されるようなかたちで跳ね飛ばされたら、自分の加速度に後方からの追突加速が加わって、比較的遠くへ跳ね飛ばされるでしょうね。

名作「死体」の
検証学
▼
焼死

〈第10章〉

バックドラフト

突然、炎が爆発する恐怖のバックドラフト。しかし消防士の敵は炎だけではない。なのに英雄は、どうしてマスクもしないで、燃える家の中に飛び込んでいくことができたのか⁉

▼

町の英雄だった亡き父の後を継ぎ、同じ消防隊で隊長を勤めるスティーブンのところへ、弟のブライアンが新人として入ってくる。しかし性格の合わないふたりは、ことごとく反発しあう。同じ消防士として、家庭を崩壊させながらも、町の英雄として生きようとする兄にとても敵わない、と悟ったブライアンは、消防士を辞め、放火犯罪調査官の助手へと転身する。シカゴを騒がせている、バックドラフトを利用した、奇妙な放火犯罪を調査していくうちにブライアンは、被害者の共通点から意外な真相をつきとめる。兄弟の葛藤と愛情を描き、最新SFX技術によって、驚異の炎を再現した超大作。

監督●ロン・ハワード　出演●カート・ラッセル　ウィリアム・ボールドウィン　スコット・グレン／ジェニファー・ジェイソン・リー

消防士を襲う「バックドラフト」の恐怖

モノが燃焼するためには、次の3つの条件がそろわなければならない。ひとつは燃えるモノ（紙や木など）があること。もうひとつは酸素があること。そして、発火点（モノにはそれが燃え始める固有の温度というものがある）以上の温度があること。この3条件がそろって、初めて燃焼という現象が発生する。

では、「バックドラフト」という現象はいかにして生じるか。これは、この3条件のうち、酸素の不足によってもたらされる現象である。

閉ざされた空間の中で燃焼が進むと、当然のことながら酸素は次第に不足してくる。そうなると、火は炎を上げることができず、くすぶっている状態になる。つまり、燃焼物質とその発火点に達した温度というふたつの条件が整っていながら、酸素という条件が欠けた状態になるのだ。

このときドアを開けるなどして、急に酸素が流入すればどうなるか。燃焼の条件が突然にそろい、爆発が起きることになる。これがバックドラフトである。当然、ドアを開けた人間は爆風で吹き飛ばされてしまう。この爆風のすさまじさは、映画『バックドラフト』に描かれてい

る通りだ。

映画『バックドラフト』は、このバックドラフトに代表される危険につねにさらされながらも、それと果敢に戦う消防士の姿を描いた映画である。

勇敢な消防士として、多くの人命を救助してきた父。町の英雄だった父。しかし、その父は人命救助の渦中で命を落とす。

残されたふたりの息子は、紆余曲折（うよきょくせつ）を経てやはり消防隊員となる。父の後を継ぎ同じく町の英雄となり得た兄スティーヴンと、父と兄の偉大さに微妙な心情をかかえつつ、やはり消防士となることを決意する弟ブライアン。この兄弟の心情と、連続する放火事件（人為的にバックドラフトが起こされる）が、この物語の根幹になっている。

人命救助の美談はなぜ減った？

燃えさかる火の中で、子どもが泣き叫んでいる。男は果敢に火の中に飛び込み、子どもを救出する。

男の行動が英雄的行為であることに、異論をはさむ人はいないであろう。人は、自らの危険

をかえりみず、他者を助けたいという気持ちになることがあるのだ。

こんな話は、映画やドラマの中ばかりにあるのではない。もし仮にあなたが、過去の新聞記事を丹念に探したなら、きっとこんな美談を発見することもできるはずである。

それと同時に、あなたは気づくはずだ。こうした美談は、時代が進むにつれ、明らかに減少しているということに。

あるいはあなたは、ここ最近の奇怪な犯罪の多発とこうした美談の著しい減少をひき比べ、「人心の退廃」についてさえ説くことができるかもしれない。時代が進むにつれ、個人主義が徹底され、自らの命をかえりみず他人の命を救おうと考える人間は少なくなっている。あなたは絶望とともに、そんなことを考えるかもしれない。

だが、そう考えるのは早計である。こうした美談の減少は、必ずしも人心の退廃ばかりに原因が求められるものではない。もっと根本的な要因があるのである。

その要因とは、建造物の変化にともなう火災の性質の変化である。

木造建築が主要な建造物であった頃、火事で苦しんでいる人の救助は容易だった。なぜなら、救助する人は、火そのものと燃焼にともなって発生する一酸化炭素中毒だけに注意していればよかったからである。

ところが現代の建築には、さまざまな合成樹脂や化学繊維が使用されている。絨毯（じゅうたん）やカーテン、床張りには「ビニタイル」と呼ばれるポリ塩化ビニールの板が使われているし、床材や家具、壁材の合板の接着剤には熱硬化性の合成樹脂が用いられている。畳でさえ、芯材にはポリスチレンが使われている。

また、これらの樹脂は加工性や耐候性などの向上のため、多くの添加剤が使用されている。新築の建物に入ると、しばしば目に刺激があったり、一種独特の臭いがするのはこうした合成樹脂や化学繊維によるものだ。

そして、現代の火災において死者が出るとき、これらの合成樹脂や化学繊維から発生する亜硫酸ガスや青酸ガスによる中毒死は、主要因のひとつになっているのだ。火で焼けたり、一酸化炭素中毒によって呼吸困難になる、その前に、多くの人は有毒ガスによって命を落としているのである。

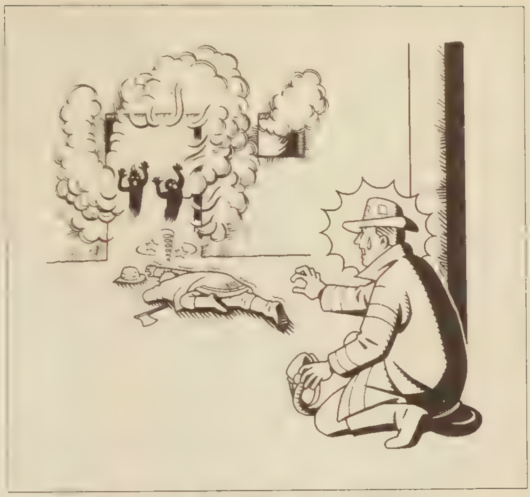
美談が成立しなくなった背景には、こうした建造物自体の変化が要因としてあることは言うまでもない。亜硫酸ガスや青酸ガスが充満する火災現場に、ガスマスクもせずに入ったりしたら、人命を助ける前に自分がガスにやられてしまうだろう。場合によっては、1回呼吸しただけで、命が失われることさえあるはずだ。

兄スティーヴンは英雄になれたか

さて、『バックドラフト』である。

この映画で印象的なのは何といっても兄のスティーヴンで、家庭を崩壊させながらも英雄であり続けようとするその姿は、見る者を感動させずにはおかない。

彼は火事場に飛び込むとき、マスクをつけない。なぜなら、彼は火を読むことができるからだという。火かどちらから吹き上げるかわかるから、危険をかえりみず火の中に飛び込むことができる。


▲人を助ける前にスティーヴンは火事の実態を知るべきだろう

では、彼は有毒ガスの発生も、読むことができたのだろうか？　できた、と仮定するしかないが、だとすれば英雄になることはきわめて難しかったに違いない。なぜなら、やはり英雄だった彼の父の時代とは異なり、彼の時代はすでに合成樹脂と化学繊維の時代に入っているからである。

彼がもし、あらかじめ危険を察知することのできるカンを備えていたならば、燃えさかる火の中に入るなどということはできなかっただろう。怖いのは火ではなくて、目に見えないガスなのだから。

上野メモ

"昔の木造家屋の火事現場なら3回くらいの深呼吸までなら一酸化中毒にならずに済みました。ですから、火事の家に飛び込んで、子どもを助けることも可能でした。ところがいまでは、新建築材から発生するガスで、1回でも呼吸すると意識を失って倒れてしまいます。だから、この映画のように不用意に飛び込むと命を失いかねません。"

おわりに

いままで、私は著書の中で「死体は真実を語る」ということを繰り返し主張してきた。

法医学とは、死者の声に耳を傾ける学問で、死体を丹念に観察することで「その死体がなぜ死んだか」「死ぬ前はどういう状況だったか」といったことを必ず雄弁に教えてくれる。

その信念はいまも変わらないし、もとよりこれは法医学自体の大前提でもあるので、そうそう変わるわけはない。

だから、この本の『死体の嘘』というタイトルには、最初、少し抵抗があった。「死体は嘘をつかない」のに、なぜ「嘘」と入れたのか。

それは、まえがきでも述べたが、第2部でマンガや映画の中の検死を行なっていることと大いに関係がある。

この本を作り上げたのには、やはり増え続ける凶悪犯罪に対して、

法医学者として何か一言もの申しておきたい、という考えがあったからだ。また、とくに昔と死生観が違ってきている若い読者にもアピールするため、第2部では作品世界にあえてメスを入れた。タイトルにも、それが一目でわかるように、「死体の嘘」とした、というわけだ。

　最初はいままで著した書籍と毛色が違うので、少し違和感を覚えたこの企画だったが、最終的な本のかたちになったいまでは、ひとりでも多くの読者の目に触れることを願ってやまない。

　出版にあたり、㈱アスキー第2書籍編集部の新井晋、佐藤亨、尾中麻由果各氏、㈱イシサキの中川紀彦、加藤伯明各氏、そして浦信司氏、天沼克氏には、大変お世話になった。この場を借りて、心から謝意を表する。

2001年9月

上野正彦

写真提供

P24	東京・世田谷の一家4人惨殺
P25	井の頭公園バラバラ遺体 神戸小学生連続殺傷事件
P48	高橋弘二セミナー企画団体「ライフスペース」元代表
P49	無惨、バラバラの遺体　織原城二容疑者のマンションから
P62	オウム・地下鉄サリン事件・出動した消防庁の科学機動隊
P63	和歌山・青酸カレー事件 次男保険金殺害事件
P84	八王子・スーパー射殺事件
P85	警察庁長官銃撃
P100	東京・JR新大久保駅の3人死亡
P101	宇和島水産高校実習船「えひめ丸」米原潜衝突事故 常磐線の現場で行われた下山事件の実地検証
P122	なぜ母を殺さなければ…山口・16歳金属バット殺害
P123	足立区・首なし死体遺棄事件

以上、写真はすべて毎日新聞社提供

アスキーのベストセラー

殺人心理

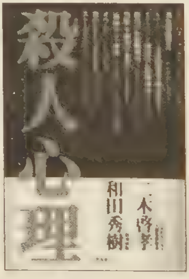
精神科医 **和田秀樹**

日刊ゲンダイ ニュース編集部部長 **二木啓孝**

気鋭の精神科医と名物記者が激論!!

「人はなぜ、人を殺すのか？」

犯罪を誘発した「東電OL殺害事件」 酒鬼薔薇聖斗には「性的倒錯」の資質あり 新潟少女監禁事件で、虐待少女が逃げなかった理由 他、心の闇を徹底解剖!!


殺人心理
二木啓孝
和田秀樹

ISBN4-7561-3615-X

定価:本体1,600円+税

業界激震!!
クレーム殺到!!

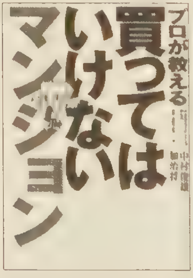
プロが教える 買ってはいけないマンション

元・長谷工コーポレーション副社長 **中村俊雄**

建設プロデューサー 作家 **加治将一**

業界裏事情を知る2人が、「正しい買い方」を伝授!!

元ゼネコン副社長と元不動産投資会社社長が欠陥マンションの見抜き方と悪質業者の手口を徹底公開。ウラのウラを知り抜いて良いマンションを安く買い叩け!!


プロが教える
買ってはいけないマンション
中村俊雄
加治将一

ISBN4-7561-3653-2

定価:本体1,300円+税

アスキーのベストセラー

テリー伊藤氏絶賛!!

だれがプロ野球を殺すのか

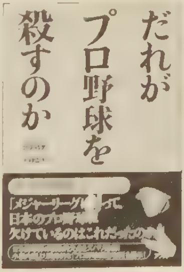
多摩大学教授 北矢行男
ノンフィクションライター 木村雷太

滅びゆく日本野球への提言書

プロ野球崩壊は、時間の問題だ！

「巨人という既得権益が、プロ野球をダメにする」「イチロー、新庄の活躍が、日本プロ野球をつぶす！」―他、日本野球界の根本的欠点をズバリ指摘！

ISBN4-7561-3817-9



だれがプロ野球を殺すのか

定価：本体1,400円+税

「超」整理手帳 2002

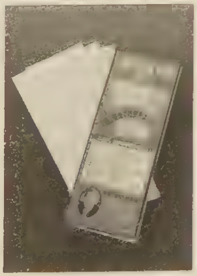
考案：野口悠紀雄

愛用者20万人のスーパー手帳!!

ベストセラー『「超」整理法』の著者・野口悠紀雄氏による画期的なタイムマネジメントを実現するスーパーツール！

スケジュールシートを広げて時間を〈見る〉

8週間分が一覧できる〈ジャバラ式の採用〉、コピー時代に対応する〈A4用紙完全対応〉、必要な月だけ持ち歩く〈抜き差し型構造〉などを具現化した手帳。



定価：本体1,200円+税

上野正彦［**著**］

1929年生まれ。医師、医事評論家、作家。元・東京都監察医務院長。専攻分野は法医学。解剖資格認定医。東邦医科大学卒。1955年、日本大学医学部法医学教室を経て、59年、東京都監察医務院に入り監察医となる。84年より院長。89年、退職。著書に、ベストセラーとなった『死体は語る』(89年、時事通信社)のほか、『死体は生きている』(角川書店)、『死体を語ろう』(97年、時事通信社)、『死体検死医』(97年、角川書店)、「自殺死体の叫び」(99年、ぶんか社)などがある。

天沼克［**構成**］

教育業界、建設業界を転々とし、アジアでの放浪を経て現在フリーのライター・エディターとして活躍中。鋭い分析に定評がある。

株式会社イシサキ［**企画・編集**］

ペーパークラフトや電気ロボット本を手掛けるかたわら、iモードやコンピュータ関連書籍も製作。
※「馬鹿道場」(http://www.ishisaki.com/baka/)

死体の嘘

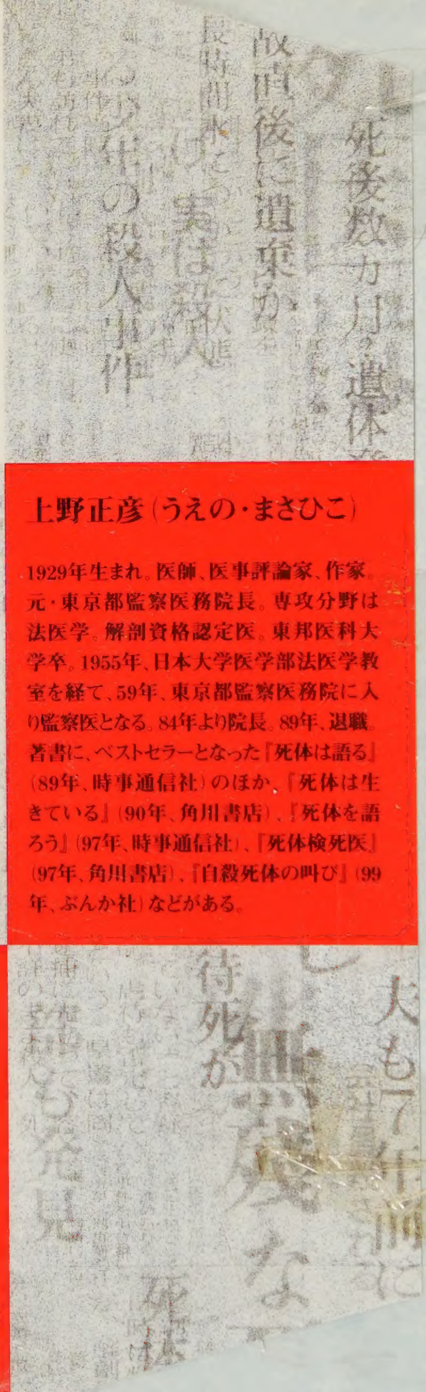
発行日　2001年10月30日　第1版第1刷
著者　上野正彦
編集　株式会社イシサキ
　　　浦信司
構成　天沼克
装丁　大谷タカシ
本文デザイン　大久保雅子
イラスト　森マサコ
編集人　日暮哲也
発行人　鈴木憲一
発行所　株式会社アスキー
〒151-0024　渋谷区代々木4-33-10
第 書籍編集部　☎03-5351-8550
営業部　☎03-5351-8194
印刷　図書印刷株式会社

©Ueno Masahiko
2001 Printed in Japan

ISBN4-7561-3932-9　●1191315

●本書は著作権法上の保護を受けています
本書の一部あるいは全部について、
株式会社アスキーから文書による許諾を得ずに、
いかなる方法によっても無断で複写することは禁じられています
●落丁本、乱丁本は、お手数ですが小社出版営業部までお送り下さい
送料小社負担によりお取り替えいたします
●定価はカバーに表示しています

498.9
ウ


死後数カ月の遺体
直後に遺棄か
実は殺人
件の殺人事件
も7年間
待死が
も発見

上野正彦（うえの・まさひこ）

1929年生まれ。医師、医事評論家、作家。元・東京都監察医務院長。専攻分野は法医学。解剖資格認定医。東邦医科大学卒。1955年、日本大学医学部法医学教室を経て、59年、東京都監察医務院に入り監察医となる。84年より院長。89年、退職。著書に、ベストセラーとなった『死体は語る』（89年、時事通信社）のほか、『死体は生きている』（90年、角川書店）、『死体を語ろう』（97年、時事通信社）、『死体検死医』（97年、角川書店）、『自殺死体の叫び』（99年、ぶんか社）などがある。

ISBN4-7561-3932-9

C0091 ¥1300E

発行 **アスキー**

定価：本体1300円＋税

手掛りなし
死因は脳内出血、虐待
物色の

リサイクル資料
港区立図書館